
ポケモン不思議のダンジョン・アスカの救助隊

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン・アスカの救助隊

【Nコード】

N8880E

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

目が覚めたらポケモンになっちゃってた！？これはゲームポケモン不思議のダンジョン青の救助隊・赤の救助隊をベースにした二次創作小説です。

プロローグ

「・・・それでは、本当によろしいんですね？」その子は私に聞いた。私は少し間をあけてから、うんと答えた。

「私が本当にあなたの言うふさわしい人物だって解るまでは・・・」

「ええ。解っています。私は約束を必ず守りますから。」

「それじゃあ・・・お願い。」

「はい。」

その子は目をつむり何か魔法でも唱えるかのように意識を集中し始めた。そして両手を前にゆっくりと私の方に向けると、その両手から光が現れた。何だか、優しい光って印象を私は受けた。その光はゆっくりと私に向かって来た。次の瞬間私はその光に包まれた。その光はとても暖かくて何だかお母さんに抱かれてるような感じになった。

その時、私は急に睡魔に襲われた。

「いよいよ・・・なのね・・・」

その言葉を最後に私は眠りについた。私の冒険はもう始まっていた。

プロローグ（後書き）

ども！今度はポケモン不思議のダンジョンの小説を書いてみました。前から書いてみたいなあと思ってたんで実行しました（笑）けど、まだバクフーン達の冒険が全部書き終えてないのに別の小説も書いて大丈夫なのか実は結構不安だったり（へーへ；）でも！僕は気合いで頑張って書いていきます！

第一話目が覚めたら

「・・・ここは・・・ここは何処だろう?・・・夢の中・・・なのかな?・・・風が気持ち良い・・・誰かが呼んでる・・・誰だろう・・・?」

「・・・・・・ねえ・・・・・・きて・・・・・・ねえ、起きてってば!」

「・・・うゝん・・・」私はゆっくりと目を開けた。

「あっ! 気がついた! 良かったあゝ!」

ここは・・・森の中? 何で私森の中にいるの?

「君ここで倒れていたんだよ? もう心配しちゃったよう!」

倒れてた? 私が? ん? ちょっと待ってよ、さっきから私に喋りかけているのって・・・

「・・・ヒトカゲ?」

「うん。僕はヒトカゲだよ。」

「・・・ええゝ!?!」

私は凄く驚いた! だってそうでしょ! ポケモンのヒトカゲが私に喋りかけてるのよ!?

「ヒ、ヒトカゲが・・・喋ったゝ!?!」

「な、何急に!?!」

「だ、だってヒトカゲが、てかポケモンが喋ったのよ!?! 驚くって!」

「変な事言うなゝ? そんな事言ったら君はどうなんだいチコリータ?」

「チコリータ? 何言ってるの? 私は人間よ!」

「人間? でもどっからどう見てもチコリータだよ?」

「だから私は人間・・・えっ?」

私は自分に手を当てて人間であると説明しようとした時驚いた! 手を見てみると人間の手ではなくて何かの生き物の前足のようなもの

になっていた。そして今気がついたけど、私四本足で立っている。後ろを見て見るとちっちゃい尻尾まで・・・きわめつけに頭にはチコリータの特徴である大きな葉っぱが・・・

「・・・ええ！？わ、私ポケモンになってるぅ！？」本日二回目の絶叫が森に響いた。

「・・・君、変わった奴だなく。仮に君が人間だとして、どうしてポケモンになったの？」

「それは・・・」

私は答えようとしたが答えられなかった。私が人間なのは間違いないんだけど・・・人間の頃の記憶が思い出せない。私って記憶喪失！？ハァゝ何か涙出てきそう（泣）

「どうしたのさ？」

「・・・思い出せないの！悪い！」

私はついヒトカゲにやつあたりしてしまった。

「何怒ってるの？まあ良いや。じゃあ、君の名前は？名前は覚えてる？」私の名前？私は・・・そうだ！私の名前は！

「アスカ・・・私はアスカよ！」

「アスカ・・・何か・・・変な名前だね（笑）」

「ムッ（怒）」

私はヒトカゲに思いっきり頭の葉っぱでビンタしてやった。ビンタを受けたヒトカゲのほっぺたは赤くはれた。

「い、痛いよ・・・」

「人の名前を変って言うからよ！」

全く！このヒトカゲには常識ってもんが無いのかねゝ！そんな事を思っていた時、突然大きな地震が！

「嫌だ！？地震！？」

私は地震が大嫌いなものゝ！！

「また地震か・・・最近多いんだよねえ。」

「よ、良く冷静にそんな事言えるわね？」

「慣れちゃって。」

慣れちゃってって！地震に慣れるとかここはどんだけ地震が多いのよ！？」

「・・・やっとおさまったね。」

「ハァ・・・本当に地震なんて大っ嫌い！」

「誰かゝ助けてゝ！！」その時向こうの方からこっちに近づいて来る一匹のポケモンが。あれは・・・バタフリー？

「どうしたのそんなに慌てて？」

「それが・・・地震がドーンで地面がガーンってなってピューって！！？」

「あの・・・訳が解らないんですけど（汗）」

このバタフリーかなりパニックってるわね。私とヒトカゲはとにかくバタフリーを落ち着かせた。

「ハァ・・・ハァ・・・す、すみません・・・あのですね、先程の地震で地割れがおきて私の可愛い息子のキャタピーちゃんがその地割れに落ちてしまったんです！」

「なんだって！？」

「大変！？何で母親のあなたがすぐに助けに行かないのよ！？」

「もちろんすぐに助けに向かいましたよ！ですけど、途中で他のポケモン達に襲われてしまって・・・助けようにも私の力じゃ・・・」

「ポケモンが襲ってきた？何で同じポケモンに襲って来るのよ？」

「最近頻発している自然災害のせいだよ。」

「自然災害？」

「説明は後でするよ！今はとにかくキャタピーちゃんを助けないと！アスカ！力を貸してくれる？」

何で次から次と問題が起きるのかな・・・でも、目の前で困ってる人・・・いやポケモンか。とにかく、困ってるのを放っておけないのよね！

「良いわよ！すぐに行くわよヒトカゲ！」

「うん！」

私とヒトカゲはキャタピーちゃんが落ちたとゆう地割れがあった場

所に向かった。これが、私とヒトカゲの最初の救助になった。

第一話目が覚めたら（後書き）

第一話完成です！

何か書いてて青の救助隊・赤の救助隊が懐かしいって思ってしまい
またプレイしたくなってしまうました（笑）

第二話初めての救助！VSアリアドス！

「ここね！」

私とヒトカゲはキャタピーちゃんが落ちてしまったという地割れがあった場所に来ていた。

結構・・・深いわねえ・・・

「おい！キャタピーちゃん！聞こえたら返事してー！」

ヒトカゲが大声でキャタピーちゃんを呼んでみたけど返事は無い。

「・・・返事帰って来ないね・・・」

「みたいね・・・良し、行くわよ！」

私とヒトカゲはゆっくりと下に降りて行った。

・・・意外に浅いわね。それに・・・何か洞窟っぽい雰囲気。地下洞窟ってどこかしら？

「・・・暗いね。」

「そうね。じゃ、ヒトカゲ、あなた先頭ね。」

「ええ！？ぼ、僕が前なの！？」

「こういうのは男が前に出るって相場が決まってるでしょ？それに、ヒトカゲの尻尾の炎で先を照らせば暗い道でも安心でしょ？」

「・・・解ったよ。」

私とヒトカゲは先に進んだ。

「・・・ねえヒトカゲ」

「何、アスカ？」

「さっきポケモンがポケモンを襲うのは自然災害が頻発しているせいって言ってたわよね？それってどういう意味？」

「簡単に言うと、自然災害が多すぎてポケモン達がおかしくなったって事。毎地震があったり地割れが起きたりする状況で普通でいられると思う？」

「・・・思わないわね・・・私だったら耐えきれないわね（汗）」

簡単なヒトカゲの説明を聞き終えた時、私達の目の前に三匹のポケモンが現れた。このポケモン達は確か・・・ケムツソ？

「・・・」

ケムツソ達が無言でこっちに近づいて来る。
ちよっと怖いんですけど（汗）

「ヒトカゲ・・・もしかしてこのケムツソ達？」

「うん・・・我を忘れてるんだと思う・・・気をつけて、いつ攻撃してくるか解らないよ！」

次の瞬間三匹のケムツソが私達に毒針攻撃して来た！

「わわ！？」

私達は何とか毒針攻撃を避ける事が出来た。

「もう危ないじゃないの！？怒ったわよ！えい！」私はさっきヒトカゲをビンタしたみたいに頭の葉っぱを思いっきり振り落とした。
すると、頭の葉っぱから別の葉っぱが現れて三匹のケムツソめがけて飛んで行った！

これは葉っぱカッター！私、本当にポケモンになっちゃったんだ！

「行くよ！火の粉！」

私の葉っぱカッターとヒトカゲの火の粉はケムツソ達に直撃した！
ケムツソ達は目を回しながら気絶した。

何かちよっと可哀想だけど・・・今は仕方ないのよね・・・とにかく、先に進まなきゃ！私とヒトカゲは再び前に進み始めた。しばらく進んでいくと・・・

「・・・ひっぐ・・・うう・・・お母さん・・・」

「ヒトカゲ！この声はもしかして！」

「うん！急ごう！」

私とヒトカゲは泣き声がする方へ向かった。

そこにはポケモンのキャタピーがいた。

良かった～！無事だったのね！

「キャタピーちゃんだね？もう大丈夫だよ。」

「・・・お兄ちゃん達誰・・・？」

「僕はヒトカゲ。彼女はアスカ。お母さんに頼まれて君を助けに来たんだよ。さあ、お母さんの所に帰ろう！」

「うん♪」

「ちょっと待って・・・何、この嫌な感じ・・・」

「どうしたの？」

私はその時誰かに見られてるような感じがした・・・殺気みたいな・・・凄く嫌な視線・・・

次に私が真上を見た瞬間、突然毒針の雨が！

「危ない！？」

私達は何とか岩陰に隠れて毒針を避ける事が出来た。

「危なかった・・・二人共大丈夫？」

「う、うん。」

「うう・・・こ、怖いよ（泣）」

「大丈夫よキャタピーちゃん！私とヒトカゲがちゃんとお母さんの所に帰してあげるから！」

・・・とは言ったものの、敵が誰で何処にいるのか解らないこの状況を何とかしないと・・・

私は注意深く周りを見た。その時、攻撃してきたポケモンが自分から姿を現した！

「あの蜘蛛みたいなポケモンは確か・・・アリアドスね！」

「何でこんな所にアリアドスが？アリアドスはもっと森の奥深くに住んでいる筈なんだけど・・・」

「そんなのはどうでも良いわよ！とにかく、あいつを倒さないと私達ここから出られないんだから！行くわよヒトカゲ！」

「解った！」

私とヒトカゲはキャタピーちゃんを岩陰に隠してアリアドスに向かって行った。

「これでもくらいなさい！葉っぱカッター！」

私は頭の葉っぱを思いっきり振り落として葉っぱカッターを放った。だけど、アリアドスはおしりから糸を出して壁に張り付けて、その

糸を素早く登ることによって私の葉っぱカッターは避けられてしまった！

意外に素早いじゃないの！

「これならどうだ！火の粉！」

ヒトカゲは火の粉を放った。虫タイプには効果抜群の炎タイプの火の粉ならアリアドスに大きなダメージを与えられる！

だけど、アリアドスはジャンプして火の粉を回避してしまった！しかも、ヒトカゲに糸を吐いて身動き出来ないようにしてしまった！

「うわっ！？」

「ヒトカゲ！？」

ヒトカゲはバランスを崩して倒れた。

「こんな糸、僕の炎で・・・」

ヒトカゲは何とか尻尾の炎を使って糸を焼き切ろうとしている。そうはさせないと言わんばかりにアリアドスがヒトカゲに向かって行った！

「このっ！」

私は思いっきりアリアドスに体当たりしてやった！アリアドスは少し吹っ飛ばされた。

「アスカ！」

「私が時間稼ぐからその糸を早く燃やしちゃって！」

「う、うん！」

アリアドスと私はしばらく睨みあった。

完全にイッチャってる目をしてるよこのアリアドス・・・

そんな事を私は思っていた次の瞬間アリアドスは私に向かって糸を飛ばしてきた！

「食らってたまりますかって！」

私はギリギリで糸を避けた。

「私は今チコリータなんだ・・・だから、あの技もきつと使える筈！えい！」

私は首の所に力を入れてみた。すると、何か首から木のつるみたいなものが伸びた！

やった！つるのムチが使えた！感覚は人間の手と同じね！良し！

「つるのムチ！」

私は近くにあった岩につるのムチを伸ばした。そして、少し勢いを付ける為に後ろに下がってからまるでゴムに弾かれたようにアリアドスに向かって飛んで行った！

つるのムチで勢いをつけた体当たり・・・いくら私より身体が大き
なアリアドスでもこれを受ければ・・・
と思ったんだけど、アリアドスはまだピンピンしている！

「やっぱダメ？」

次の瞬間アリアドスは私に毒針を放とうとした！

「伏せてアスカ！火の粉！」

私はすぐに伏せた。すると、私の頭上を火の粉が飛んで行った。火の粉はアリアドスに命中、さすがに弱点を突かれたからアリアドスは目を回して倒れた。

ふう・・・何とか倒せたみたいね・・・

「アスカ！大丈夫？」

「大丈夫・・・じゃないわよ！！ちゃんと狙ってから撃ってよね！
あなたの火の粉が私の頭の葉っぱにかすったじゃない！ちよっと焦
げちゃったし！」

「ご、ごめん・・・」

「・・・でも・・・ありがとう。助かったわ。」

「アスカ・・・」

「さて！早くキャタピーちゃんをお母さんの所に連れて行ってあげ
よ！」

「そうだね！おいでキャタピーちゃん！一緒に帰ろう！」

「・・・かっこいい♪」な、何？キャタピーちゃんの目がスッゴ
イキラキラ輝いてるんですけど（汗）ま、まあとにかく私達はキャ
タピーちゃんをお母さんのバタフリーの所まで連れて行ってあげた。

「キャタピーちゃん！」

「ママ〜！」

「あゝ良かった！無事だったのね！」

「うん！このお兄ちゃん達が助けてくれたから」

「本当にありがとうございます！なんとお礼をしたら良いか・・・」

「お礼だなんてそんなあ・・・僕達はただ当然の事をしただけですよ！ねっアスカ？」

「ええ！」

「・・・かっこいい♪」またキャタピーちゃんの目がキラキラ輝いてる（汗）

「ですが・・・せめてこれを受け取ってもらえませんか？」

バタフリーは私とヒトカゲに木の実を渡してくれた。

この木の実は・・・確かオレンの実・・・だったかな？

「私、お金持ってなくてこんな物しか渡せないんですけど・・・」

「もらっちゃって良いの？」

「ええ！」

「ありがとう！」

「それでは、私達はこれで・・・本当にありがとうございました！バタフリーとキャタピーちゃんは自分の家に帰って行った。

「ふう・・・何か急に疲れちゃった・・・」

「あれだけ動いたからね。それにしてもアスカ、結構強いんだね！普通のチコリータだったらああはいかないよ！」

「そ、そう？」

「あながち、アスカが人間だってのも嘘じゃないかもね。」

「あっ！信じて無かったのね！？」

「ごめんごめん！でも、アスカは嘘をつくような子じゃないって解ったから・・・僕は信じるよ！」

「ヒトカゲ・・・」

「・・・ところで、この後はどうする？」

「決まってるじゃない！何で私がポケモンになったのか、その原因

を探すのよ!」

「どうやって?」

「あっ・・・」

返答出来ない・・・(汗)

「・・・ねえ、もし良かったら・・・僕と救助隊やらない?」

「救助隊?」

「前にも言ったよね? 最近自然災害が頻発してるって。その自然災害で多くのポケモンが苦しんでる・・・救助隊はそんなポケモン達を助ける仕事なんだ! 僕の小さい頃からの夢なんだ! 今までパートナーが見つからなくてなれなかったけど、アスカとなら救助隊をやっっていけると思うんだ!

それに、救助隊になればいろんな場所に行く事になるから、アスカがポケモンになった原因ももしかしたら見つかるかもしれないですよ?」

うーん・・・救助隊ねえ・・・まあ確かに今は何の手掛かりも無いし・・・あても無く探すよりは良いかもね!

「良いわよ! 救助隊になってあげる!」

「本当!」?

「嘘言ってどうすんのよ?」

「アハハ・・・そうだよね! ありがとうアスカ! これからよろしくね!」

「よろしく、ヒトカゲ」私はつるのムチを伸ばしてヒトカゲと握手した。

「あっそうだ! アスカはまだ泊まる所が無いよね?」

「えっ? ま、まあ。ここに来たばかりだし・・・」

「だったら良い所があるんだ! ついてきて! 絶対アスカ氣に入るから!」

「あっちょっと待ってよ!」?

私は慌ててヒトカゲの後を追いつけた。しばらく進むと・・・

「ほら! ここだよ!」

私はヒトカゲが指差した先を見た。

「・・・うわぁ♪」

そこには草タイプが住みやすいように草をいっぱいにしきつめた家
が一つ。

何でか解らないけど、私今凄く嬉しい♪この感覚は私がチコリータ
になってるから感じる事なのかな？

「気に入ってくれたみたいだね！」

「とっても♪」

「ここはまだ誰も使っていないんだ。アスカが使って良いよ！」

「えっ！？良いの！？」

「うん！今日からここが、アスカの家だよ！」

「ありがとうヒトカゲ！あなた最高♪」

私はヒトカゲに思いっきり抱きついた。

「ア、アスカ、苦しいんだけど・・・」

「あっごめんごめん！」

「とりあえず、今日はゆっくり休もう！救助隊については明日詳しく
教えるから！」

「解った！」

「じゃあまた明日ねアスカ！」

ヒトカゲは自分の家に帰って行った。私は自分の家の中に入った。

まさに草タイプの為の家って感じね！この草のベッドなんかもう最
高ね♪ふう・・・今日は疲れたからもう寝ようかな？

また明日ヒトカゲが来るんだし・・・

「・・・すー・・・すー・・・」

私はあっという間に熟睡した。

第二話初めての救助！VSアリアドス！（後書き）

第二話完成です！

あまり忠実に不思議のダンジョンを書いても面白くないのでいろいろ考えてアリアドスを出してみました！

第三話 コイルを救え！VSライボルト！

「・・・ふぁー・・・もう朝なの・・・」

私はゆっくりと身体を起こした。そして、改めて自分の身体を見てみる。・・・やっぱり、私はチコリータのままだ・・・夢じゃないんだね・・・でも、何で私ポケモンになっちゃったんだろう？・・・ダメだ・・・いくら考えても思い出せない・・・しかも考えてたらちよつと頭、痛くなっちゃったよ・・・

「・・・もう少し寝てよう・・・」

私は再び眠りについた。それからしばらくして・・・

「・・・いやぁ・・・二度寝したら何だか気分がすっきりしたわ！まあ私がチコリータなのは変わらないけど・・・そういえばヒトカゲが今日救助隊についていろいろ教えてくれるって言ってたわね・・・とりあえず、外に出てみますか！」

私は外に出た。そしたら、目の前にヒトカゲがいて横になって寝ていた。・・・何してんの（汗）

「ちよつとヒトカゲ！」

「・・・はっ！」

ヒトカゲが目覚めた。

「何してんのよ？」

「いやぁ、アスカと救助隊が出来ると思ったら僕もうワクワクしちゃってさぁ！明け方からここでアスカが来るの待ってたんだけど・・・つい寝ちゃった（笑）」

「寝ちゃったって（汗）」

「まあとにかく！今日から救助隊開始だよ！頑張ろうね！」

「うん・・・ところで、救助隊はポケモン達を助けるのが仕事ってのは解ったけど・・・それ以外は何をするの？」

「そういえばまだ説明がまだだったね！まず何から話せば良いかな

あ・・・」

ヒトカゲは考えている。

「あっそうだ！」

そう言うのと私の家にあるポストの所に向かった。

「ポストの中に何か入ってるの？」

「救助隊を始めたら届く筈なんだ・・・あっ！あったあった！救助隊スターターセット♪」

「救助隊スターターセット？」

「救助隊を始めたらずもろえるんだ！」

「もらえるって・・・何かの通販じゃないんだから（汗）」

ヒトカゲは救助隊スターターセットを開けた。

中には救助隊バッジと道具箱、そしてポケモンニュースが入っていた。

「何それ？」

「まずは救助隊バッジ。これは僕達が救助隊である証だよ。次に道具箱。これは名前の通り道具を入れる物だよ。とりあえず昨日バタフリーからもらった木の実はこちらに入れておくね。そして最後にポケモンニュース。これは救助隊に役立つ情報が書いてあるんだ。」

「へえ。」

「あとは・・・何か入って無いか・・・」

ヒトカゲはポストの中を調べた。けど、何も入って無かった。

「やっぱり空っぽか・・・救助の依頼があれば手紙が届くんだけど・・・」

「まあ私達、救助隊になったばかりだから依頼はさすがにきて無いでしょ。」

「ハハハ・・・そりゃそうだよね・・・あっそういえば僕達の救助隊のチーム名考えて無かったね！」

「チーム名？」

「やっぱ救助隊やるんだから名前が無いとダメでしょ？何て名前が良いかなあ？」

チーム名ねえ・・・まあ確かにやるんだったら名前があった方が良
いけど・・・

「ねえ、ポケモンズはどうかな？」

「うーん・・・何かありきたりねえ・・・」

「そうかな？うーん・・・じゃあ何が良いかなあ？」

「こういう時ってなかなか良い名前が出てこないのよね・・・

「・・・じゃあチームアスカってのはどうかな？」

「私の名前をチーム名にするの！？」

「ダメかな？救助隊が出来るのはアスカのおかげだから、アスカの
名前をチーム名にしようかなあって考えたんだけど・・・」

私の名前がチーム名に・・・何か恥ずかしいわね・・・でも、他に
良いチーム名思いつかないし・・・まっ良いか！

「良いわよそれで！」

「良かった！じゃあ、今日から僕は救助隊のチームアスカだね！」
私達のチーム名が決まった時、空からペリッパーがやって来た。
ペリッパーはポストの中に何か入れたらすぐに行ってしまった。

「何あのペリッパー？」

「あのペリッパーはポケモンニュースとか、あとは救助隊への依頼
の手紙とかを運んでくれるんだよ。」

「ふーん。郵便屋さんみたいなものね？」

「それより中身を見てみようよ！もしかしたら救助の依頼かもしれ
ないよ！」

「まさかぁ・・・」

出来たばかりの救助隊に依頼なんて来るとは思えないけど・・・私
はとりあえずポストをチェックした。中には手紙が・・・私は手紙
を読んでいた。

「ビビビ！キミタチノコトハキヤタピーチャンカラキイタ！

キミタチニオネガイガアル！

ジツハナカマノコイルガフタリ、ミヨウナデンジハノエイキョウデ

クツツイテシマッタノダ！

レアコイルトシテイキテイコウニモ、コレデハチュウトハンパダ！
タノム！ナカマヲタスケテクレ！ビビビ！

コイルノナカマヨリ」

「読みずら！？何で全部カタカナなのよ！」

「これでもマシなほうだよ？コイルは皆、あまり字を書くって事を
しないポケモンだからね。」

「このコイルに会ったら私が字の書き方を徹底的に教えてやるから
！」

「そんな事よりコイルの救助、行くんでしょ？」

「せっかく依頼してきてくれたんだもの！断る訳にはいかないでし
よ？」

「よし！じゃあ早速行こうよ！」

「うん！」

私達は依頼主であるコイルがいる電磁波の洞窟に向かう事にした。

電磁波の洞窟の入口には手紙を出したコイルがいた。

「おお！来てくれたか！ビビビ！」

「あなたが依頼主のコイルね？」

「そうだ！ビビビ！仲間はこの洞窟の奥にいるんだ！本当は俺が助
けたいのだが・・・君達に出した手紙に書いてあるようにこの洞窟
には妙な電磁波が発生しているんだ！そいつのせいで気分が悪くな
ってしまっんだ・・・」

「電気タイプのポケモンが気分を悪くする電磁波か・・・安心して
！僕達チームアスカが君の仲間を必ず助けてあげるから！行こうア
スカ！」

「ええ！」

私達は電磁波の洞窟に入った。

「電磁波の影響で二匹のコイルがくつついた・・・か・・・でも、
何でその電磁波が発生したのかしら？」

「もしかしたらこれも自然災害の影響なのかもしれないね・・・」
その時、私達の前に電気タイプポケモンであるビリリダマ・エレキッド・プラスル・マイナンが現れた。

・・・何か・・・前に会ったケムツソと同じ雰囲気・・・もしかして・・・何て思ってたらず揃って電気ショックで攻撃してきた!?
「きゃあ!?!」

私とヒトカゲは間一髪で電気ショックを回避した。

「大丈夫アスカ?」

「え、ええ・・・」

「・・・」

四匹の電気ポケモンは無言で私達にゆっくりと迫ってくる。

「四対二か・・・ちょっと不利かもしれないね・・・」

「でもやるしかないのよ! 葉っぱカッター!」

私は頭の葉っぱを思いっきり振り落として葉っぱカッターを放った!

「僕も! 火の粉!」

ヒトカゲは火の粉を放った。のは良いんだけど、私の葉っぱカッターにヒトカゲの火の粉が当たっちゃって葉っぱを全部燃やしちゃった!?

「ちよっとヒトカゲ!?!」

「ご、ごめん!」

いきなりコンビネーションバラバラな私達。

攻撃が不発に終わった隙にエレキッドが雷パンチで攻撃してきた!

「つるのムチ!」

私はつるのムチを使って高くジャンプして雷パンチを回避した。

そう簡単に攻撃を受けてたまるもんですかって! 今度はこっちの番よ!

「もう一回、つるのムチ!」

私はつるのムチでエレキッドを縛りあげて動きを止め、その間に落下スピードを利用して体当たりを決めた! エレキッドは目を回して倒れた!

まずは一匹！

「さすがアスカ！」

「ヒトカゲ後ろ！？」

ヒトカゲの後ろからプラスルとマイナンがスパークしながら突っ込んでいた！

間に合って！

「つるのムチ！」

私はつるのムチをヒトカゲに巻き付け、高く持ち上げてスパークから助けた。

「火の粉！」

ヒトカゲは持ち上げられた状態で火の粉を放った。火の粉はプラスルとマイナンに直撃した。プラスルとマイナンは目を回して倒れた。

「ふう・・・ありがとうアスカ！」

「もう・・・気をつけなさいよね！」

「あっ！？アスカ後ろ！？」

「えっ！？」

振り返るとビリリダマがいた。

何か光ってる・・・まさか自爆！？

次の瞬間ビリリダマは私の思った通り自爆した！「・・・あ、危なかった・・・（汗）」

ヒトカゲが上にあった岩にしがみついていた、私はそんなヒトカゲにぶら下がっている。間一髪私は自爆から逃げる事が出来た。

「お、重い・・・」

「失礼ね！私はそんなに太ってないわよ！」

私達は地面に下りた。

「次に重い何て言ったら怒るからね！」

「もう怒ってると思うんだけど・・・」

「何か言った？」

「い、いや、何でも（汗）そ、それより早く先に進もう！コイル達が助けを待ってるから！」

私達は先に進んだ。しばらくすると広い場所に出た。

「ここで行き止まりみたいね？」

「そうだね・・・あっ！コイル達だ！」

ヒトカゲが指差す先には二匹のコイルがいた。

見事にくっついてるわね・・・

「助けに来たよ！」

「さあ、この洞窟から出ましょ！」

「助かったー！一生このままかと思ってたんだ！ビビビ！」

私達は洞窟から出ようと出口に向かおうとした。だけど、その道を塞ぐように一匹のポケモンが立ち塞がった！

あのポケモンは・・・確か放電ポケモンのライボルト！

「何でこんな所にライボルトが？」

「考えるのはあとにした方が良さそうよヒトカゲ・・・あのライボルト、昨日会ったアリアドスと同じ目をしてる・・・」

「・・・そうみたいだね・・・コイル達は下がってて！」

ヒトカゲに言われ、コイル達は安全な場所まで下がった。次の瞬間ライボルトは身体から物凄いエネルギーの電気を放出した！

凄い電気エネルギー・・・直接受けた訳でも無いのに、ビリビリしてくる・・・

「おかしい・・・ライボルトがこんなに強い電気を出せるなんて・・・もしかして！」

「何か解ったの？」

「電気タイプのポケモンは強い電気を受けると身体にその電気が溜ってしまふんだ。そうなると、自分で自分の力をコントロール出来なくなってしまうって暴走してしまうんだ！」

「つまり、今のライボルトは暴走状態って事？」

「多分そうだと思う・・・」

その時ライボルトは私達に雷を放ってきた！

「わっ！？」

私達はギリギリで雷を回避した！

「危なかった・・・ヒトカゲ！ライボルトの暴走を止めるにはどうすれば良いの？」

「ライボルトの中に溜っている電気を全部放出させれば止まる筈だよ！」

「解った！」

「解ったって・・・アスカ一体何をするつもりなの？」

「こうするのよ！」

私は一本のつるのムチをライボルトに巻き付けて、そしてもう一本のつるのムチを地面に突き刺した！

「さあライボルト・・・思いっきりきなさい！」次の瞬間ライボルトは最大パワーで雷を放った！その雷は私が巻き付けたつるのムチを伝って私に来了！

「くっ！？」

もう一本のつるのムチを地面に刺して電気を地面に逃すようにしてゐるんだけど・・・それでも、結構キツイ！

「早く・・・電気を使いきってよ・・・」

「アスカ！」

その時ヒトカゲが私に抱きついた！その状態で地面にメタルクローを突き刺した！

「ヒトカゲ！？」

「アスカだけに辛い思いはさせない！僕も手伝う！」

・・・それからしばらくして、ようやく全ての電気を使い果たたライボルトは正気を取り戻した。

「あ、あれ？俺、今まで何を？」

「やっと正気に戻ったようね・・・」

「みたいだね・・・」

「君達大丈夫か！？ビビビ！？」

コイル達が私達の所にやって来た。
ってあれ？何かコイル達、ちゃんと離れてる？

「あなた達・・・」

「あれ！いつの間にか俺達くっついてない！」

「ライボルトの強すぎた電気エネルギーがくっついた原因だったみたいだね？」

「わーい♪身体が離れた♪ビビビ♪」

コイル達は凄く喜んでいる。

「どうやら、迷惑をかけてしまったみたいだな・・・すまなかった。」

「うんうん・・・それよりも、あなたも無事で良かったわね！」

「うん！さあ、皆この洞窟から出よう！」

私達は電磁波の洞窟から外に出た。その後、コイル達は私達にお礼として木の実やお金の500ポケを渡してくれた。

ライボルトは余程迷惑をかけた事がショックだったのか最後まで私達に謝罪しっぱなしだった。

救助を終えた私達は私の家に帰って来た。

「救助隊としての初めての救助、成功して良かったねアスカ！」

「うん・・・ヒトカゲ、あの時はありがとうね。」

「えっ？」

「私がライボルトの電気を放出させようとした時、一緒にやってくれたでしょ。」

「あれは当然だよ。アスカだけに辛い思いをさすたくなかったからね！でも、アスカも無茶するね？」

「あれしか方法が思いつかなかったんですもの・・・今日は疲れちゃった・・・」

「そうだね・・・今日はゆっくり休もう！それじゃアスカ、また明日ね！」そう言ってヒトカゲは自分の家に帰って行った。私は家の中に入ってすぐに草のベッドに寝転がって熟睡した。

第三話コイルを救え！VSライボルト！（後書き）

第三話完成です！

第四話ディグダを救え！VSエアームド！

・・・ここは・・・ここは何処かしら？・・・もしかして夢の中？・・・あれ？誰かいる。知っている人・・・なのかな？・・・うゝん・・・ダメだ、思い出せない・・・」「・・・うゝん・・・」私は目を覚ました。

何だか夢を見ていたような・・・だけど肝心な内容を忘れちゃった・・・まっ良いか♪そういえば、手紙は来てるのかな？ちよつと見てみよつと！

私はポストの中をチェックしてみた。だけど中には何も入って無かった。

「何も入って無い・・・悲しいわねえ。」

「おはようアスカ！早いね！あつポストチェックしてたんだ！それでどうだった？」

「ダメ、なんにも入って無いわ・・・」

「・・・やっぱり救助隊作ったばかりだからかな？しょうがない、今日はポケモン広場に行つてペリッパ―連絡所で救助の情報が無いか調べてみよう。」

「ポケモン広場？ペリッパ―連絡所？何それ？」

「口で説明するより見た方が早いね！ついてきて！」

「あつ待つてよヒトカゲ！」

私はヒトカゲのあとを追いかけた。

「ここがポケモン広場だよ！」

そこにはいろんなポケモンがいていろんなお店を出していた。ここがポケモン広場・・・私の家から凄く近い所にあるのね。

「どう？結構賑やかな所でしょ？」

「そうね！ねえヒトカゲ、あそこにいる二匹のカクレオンは何のお店をしているの？」

「あそこはいろんな道具を売っている道具屋さんだよ。ちなみにあ

のカクレオン達は兄弟なんだ」

「へえー・・・じゃああのペルシアンは？」

「あそこは銀行だよ。」

「銀行・・・まさかポケモンの世界でその言葉を聞くなんてね（汗）じゃああそのガルーラは？」

「あそこは持ちきれなくなった道具何かを預かってくれる所だよ。」

「ふーん・・・結構たくさんあるのね！」

「でしょ。それじゃ、ペリッパ―連絡所に行こうよ！場所はポケモン広場から西の方向だよ！」

私とヒトカゲはペリッパ―連絡所に向かった。

あれがペリッパ―連絡所・・・建物がペリッパ―の形をしているわね・・・

「ほら、あそこに掲示板があるでしょ？あの掲示板には救助の依頼が載っているんだ。」

本当だ！随分たくさん依頼が載ってるわねえ！それだけ困っているポケモンがたくさんいるって事ね・・・

「それでヒトカゲ、ここに載ってる依頼を受けるにはどうすれば良いの？」

「受けたい依頼を見つけたらペリッパ―に言うんだ。そうすれば依頼を受けられるよ。」

「解ったわ。じゃあとりあえず・・・」

私は掲示板に載っている依頼全てを受ける為にペリッパ―に伝えた。「一気に五件の依頼を受けるの！？」

「そうよ。偶然にも依頼主全員同じ電磁波の洞窟にいるらしいし。それに、救助を何回も繰り返さないと私達はいつまでたっても有名にはならない・・・つまり、依頼の手紙も来ないって事よ！」

「確かにそうだけど・・・これは結構ハードスケジュールだよ？」

「大丈夫大丈夫！なんとかなるわよ！ほら、早速電磁波の洞窟に行くわよ！」

「あつ待ってよアスカ！？」 私達は依頼主がいる電磁波の洞窟に向

かった。今回受けた依頼の内容は迷子になったポケモンを探してほしいという依頼が三件、オレンの実やモモンの実の配達が二件である。

何か救助とは無関係の依頼が二件ほどあるような気がするけど（汗）まあ、困ってるなら助けないとね！

私達は電磁波の洞窟に着くとすぐに迷子になったポケモンを探した。意外に早く迷子を見つける事が出来た私達はその後木の実の配達を済ませた。仕事を終らせた私達は私の家に帰って来た。

「はあゝ・・・疲れたわゝ・・・」

「そりゃ五件全部やったからね・・・今日はもう休もうか？」

「そうね・・・じゃあ、また明日ねヒトカゲ。」

「うん、お休みアスカ」ヒトカゲと別れた私は家に入るとすぐにベッドに寝転がった。すぐに熟睡した私はまた夢を見た。・・・また夢か・・・はあゝ殺風景な夢ねゝ・・・どうせなら花畑とか綺麗な所の夢を見たかったなゝ・・・あれ？誰がいる？あれって・・・前に見た夢の人かしら？何か語りかけてるみたいだけど・・・良く聞き取れないわね・・・

その時、地震が！

な、何で夢の中で地震が起きるのよ！？しかもかなりリアル何ですかど！？地震は大嫌いなのにゝ（泣）

「・・・うゝん・・・はっ！」

私はうなされながら目覚めた。

「ハア・・・ハア・・・嫌な夢だったわねゝ・・・もう、本当に地震なんて大嫌い！」

「あのゝ・・・もし？」

「えっ？」

辺りを見たけど誰もいない。・・・空耳？

「もしもし？あのゝアスカさん・・・ですよね？」空耳じゃなかった！

「・・・声はするけど姿は見えず・・・何処よ？」

「あつもしかして姿が見えない？これはどうも失礼しました！」

モコッ！地面からいきなりポケモンが出てきた！このポケモンは確かモグラポケモンの・・・

「はじめまして！私はダグトリオと申します！実は・・・昨日の夜地震があった後、私の子供であるディグダが襲われまして・・・高い山の頂上に連れ去られたんです！そんなところ、私はとても登っていけないし・・・ですので、ここは一つアスカさんをお願いしたいという訳なんです。ディグダを拐ったのはエアームドってポケモンです！とても凶悪な奴なんで気をつけて下さい。なにとぞ、よろしくお願いします！ではっ！」

ダグトリオはまた地面に潜っていった。

「・・・何か一方的にお願いされちゃった（汗）夜に地震ね・・・リアルだったのはそのせいね・・・まあとにかく、依頼されたからには断る訳にはいかないわね！行きますか！そろそろヒトカゲも来る頃だし！」

私は外に出た。そしたら予想通りヒトカゲがいた。

「おはようアスカ！」

「おはよう。そういえばヒトカゲ、さっき依頼を受けたわよ。」

「え！？本当に！？」

「本当です！」

モコッ！またダグトリオが地面から出てきた！

「私の子供、ディグダが拐われたんです！場所は鋼山の頂上です！なにとぞよろしくお願いします！ではっ！」

またダグトリオは地面に潜っていった。

「・・・いちいち忙しいポケモンねえ（汗）」

「・・・な、なるほどね・・・じゃあ、行こうかアスカ？」

「そ、そうね！」

私達は鋼山に向かった。「ここが鋼山・・・」

「うん・・・そしてこの鋼山の頂上にディグダが・・・」

「行くわよヒトカゲ！」

「OK!」

私達は鋼山に突入した。

「にしてもあのダグトリオ、結構強引よねえ!」

「確かにねえ。用件だけ言っただけに潜っちゃうしね(汗)」

「まあ依頼してくれるのは嬉しいけどね・・・所で、この山意外に高いわね。どの位あるのかしら?」

「高さは解らないけど、この辺の山では小さい方だった筈だよ?」

「ふん・・・って言ってる時に、やっぱり来たわよ!」

私達の目の前にダンバルが二匹とココドラが二匹現れた!

「さすが鋼山、ポケモンまで鋼タイプとはね。草タイプの私にはちよっと不利ね・・・」

「ここは僕に任せてアスカ!火の粉!」

ヒトカゲが火の粉をココドラ達に放った。鋼には炎、効果は抜群だね!火の粉を受けたダンバルとココドラは倒れた。

「どんなもんだい!」

「やるじゃないヒトカゲ!今回は頼もしいじゃないの!」

「今回はじゃなくていつも僕は頼もしいんだよ!」

「はいはい、じゃあそうしといてあげるわよ。」「・・・怖いよ」

(泣)「その時、何処からか声が聞こえた。」

「ヒトカゲ・・・今の声は!」

「うん、僕も聞こえた!急ごう!」

私達は急いで声がする方へ向かった。

「・・・ここが頂上ね・・・ディグダは何処に?」

「あっ!アスカ!彼処にいたよ!」

ヒトカゲが指差す先を見たら確かにディグダがいた。

あんな高い所に!

「おーい!大丈夫?助けに来たよ!」

「・・・こ、怖いです」震えてる・・・そりゃそうよね、誘拐されたうえにあんな高い所にいるんだもの・・・

「あんた達!何しに来たザマスか!?」

突然空からエアームドが舞い降りてきた。

ザマスって・・・今時珍しいわねえ（汗）

「君がエアームドだね！僕達は救助隊のチームアスカ！ディグダを助けに来た！エアームド、悪さしないでディグダをすぐに解放するんだ！」

「何言ってるザマス！悪さをしてるのはコイツらザマス！毎晩毎晩地震が起きて安心して眠れないザマス！それもこれもコイツらが地底で暴れてるからザマス！だから、お仕置きをしてやってるザマス！」

ディグダ達が暴れてるから地震が起きてる？いや、常識で考えてディグダ達が暴れたぐらいじゃあ地震なんて起きないでしょうに！

「エアームド！あなたは誤解しているわ！確かに最近地震が多いわよ！だけど、常識で考えてディグダ達が暴れたぐらいじゃあ地震なんて起きないでしょ？」

「うるさいザマス！！文句あるならバトルザマス！！」

エアームドは戦闘体勢に入った。

「・・・ダメねあれは。完全にキレてるわね・・・前のライボルトやアリアドスみたいに暴走してる訳じゃないみたいだから話し合いで解決したかったんだけど・・・」

「バトルするしかなさそうだね？」

「はぁ・・・しょうがないわね・・・行くわよヒトカゲ！」
「解った！」

私達はエアームドに向かって行った！

「火の粉！」

ヒトカゲはエアームドに効果がある炎技の火の粉を放った！

「そんなの当たる訳無いザマス！」

そう言っただけでエアームドは上昇して火の粉を回避した。

・・・やっぱり空を飛ばれるとこっちの攻撃は当たりづらいわね・・・

「これでもくらうザマス！スピードスター！」

エアームドが私達に向かってスピードスターを放って来た！

「葉っぱカッター！」

「火の粉！」

私とヒトカゲは葉っぱカッターと火の粉を放ってスピードスターを打ち消した。

「今度は私の番よ！つるのムチ！」

私はつるのムチでジャンプした！

「凄いアスカ！エアームドの上を取った！」

「葉っぱカッター！」

私はエアームドの上から思いっきり葉っぱカッターを浴びせてやった！

「そんな葉っぱ、効かないザマス！」

葉っぱカッターはエアームドに直撃したんだけど、やっぱり鋼タイプ、更には飛行タイプまで持つてるエアームドには全然効かないみたい。

「つつく攻撃を受けるが良いザマス！」

エアームドが私に接近して来た！待ってたわよこの時を！

「つるのムチ！」

私はエアームドにつるのムチを巻き付けて縛りあげた！

「は、離すザマス！？」

「嫌よ！ヒトカゲ！」

「火の粉！」

つるのムチで動けなくなったエアームドにヒトカゲが火の粉を浴びせた！

「あ、熱いザマスー！？」

「仕上げは私よ！せーのー！！」

私はエアームドをジャイアントスイングする感じで振り回した！そして、遠心力で勢いがついたところで私はエアームドを地面に向かって投げた！エアームドは地面に叩きつけられた！

「やった♪」

「やったねアスカ♪」

「イタタタ・・・負けたザマス・・・ここは一旦逃げるザマス!!」
エアームドは凄いスピードで空に飛んで行った。

「さてと・・・ディグダ!! エアームドは追い払ったから早く下り
てきなさ!!」

「ダ、ダメです・・・怖くて動けないです(泣)」

「・・・しょうがないわね・・・今行くから待ってなさいね!!」
私はディグダの所に行こうとした。

「あっ!! 待ってアスカ!?!」

いきなりヒトカゲに止められた!

「な、何よヒトカゲ?」

「下を見てみなよ!」

「下?」

私は下を見てみた。

「・・・が、崖!!? しかも下が全く見えないじゃないの!?!」

「あのまま進んでたらアスカ落ちてたよ! 危なかったねえ!」

「ありがとうヒトカゲ・・・でも困ったわね・・・つるのムチを伸
ばしても彼処まで届きそうにないし・・・」

「ビビビ! 俺達に任せろ!」

突然何処からか声が聞こえた! ビビビって・・・もしかして? 何て
思ったら空からコイルが二匹やって来た!

「あなた達はこの間のコイル達じゃないの!」

「話は聞かせてもらった! 我々に任せろ! 我々が空からディグダを
助ける!」

コイル達がディグダの所に向かった。

「我々に捕まるんだ! ビビビ!」

「心配するな、間違っても感電したりしないから! ビビビ!」

その後、ディグダはコイル達のおかげで助ける事が出来た! ひとま
ず私達は私の家に向かう事にした。

「怖かったです・・・それにずっと高い所にいたせいか、まだ足

が浮いてる感じなんです・・・」

・・・あ、足？　そういえばディグダとかダグトリオっていつも上半身しか見た事なかったけど・・・やっぱりあるんだ足。

「ま、まあでも無事で良かったよ！」

「はい。本当にありがとうございます！」

「おお！　助かったのかー！　良かった良かった！」　突然何処からか声が聞こえた。けど、何処見ても私達以外誰もいない。この展開・・・朝にもあったような・・・

「なんだろう？　声はすれども姿は見えず・・・」

「・・・あつもしかして姿が見えない？　これはどうも失礼しました！」

モコッ！　また突然地面からダグトリオが現れた！・・・普通に出てこれないのかしら（汗）

「あっパパー！」

「えっ！？　ダグトリオってゐだったの！？」

てっきり私って自分の事言ってるから♀だとばかり（汗）見掛けによらないわね・・・

「ディグダ！　心配したぞ！　怪我はなかったか？」　「うん。怖かったけど大丈夫。アスカさん達のおかげでね！」

「ありがとうございます！　おかげで助かりました！」

「お礼ならコイル達にした方が良いわ。今回の救助はコイル達の力が無かったら成功しなかったから。」

「それはそれは。本当にありがとうございました！」

「いやいや、助けたのは当然の事だ。それに・・・進化系がさんみいったいというあたり・・・親近感も覚えているのだ。やはりポケモン同士、助け合わなくては。」

「いやはや、本当にかたじけない。・・・それではアスカさん、ピカチュウさん。本当にありがとうございます！　ではっ！」

そう言ってディグダとダグトリオは地面に潜った。

「じゃあ我々もこれで・・・」

コイル達も帰ろうとした。

「あっちよっと待って！」だけど、ヒトカゲがコイル達を引き止めた。どうしたのかしら？

「何だ？」

「ねえ……もし良かったら、僕達の仲間にならないかい？」

「我々が？」

「うん。今回の救助はコイル達がいなかったら成功しなかった訳だし……今後は救助するにも仲間が必要だなって思ったんだ。アスカもそう思うよね？」

「そうね……確かに私達の力だけだと出来る事が限られてくる……仲間が必要ね！」

「だよね！ねえどうかな？僕達救助隊の仲間になってくれないかい？」

「救助隊か……前から興味はあったんだが……しかし、すぐに救助しに行こうにも我々の住んでる所はここからだいぶ離れている……何処か近くに我々が住みやすい場所はあるのか？」

「それは……」

ヒトカゲ黙っちゃったよ……て事は無いんだ……

「そうか……無いのか……仕方ない、救助隊の事は諦めてくれ。それじゃあ！ビビビ！」

コイル達は帰ってしまった。

「うゝ残念……」

「まあ確かに彼らの住む場所が近くにないとすぐに救助しにいけないからね……」

「……あっそうだ！」

「な、何？どうしたのよヒトカゲ？」

「明日ポケモン広場に行こうよ！」

「広場に？良いけど……なんで？」

「この間行った時にはいなかったけど、ポケモン広場にはポケモンが住める場所を売ってくれるお店があるんだ！」

「住める場所を売ってくれる？そんな店があるの？」

「うん。プクリンがやってるんだ！プクリンならコイル達の住める場所を売ってくれると思うんだ！とにかく明日ポケモン広場で集合だよ！」

そう言ってヒトカゲは自分の家に帰ってしまった。

「・・・行っちゃった・・・でも、ヒトカゲお金あるのかしら？住む場所を買いって事はだいぶお金かかると思うんだけど・・・まあ良いわ。明日になれば解る事だし。今日は疲れたわ・・・さっさと寝よう。」

私はベッドに直行してすぐに熟睡した。

第四話ディグダを救え！VSエアームド！（後書き）

第四話完成です。

第五話救助ランクゴールド！チームFLB登場！（前書き）

ヒトカゲに言われてポケモン広場のプクリンのお店に行く事になったけど・・・お金あるのかしら？

第五話救助ランクゴールド！チームFLB登場！

私はまた夢を見ていた・・・いつも殺風景なのよね・・・あら？あれは・・・いつも夢の中に出てくる人だ・・・この人は誰なんだろう？・・・いつも何か言ってるんだけど・・・良く聞き取れないのよね・・・あっ！今回はちょっと聞き取れる！・・・えっ？人間？役目？あっ！ちょっと待ってよ！もう少し話を聞かせて！

「待って！・・・ってあれ？」

私は目覚めた。

結局何を言ってるのか解らずじまいか・・・

「ふぁ・・・何か夢見る程熟睡した筈なのに・・・まだ眠いわねえ・・・外の空気吸ったらちよっとは目が覚めるかな？」私は外に出た。そしたらタイミング良くヒトカゲがやって来た。

「おはようアスカ！」

「おはようヒトカゲ・・・ふぁ・・・」

いけない、またあくびが・・・

「あはは！どうしたの？アスカ？寝惚けた顔して（笑）」

「うるさいわね・・・最近見る変な夢のせいよ！」

「変な夢？一体どんな夢を見たの？」

私はヒトカゲに私が見る夢の話をした。

「・・・なるほどね・・・そういえば、アスカ実は人間だって言ってたよね？アスカが見るその夢ってアスカがポケモンになったのとか関係があるのかも知れないね？」

「そうなのかな？」

「ところでアスカはどう思ってるの？人間に戻りたいの？」

「そういえば・・・今までそんな事考えた事なかったわ・・・」

「どうだろう・・・」

「あれ？悩んでるの？まあでもそうだろうね！僕と一緒にいたほうが楽しいもんね！」

「まあ賑やかなのは確かねえ。」

「ところで今日は広場に行くって約束だったよね。早速行く？」
「そうね。」

私達はポケモン広場に向かって行った。

「ほら！ペルシアンの銀行の横にるのがプクリンだよ！あそこで住む所を貰えるんだ！」

「貰えるのは解ったけど・・・ヒトカゲお金あるの？誰かが住む所を買うには結構お金かかると私思うんだけど・・・」

「大丈夫大丈夫♪さあ行こうアスカ！」

大丈夫って・・・その自信はどっから来るのよ（汗）ってヒトカゲ先に行っちゃってる！？

「ちよっと待ちなさいよヒトカゲ！？」

私は慌ててヒトカゲを追いかけた。

「こんにちわ！」

「いらっしやい♪ここはプクリンの友達サークルだよ♪おや？始めて見る顔だね？・・・あっ解った！君達も救助隊始めたんだね！だったらここはピッタリ！ここは救助隊の仲間の住む所を貰える場所なんだ！実は今特別サービスをしていてね。救助隊を始めたばかりのポケモンには無料で住む所を提供してるんだ！」
「無料で提供！？・・・あなるほど。だからヒトカゲあんなに自信たっぷりに言ったのね。」

「いろいろあるけど・・・何処が欲しい？ちなみに無料で提供出来るのは一つだけだからね。」

プクリンは私達に資料を見せてくれた。

かなり沢山あるのね・・・

「うーん・・・どうしようかアスカ？」

「そうね・・・」

「ビビビ！」

ん？どっからか聞いた事がある声が・・・

「何してるんだ？ビビビ？」

「コイル！あつそうだ！ねえコイル、住める所があれば私達の救助隊に入ってくれるのよね？」

「えっ？まあ・・・住める所があれば君達の救助隊に入りたいとは思っているが？」

「じゃあ決まり！プクリン、コイルが住める場所をお願い！」

「OK♪ちようど良い場所があるよ♪ここなんだけどどうかなコイル？」

コイルはプクリンが出してくれた資料を見てみた。

「おお！ここは凄く良いな！ここで頼む！」

「解った♪今日からここはコイルの住む場所だよ♪」

私達はコイルが住める場所を確保する事が出来た！確保出来た事でコイルを私達の救助隊の仲間にする事が出来た！コイルは救助がある時に呼んでくれと言って早速自分が住む所に向かった。

「仲間が増えて良かったねアスカ！」

「そうね！」

私達は新しい仲間が増えた事を喜んだ。その後ペリッパ―連絡所でいつものように依頼を受けて依頼主の所に向かおうとした。

あら？何かポケモン達が集まってるわね？何かあったのかしら？

「お願いします！助けて下さい！」

「ダメだ！そんなに引き受けられるか！」

「でもどうしても風が必要なんです！お願いします！」

あの必死に頼んでいるのは確かわたくさポケモンのワタツコだったわね。そしてその頼みを断っているのが確かよこしまポケモンのダーテングね。「ねえどうしたの？」

ヒトカゲが近くにいたハスブレロに聞いた。

「ん？この騒ぎか？ワタツコがダーテングに救助を依頼してるんだけど・・・ダーテングの救助隊チームはがめつくてさ。お金沢山貫わないと依頼を受けないんだよ。」

「さすがよこしまポケモンね（汗）」

「待て！」

その時別のポケモンが三匹やって来た。

「お、お前達は!？」

あれは確か念力ポケモンのフリーディンに鎧ポケモンのバンギラス、そして火炎ポケモンのリザードンだったわね。でもどうしたのかしらダーテングは？あの三匹を見た瞬間顔色が変わったわね？

「おいダーテング、可哀想じゃないか。ワタツコの仲間を助けるには風が必要なのだ。お前の葉っぱは強風を巻き起こせる。お前にとっては簡単な事じゃないか。頼みを聞いてやれ。」

「・・・ちっ！解ったよ！やりやあ良いんだろやりやあ！行くぞコノハナ！」

ダーテングは部下であるコノハナ二匹を連れて救助に向かった。

あんなに散々断ってたダーテングがフリーディンに言われた途端大人しく言う事聞いたなんて・・・

「ねえハスブレロ。彼らは一体何者なの？」

私はハスブレロに聞いた。「お前知らないのか!?フリーディンのチームを!?ここらじゃ一番有名な救助隊だぞ！」

「そうなのヒトカゲ？」

「うん・・・」

あら？何かヒトカゲの様子が変わね？どうしたのかしら？

「あの・・・ありがとうございます！」

「いや、当然の事だ。またダーテングに断られるようだったらワシに言え。ではな。」

ワタツコがお礼を言った後フリーディン達は恐らく依頼を受ける為にだろう。ペリッパ―連絡所に向かおうとして私達の所を通り過ぎようとした。

「・・・！」

いきなりフリーディンがこっち見た!？

「わわっ!な、何か!？」

「ってハスブレロ!何で私の後ろに隠れるのよ!」

「ん?どうしたフリーディン？」

「・・・いや、なんでもない。」

「そうか?・・・ん? ヒトカゲじゃないか!」
「今度は何よ?」

「・・・やあ、兄さん」

「えっ兄さん!? このかつこいいリザードンがヒトカゲの兄さん!」
「?」

「ハハハ・・・俺はそんなにかっこよく何かないさ。君は始めて見る顔だな?」

「あつ私はアスカって言います!」

「チコリータのアスカか・・・俺はリザードン! よろしくな! それよりヒトカゲ、こんな可愛い子を連れてデートか?」

「可愛い!? 私の事可愛いって言った!? やだ照れちゃうじゃない(照)」

「デ、デートじゃないよ!? 僕はアスカと一緒に救助隊を作ったんだ!」

「・・・そうか。前から救助隊になりたいって言ってたもん・・・」
「けど、なったからにはしっかりやれよ!」

「わ、解ってるよ!」

「なら良し! 待たせて悪いなフリーディン。そろそろ行こうぜ!」

「うむ・・・」

フリーディン達は行ってしまった。

「はあ・・・ビックリした〜!」

「いつまで私の後ろにいるのよハスブレロ! それに私のおしりを触らないでよ! エッチ!」

私はハスブレロに頭の葉っぱでビンタしてやった。

「痛い・・・」

「当然よ!・・・それよりヒトカゲ、あなたに兄さんがいること何で黙ってたの?」

「別に隠すつもりはなかったよ。ただ言うタイミングが無くて。」
「そうだったかしら? 結構タイミングはいっぱいあった気がするけど・

・まあ良いか！

「まあ良いわ。それにしてもあなたのお兄さんかつこよかったわね
〜！」

「・・・そうだね。」

「そうだねって他人事みたいに。ヒトカゲの兄さんでしょ？」

「うん・・・」

何か様子がおかしいわねえ？何かお兄さんと何かあったのかしら？
でもあのお兄さんの様子からしてそんな感じはしなかったし・・・

「ねえヒトカゲ、今日のあなた何か変よ？どうしたの？」

「・・・確かに兄さんはかつこいいよ。自慢の兄さんだ・・・アスカ、前に僕が救助隊になりたい理由の事、話したよね」「えっ？えええそうね。」

「実は僕が救助隊になりたかった理由は他にもあるんだ・・・僕は兄さんより強くなりたい！兄さん以上の救助隊になりたいんだ！」

「・・・なるほど。兄弟であると同時にライバルって事ね？解った！ヒトカゲ、頑張って一緒にあなたの兄さん以上の救助隊にしましょう！」

「アスカ・・・」

「大丈夫！私達ならきつとね！」

その時広場から少し離れた物陰に隠れているポケモンが一匹・・・

「あれが最近救助隊を作ったっていうチームアスカか・・・早速邪魔してやるか♪ケケッ♪」

この時、私達の救助を妨害しようとする者がいる事をまだ私達は知らなかった。

第五話救助ランクゴールド！チームFLB登場！（後書き）

第五話完成です！

第六話 イジワルズ登場！VS ハブネーク & a m p; ザングース！（前書き）

まさかヒトカゲにお兄さんがいたなんてねえ・・・しかもかつこよ
かったし。ヒトカゲが大きくなったらあんな風になるのかしら？・・・
・想像出来ないわ（汗）

第六話 イジワルズ登場！VS ハブネーク & ザングース！

「ふぁー・・・良く寝たわー！今日も良い天気ね・・・」

「おはようアスカ！」

ヒトカゲがやって来た。

「おはようヒトカゲ！」

「ここかい？チームアスカって言う救助隊がいる所は？」

「ん？」

私達は声がした方を見た。すると、三匹のポケモンがこちらに向かってきていた。

あのポケモンは・・・確か蛇ポケモンのアーボに瞑想ポケモンのチャレム、シャドーポケモンのゲンガーだったわね。何だかガラが悪いのが来たわね・・・

「何もねえぜここ？」

「殺風景な所ねえ。」

「ケッこんな所で救助隊やろうなんて信じられねえぜ！」

「随分と言ってくれるわねえ・・・」

私はムカついたのでゲンガーに向かって葉っぱカッターを飛ばそうと構えた。

「うわぁ！？ちょ、ちょっとアスカ！？落ち着いて!？」

「離しなさいよヒトカゲ！こいつらに一度痛い目あわせないと気が済まないのよー！」

ヒトカゲがしっかりと私を押さえているために葉っぱカッターを飛ばせなかった。

「君達！何しに来たか知らないけど、ちょっと失礼じゃないかな？」

「ケッ！本当の事を言っただけが悪い？」

「あら♪ちよっとゲンガー、あんな所にポストが♪」

「おっ本当だ♪中見ちゃおうぜ♪」

ゲンガー達は家にあるポストを勝手に開けて中を見ている。

勝手に人様のポストの中を・・・

「あ・ん・た・達〜！いい加減にしなさい！つるのムチ！」

私はつるのムチでゲンガー達を攻撃した。

「おっと！」

だけど、ゲンガー達に避けられてしまった。

「そんな攻撃当たらねえよ！」

「あっちゃっと！？その手に持つてる物を返しなさいよ！」

ゲンガーの手には私達に送られてきた救助の依頼の手紙が握られていた。

「ケッ♪やだね！この救助の依頼は俺様達がやってやるよ！」

「君達が？」

「私達も救助隊なのよ〜ん♪」

「・・・まっ実際は救助しに行くんじゃないで悪さをしに行くんだがな（笑）救助隊って建前があれば何かと誤魔化しが効くしな！」

「私達は世界征服を企んでいるのよん♪」

「・・・世界征服？」

今時世界征服って・・・

「ケッ！まあそういう事だ！この依頼は俺様達が貰うぜ♪」

「そうはさせないわよ！くらいなさい！葉っぱ・・・」

「黒い霧！」

私が葉っぱカッターで攻撃しようとしたらゲンガーが黒い霧を発生させた。

やだ！前が見えないじゃないの！？

「あばよ♪ケケケ・・・」黒い霧が晴れた時にはもうゲンガー達はいなくなっていた。

「あ〜もう！！何なのよあいつら！！」

「あんな奴らがいるなんて・・・あっあいつらポストの中身全部持っていつてる！？」

ヒトカゲがポストの中をチェックしてみたら何も入っていなかった。

「あいつら〜！次に会ったら絶対ぶっとばしてやる！！」

「朝から何の騒ぎだ？」その時、ペリッパーが手紙の配達に来た。

「あつペリッパー！ねえ聞いてよペリッパー・・・」

私はペリッパーにさっきの事を説明した。

「ああ・・・そいつらはイジワルズだな。良く他の救助隊へ送られた依頼を横取りして悪戯する困った連中なんだよ。」

「僕達も依頼を横取りされちゃった・・・」

「心配するな！ほら！」ペリッパーが私達に手紙を渡してくれた。

「あつ！これ救助の依頼だ！」

「もうイジワルズに横取りされないように気をつけろよ。じゃあな！」

そう言ってペリッパーは飛んで行ってしまった。「良かった！これで救助活動が出来るよ！」

「そうね・・・イジワルズ。絶対許さないんだから！」

「アスカ、確かにあいつらは許せないけど今は救助に集中しないと。」

「解ってるわよヒトカゲ。それで、今回の依頼はどんな内容なの？」

「えっと・・・近くの森でハブネークとザングースが暴れて迷惑してます。おかげでいつも楽しみにしている森林浴が出来ません！お願いします！ハブネークとザングースを大人しくさせて下さい！だって。依頼者はフシギダネだね。」

「・・・救助と言うより討伐ね（汗）」

「まあとにかく行こうよ！」私達は依頼主のフシギダネが待つている森に向かいました。

「あつ来てくれたんだね！」

「君がフシギダネだね？」

「ここにハブネークとザングースがいるのね？」

「うん。もう派手にバトルしてくれちゃってさあ！静かに森林浴が出来ないんだよ！」

「私達に任せて！行こうヒトカゲ！」

「うん！」

私達は森に入って行った。

「ハブネークにザングース・・・確かこの二匹は出会おうとバトルせずにはいられないライバル同士なのよね？」

「そうだよ。・・・そういえば前から気になっていたけど、アスカはかなりポケモンに詳しいんだね？」

「あっ言われてみれば・・・何でかしら？」

「もしかして人間だった頃はポケモンに詳しい人間だったのかもしれないね？」

「そうなの・・・かしら？ うーん・・・まったく思い出せないんですけど（汗）」

「うらあああ！！！」

「どらあああ！！！」

その時森の奥からポケモンの声が！

「この声は！」

「行ってみよう！」

私達は森の奥に急いで向かった。

「あれは！」

森の奥ではハブネークとザングースがバトルをしていた。

「ポイズンテール！」

「ブレイククロー！」

ハブネークのポイズンテールとザングースのブレイククローがぶつかり合った！

「派手にやってるわね（汗）」

「これじゃあ森林浴どころじゃないね（汗）」

「こらそこのハブネークとザングース！バトルを止めなさい！」

「「うっさい！！」」

ハブネークとザングースに思いつき睨まれた。

「見事にハモったわね（汗）」

「二人共かなり興奮してるみたいだね・・・こりゃ簡単にはいかな
いね」

「はぁ・・・しょうがないわね。ヒトカゲ、私はザングースをやるからあなたはハブネークをお願いね。」

「OK!」

「行くわよ!」

私達はハブネークとザングースに向かって行った。

「葉っぱカッター!」

私はザングースに葉っぱカッターを浴びせた!

「ほら!あなたの相手は私よ!」

「てめえ!?邪魔すんじゃない!」

ザングースは私に向かって来た。

よし、まずはハブネークから引き離す事は成功ね!

「待ちやがれザングース!」

「火の粉!」

ヒトカゲがハブネークに火の粉を浴びせた!

「君の相手は僕だよ!」

「・・・熱いじゃねえか!!」

ハブネークがヒトカゲに飛びかかった。これで一対一のバトルに持ち込めた。

「切り裂いてやる!」

ザングースは切り裂く攻撃をしてきた!

「つるのムチ!」

私はつるのムチでジャンプして切り裂く攻撃を回避した!

「もう一回、つるのムチ!!」

今度はつるのムチをザングースの腕に巻き付けた。そして私は全体重をかけてザングースを投げた!だけど、ザングースはバランスを立て直して再び私に向かって来た!

「つるのムチ!」

また私はつるのムチでジャンプした。

「それはもう見切った!切り裂く!」

嘘！？ザングースもジャンプしてこっちに来た！？

「きゃあ！？」

私は切り裂く攻撃を受けて吹き飛ばされた！

「アスカ！？」

「ポイズンテール！」

ハブネークのポイズンテールがヒトカゲに襲いかかる！

「メタルクロー！」

ヒトカゲはメタルクローで対抗したけど、ハブネークの方がパワーが上でヒトカゲは私の所まで吹き飛ばされた！

「いてて・・・」

「ヒトカゲ・・・大丈夫？」

「う、うんなんとか・・・でも参ったね。強いよ彼ら・・・」

「そうね・・・一対一に持ち込んで倒すつもりだったけど・・・こうなったら二人で協力してやるしか無いみたいね。」

「そうだね。」

「行くわよヒトカゲ！」

「解った！」

私達はもう一度ハブネークとザングースに向かって行った！

「つるのムチ！」

私はもう一度つるのムチでジャンプした。

「だからそれは見切ったと言って・・・」

「火の粉！」

ザングースが私に気を取られている隙にヒトカゲが火の粉を決めた！

「こいつ！」

「つるのムチ！」

ハブネークがヒトカゲに向かって行く時に私はつるのムチをハブネークに巻き付けた！

「せーのっ！」

私はハブネークをザングースに投げつけた！ザングースとハブネークはぶつかり合った！

「俺に乗っかるなハブネーク！」

「好きで乗ってんじゃねえよ！誰がてめえに好き好んで乗っかるかよ！」ハブネークとザングースは口喧嘩している。

やっぱり仲悪いのね。

「葉っぱカッター！」

「火の粉！」

私とヒトカゲはハブネークとザングースに葉っぱカッターと火の粉を浴びせた！

「「てめえら・・・潰す！！」」

「またハモったわね（汗）仲が良いのやら悪いのやら？」

「「うっさい！！」」

ハブネークはヒトカゲに、ザングースは私に向かって来た。

「ヒトカゲ！」

「うん！」

私とヒトカゲはいる場所をチェンジした。当然ハブネークはヒトカゲを、ザングースは私を追おうとしてくる。その時に見事ハブネークとザングースは互いに体当たりして衝突した。

「狙い通り♪今よヒトカゲ！」

「OK！火の粉！」

「葉っぱカッター！」

私達はまた葉っぱカッターと火の粉を浴びせた！

「最後はこれよ！いっけ〜ヒトカゲ！」

私はつるのムチを使ってヒトカゲを思いっきりザングースとハブネークに向かって投げた！

「メタルクロー！！」

私が投げた事で勢いがついたヒトカゲは最大パワーのメタルクローをハブネークとザングースに決めた！

「がはっ・・・」

「くそ・・・」

ハブネークとザングースは倒れた。

「ふう〜・・・やっと終わったわね。」

「やったねアスカ！」

「さて・・・ハブネークにザングース！すぐにこの森から出ていきなさい！それと、バトルするのは良いけど他のポケモンに迷惑がかからない場所でやりなさい！もしまた迷惑かけるような事したら・・・」

「わ、解った解った！」

「他の場所でやるから勘弁してくれ！」

そう言ってハブネークとザングースは森から出て行った。

「良し！あとはフシギダネにもう大丈夫って伝えるだけね！」

「うん！行こう！」

私達は依頼主のフシギダネに今回の依頼の成功を報告した。

「ありがとう二人共！やっとこれで静かに森林浴が出来るよ！」

「どういたしまして！それじゃ、私達はこれで・・・」

「あっちよっと待って！」

「何？」

「あのさ・・・僕も君達の救助隊に入れてくれないかな？」

「えっ！私達の救助隊に？」

「うん。僕お金ないから君達に何かあげる事は出来ないんだ・・・だからせめて、救助隊に入れてもらってお礼したいなって思っただけ。それに、前から救助隊に入ってみたかったんだ！ダメかな？」

「ダメじゃないよ！むしろ大歓迎さ！ねっアスカ？」

「もちろん！チームアスカによろしくねフシギダネ！」

「うん！」

私達の救助隊に新たにフシギダネが仲間になってくれた！ちょうど私の家の近くに草タイプ用の家があったからフシギダネにはそこに住んでもらう事にした。

「また仲間が増えたねアスカ！」

「そうね！この調子でいったら私達の救助隊、すっごく大きな救助隊になっちゃったりして（笑）」

「もしそうになったら嬉しいな！それじゃ、今日はゆっくり休んでまた明日頑張ろう！」

「そうね。」

「お休みアスカ。」

「お休みヒトカゲ。また明日ね。」

私はヒトカゲと別れて自分の家に帰った。そしてお気に入りの草のベッドに飛び込んだ。

はぁ・・・やっぱりこの草のベッドは気持ち良い・・・

「・・・すー・・・すー・・・」

かなり疲れた為、私はすぐに熟睡してしまった。

第六話イジワルズ登場！VSハブネーク&ザングース！（後書き）

第六話完成です！

もうすぐポケットモンスタープラチナが出ますね！発売が待ち遠しいです！

第七話 キャタピーちゃんの友達を救え！VSイジワルズ！（前書き）

イジワルズ！本当にムカつく奴らね！次に会ったら絶対痛い目に合
わせてやるんだから！

第七話 キャタピーちゃんの友達を救え！VSイジワルズ！

「ふぁー・・・良く寝たわー・・・今日も依頼が来てるのかしら？」

私はポストをチェックする為に出た。

「おはようアスカ！」

ちょうどその時にヒトカゲがやって来た。

「おはようヒトカゲ。」 「アスカさーん！ヒトカゲさーん！」

「ん？」

私達は声が見ると、一匹のポケモンがこっちに向かって走って来ていた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「キャタピーちゃんじゃない！そんなに慌てて一体どうしたの？」

「ハア・・・ハア・・・ぼ、僕の友達の・・・トランセル君が・・・」

「

「トランセル君がどうしたの？」

「僕達・・・遊んでただけど・・・突然変な奴がやって来て・・・」

トランセル君を連れて行っちゃったの！」

「何ですって！？」

「キャタピーちゃん。詳しく聞かせてくれる？」

「は、はい。」

キャタピーちゃんは私達に今までに起きた事を話してくれた。キャタピーちゃんと言うには、友達のトランセル君とかくれんぼをしていたそう。その時に突然変な黒いポケモンがトランセル君を連れて行ってしまったらしい。

「黒い変なポケモンね・・・解ったわ！私達が必ずトランセル君を助けてあげる！行くわよヒトカゲ！」

「OK！」

私達は急いでトランセル君が連れ去られたという森に向かった。

「この森ね・・・今日は雲一つ無い快晴なのに、森の中は薄暗いの

ね？」

「ここは別名怪しい森って呼ばれる所だからね・・・」

「怪しい森って・・・そのまんまじゃん（汗）まあ良いわ。行くわよ！」

私達は怪しい森の中に入って行った。

「・・・」

ガサツ！

「わっ！？な、何！？」

茂みから出てきたのはヤミカラスだった。

「ただのヤミカラスよ。しっかりしなさいよヒトカゲ。あなた、お兄さんを越えたいんでしょ？」

「も、もちろんだよ！」若干声が震えてるわね？そんなにこの森が怖いのかしら？・・・そうだよちよつと脅かそう♪

・・・ガサツ！

「わっ！？こ、今度は何だよ！？」

「クスッ♪ごめん、今のは私がつるのムチで葉っぱを叩いた音♪」

「もう・・・脅かさないでよアスカ！」

「ごめんごめん！でも珍しいわね？ヒトカゲが怖がるなんて。」

「だってこの森不気味過ぎるんだもん！アスカは平気なの？」

「全然平気。ヒトカゲが怖がり過ぎてるだけよ。ほら、早く行くわよ！」

「あつ待ってよアスカ！？」私達は怪しい森の更に奥に進んだ。

ヒトカゲって意外に怖がりだったのね。でも・・・怖がってたヒトカゲ、ちよつと可愛かったな♪

「・・・アスカ。あそこに光が見えるよ。」

「えっ？」

私はヒトカゲが指差してる先を見てみた。

「本当だ・・・行ってみましょ！」

私達は光が見えた場所に向かった。

「ここだけ木が密集してないのね。さっき見えたのは太陽の光だっ

「たみたいね？」

「みたいだね。」

「・・・ケケケ・・・」その時何処からともなく笑い声が聞こえてきた。

「この嫌な笑い声・・・隠れてないで出てきなさい！」

私がそう言うと、目の前にゲンガーとアーボとチャーレムが現れた。

「ケケケ！やはり来たなお前達！」

「やっぱり黒い変なポケモンってのはあんただったのねゲンガー！トランセル君は何処よ！」

「あの子ならこの奥で眠ってるわよ。」

「ゲンガーの催眠術は良く効くからな！ぐっすりさ！」

「あんた達、一体何が目的でトランセル君を誘拐したのよ？」

「ケッ！お前達を誘き寄せる為に決まってるんだろ！」

「僕達を誘き寄せる？何でそんな事を？」

「理由は簡単よ♪それは・・・あんた達を消すためさ！」

いきなりチャーレムが私達に爆裂パンチで攻撃して来た！

「つるのムチ！」

私はつるのムチを一本近くにあった木に巻き付けてその木に向かってジャンプした。あつもちろんヒトカゲも一緒にね。

「いきなり攻撃なんてひどい事するわね！私達があんた達に何かした？」

「別に何もしてねえさ。ただ、最近活躍している救助隊は将来俺達の邪魔になるから潰しておこうと思ったただけだ！くらえシャドーボール！」

今度はシャドーボール！？

「つるのムチ！」

私はさっきと同じようにヒトカゲと一緒にシャドーボールを避けた。

「どうやら本気みたいね・・・しょうがないわね！やるわよヒトカゲ！」

「OK！」

私達はゲンガー達に向かって行つた。

「葉っぱカッター！」

私はゲンガー達に向かって葉っぱカッターを飛ばした。

「ケッ！チャーレム！」

「念力！」

チャーレムが念力を使って葉っぱカッターを止めてしまった。まるで時間が停まったみたい在空中に葉っぱが静止している。

「そういえばチャーレムは格闘タイプとエスパータイプの二つを持つてたんだったわね・・・」

「この葉っぱカッター、あんたに返すわよ！」

チャーレムは念力で葉っぱカッターを私達に向けて放った！

「火の粉！」

ヒトカゲが火の粉を放って葉っぱカッターを全部燃やした。

「ヒトカゲ！同時攻撃行くわよ！」

「解った！火の粉！」

「葉っぱカッター！」

私達の攻撃はチャーレムに向かって行つた。

「毒針！」

「念力！」

アーボの毒針が私の葉っぱカッターを撃ち落として、チャーレムの念力がヒトカゲの火の粉を止めて私達に返してきた！

「そのあんた！つるのムチ！」

私はつるのムチをアーボに巻き付けてこっちに引き寄せた。そしてアーボを盾にして火の粉を防いだ。

「ふう・・・危なかったわー！あんた達！ちゃんと受けとりなさいよ！それっ！」

私はアーボを思いっきりゲンガー達に向かって投げた！

「ちよっ！？念力！」

チャーレムが念力でアーボを受け止めた。

今だ！

「いっけ〜ヒトカゲ！」チャーレムが念力でアーボを受け止めている間に私はヒトカゲをつるのムチを使って思いっきり投げた！

「メタルクロー！！」

勢いがついたヒトカゲが最大パワーのメタルクローをチャーレムに決めた！チャーレムは吹き飛ばされた。

「やっぱりね！チャーレムは念力で操れるのは一つだけなんだわ！」
「・・・いつ気づいたんだ？チャーレムが念力で操れるのが一つだけだって。」

「私達の同時攻撃にチャーレムだけじゃなくアーボも加勢した時よ。」

「ケッ！たいした観察力だ！やっぱお前は消しておく必要があるな。」

「やれるもんならやってみなさいよ！葉っぱカッター！」

私はゲンガーに葉っぱカッターを飛ばした！

「ケッ！悪いが俺にその程度の攻撃は当たらないぜ！」

ゲンガーは影の中に入って姿を消した！

「消えた！？」

「影の中に隠ただけよ・・・シャドーポケモンの本領発揮ってところかしら。さて、どうしたもんかしらね・・・」

「シャドーボール！」

後ろからシャドーボール！？

「つるのムチ！」

私はヒトカゲを抱えてつるのムチでジャンプした！

「もう一回つるのムチ！」今度は近くにある木の枝につるのムチを巻き付けてぶら下がった。

「危ない危ない！大丈夫ヒトカゲ？」

「う、うん。」

「影に隠れると厄介ねえ・・・せめて隠れる影を無くせれば・・・あっそうだ！ヒトカゲ、あなた日本晴れは使える？」

「完璧じゃないけど、少しの間なら使えるよ。」

「使えるならOKよ！お願い！」

「解った！日本晴れ！」ヒトカゲは日本晴れを発動した。暗かった森の中がどんどん明るくなっていく。そしてゲンガーが隠れられる影が無くなっていく。

「ケッ！？日本晴れか！？」ゲンガーが姿を現した！

「そこね！頼むわよヒトカゲ！」

私はまたヒトカゲを思いっきりゲンガーに向けて投げた！

「メタルクロー！！」

勢いがついたヒトカゲのメタルクローがゲンガーにクリーンヒットした！

「ぐっ！？」

「まだ終わってないわよ！葉っぱカッター！」

私は駄目押しの葉っぱカッターをゲンガーに決めた！

「くっ！？」

「どう？まだやるのかしら？」

「ケッ！今回はここまでにしといてやる！だがな、次は確実にお前らの救助隊を潰してやるからな！」

そう言いながらゲンガーはチャレムやアーボらと一緒に逃げていった。「ふうく・・・なんとかなったわね。さあ！トランセル君を探しに行きましょうヒトカゲ！」

「うん！」

私達は更に森の奥に進んだ。そこには眠っているトランセル君がいた。

私達はトランセル君を起こして一緒にキャタピーちゃんが待っている所に向かった。

「トランセル君！無事だったんだね！良かった！」

キャタピーちゃんが泣きながらトランセル君に言っている。

「ありがとうアスカさん！ヒトカゲさん！・・・だけど・・・僕お金無いです・・・」

「お金？あゝお礼なら良いわよ！それより、大事な友達が無事で良

かったわね!」

「・・・か、かついい!」

キャタピーちゃんの目が凄くキラキラ輝いてる。

「僕ますます懂れちゃいました! 僕も大きくなったら救助したいです!」

「キャタピーちゃんなら、きっと出来るわよ!」

「あっそうだ!」

突然ヒトカゲが叫んだ。

「な、何よヒトカゲ?」

「ねえアスカ! 前から思ってたんだけど・・・アスカが住んでるこの家を僕達チームアスカの救助隊基地にしない?」

「救助隊基地?」

「やっぱり救助隊には基地がつきものでしょ?」 そうなのかしら(汗)

「それ良いですね! 救助隊の基地! 僕大きくなったらここで働きたいです!」

「ぼ、僕も!」

「決まりだね!」

あれ? 何かもう基地を作るの確定なの?

「はぁ・・・まあ確かに基地があった方が様になるわね・・・良いわ!」

「さすがアスカ!」

流れ的にここで嫌って言ったらKYだからねえ(汗)

「それじゃあ僕達は家に帰ります! アスカさん。ヒトカゲさん。本当にありがとうございます!」 そう言ってキャタピーちゃんとトランセル君は自分の家に帰って行った。私達も今日はゲンガー達との戦闘で疲れちゃった。私とヒトカゲも家に帰って寝る事にした。

第七話キヤタピーちゃんの友達を救え！VSイジワルズ！（後書き）

第七話完成です！

第八話ワタッコを救え！伝説のポケモン、サンダー登場！（前書き）

はあくイジワルズを倒せて気分がスッキリしたわ♪さあ！今日も頑張って救助よ♪

第八話ワタッコを救え！伝説のポケモン、サンダー登場！

「・・・うーん！良く寝たー！今日も雲一つない快晴ね♪」

「おはようアスカ♪」

ヒトカゲがいつものように丁度良いタイミングでやって来た。

「おはようヒトカゲ！」「あの・・・すみません。」

「ん？」

私達の所に一匹のワタッコがやって来た。

あれ？このワタッコ、何処かで見たような？

「救助隊、チームアスカはここでよろしいでしょうか？」

「そうだよ。もしかして、僕達に依頼しに来たの？」

「はい。」

思い出した！

「あっ！あなたは確か広場でダーテングに救助の依頼を頼んでいたワタッコね！」

「あっはい・・・そのダーテングさんなんですが・・・救助に行きたきり戻って来ないんです・・・」

「なんですって!？」

「ねえワタッコ、ダーテングに頼んだ救助ってなんだったの？」

「仲間のワタッコが岩場に挟まって動けなくなっただんです。私達ワタッコは風に乗れば何処にでも行けるのですが・・・その日は雷雲でいっぱいだったのに風がまったく吹かなかったんです。」

「風がまったく吹かない？妙だねそれは・・・」

「私がダーテングさんに依頼したのは、ダーテングさんの葉っぱのうちわなら強風を作り出せるからです。その強風で仲間を助けてもらおうと思ったのですが・・・」

「でもダーテングが戻って来ないと・・・ダーテングならこの救助は簡単な筈なのに・・・確かに変だね・・・」

その時ヒトカゲが私を見つめてきた。

「解ってるわよヒトカゲ！」

「さすがアスカ！心配しないでワタッコ！僕達がダーテングや君の仲間を探しに行ってくるよ！」

「ほ、本当ですか！？」

「もちろんよ！私達に任せてワタッコ♪あなたの仲間が動けなくなってしまうたっていう場所を教えてください？」

「それでしたら私が途中まで案内致します！ついてきて下さい！」

私とヒトカゲはワタッコと一緒にワタッコの仲間がいる場所に向かった。「ここが・・・沈黙の谷です。」

沈黙の谷・・・名前の通り何も音がしないわね・・・それにワタッコが言ってたように風が吹いてない・・・

「うわっと!？」

「ちよっ!？ヒトカゲ!？つるのムチ!!」

ヒトカゲがいきなり崖から落ちそうになった！私はギリギリのところでつるのムチをヒトカゲに巻き付けて助けた。

「あ、危なかったゝ(汗)助かったよアスカ！」

「もう!？しっかりしてよねヒトカゲ！」

「ごめんごめん(汗)」

「・・・」

あっ・・・ワタッコが凄く心配そうな目をしてこっち見てる(汗)

「だ、大丈夫よワタッコ(汗)ヒトカゲはやる時はやるんだから！とにかく、あなたの仲間がこの谷の奥にいるのよね？」

「はい。」

「よし！じゃあ気合い入れて行って来るわね！行くわよヒトカゲ！私とヒトカゲは沈黙の谷に入ろうとした。

「あっ待って下さい!？」いきなりワタッコが私達を止めた！

「な、何？やっぱり私達じゃ不安？」

「いえ、ただ言い忘れた事が・・・実は、この沈黙の谷には怪物が眠っていると言われていて・・・」

「へえゝ怪物が・・・って怪物ゝ!？」

「あくまでも言い伝えですから・・・でもダーテングさんが戻って来ないから・・・一応伝えた方が良くないと思ひまして・・・」

「怪物ねえ・・・教えてくれてありがとワタツコ！じゃあヒトカゲ、行くわよ！」

「ええ（汗）行くの（汗）」

「あなたもしかしてびびってんの？ワタツコが言っただけでしょ？ただの言い伝えだって。もし怪物が出てきても倒しちゃえば良いんだし♪」

「うゝ・・・解ったよゝ・・・」

本当に怖がりなのねヒトカゲは・・・まあとにかく私達はワタツコの仲間とダーテングを探しに沈黙の谷に入った。

「・・・ヒトカゲ・・・そんなにくっつかれると歩きづらいんですけど？」

「えっ？あつご、ごめん（汗）」

「本当に怖がりねえヒトカゲは・・・大丈夫よ。怪物なんていやしくないわよ！」

「でも、もしいたらどうすんのさ？」

「そんな時はそんな時よ！」

「ええ（汗）」

「ほら！行くわよヒトカゲ！」

「待ってよアスカ！」

私達は更に奥に進んだ。・・・何か妙ね？

「ヒトカゲ、気づいてる？」

「えっ？何が？」

「私達結構奥に進んで来た筈なのに、ここまで一匹もポケモンに会ってないのよ。」

「あつ言われてみれば・・・何でだろ？」

「解らないわ・・・でも考えられるのは、ここの環境が変わって住めなくなってしまったからか・・・もしくは、何か強いポケモンが現れて皆逃げたか・・・あれ？ねえヒトカゲ、あそこにいるのもし

かしてワタツコの仲間じゃない？」

「あっ本当だ！」

私達はワタツコの仲間だと思われるポケモンのもとに向かった。

「あなたがワタツコの仲間ね？」

「はい・・・」

「良かった！無事だったんだね！さあ、早く帰ろう！仲間が待ってるよ！」

「待って下さい！まだ奥にダーテングさんが・・・」

「ダーテングが？ダーテングも無事だったんだね！」

「それが・・・とにかく一緒に来てください！」ワタツコに連れられて私達は更に奥に進んだ。

「ダーテング！？」

そこには確かにダーテングがいた。だけど、ひどい怪我をしている！

「ちよつとダーテング！？大丈夫！？」

「うう・・・お、お前達は・・・」

「無事みたいね！早く私達と一緒にここから出ましょう！怪我を治さなきゃ！」

「お、俺は良い・・・お前達は早く・・・逃げろ！奴が来る前に！」

「奴？奴って一体？」

「10万ボルト！」

その時、私達に向かって10万ボルトが飛んできた！？私達は何とか10万ボルトを避ける事が出来た。「いきなり何！？」

「どけ貴様ら！こいつは我が眠りを妨げたのだ！こいつには・・・罰を与えねばならん！」

私達の目の前に大きな鳥型ポケモンが現れた！

このポケモンは！？

「あなたは・・・まさか！？」

その大きな鳥ポケモンはダーテングを捕まえて空高く飛び去ってしまった！

「ダーテングが！？まさか、あれが怪物なの！？」

「・・・怪物じゃないわ・・・あれもポケモンよ。」

「アスカ、あれを知ってるの？」

「・・・今はとにかくワタツコを仲間に会わせないと・・・それから話てあげる。」

私達はワタツコを仲間がいる所まで送ってあげた。

「良かった！無事だったんだね！」

「うん・・・だけど、ダーテングさんが・・・」

「ねえ、あそこで一体何があったの？」

ワタツコは私達に今までの事を説明してくれた。

ワタツコの話によると、岩場に挟まっていたけどダーテングが葉っぱのうちわで強風の出して助けてくれたそうだ。だけど、その時に出した強風が雷雲を切り裂いてしまった。そしたらさっきの鳥ポケモンが現れたらしい。ダーテングは必死に戦ったが相手が強すぎて怪我をしてしまった。そこに私達がやって来たと言う事みたい。

「それでアスカ・・・あの、大きな鳥ポケモンは一体なんなの？」

「・・・サンダー・・・伝説の鳥ポケモンの一匹よ・・・」

「サンダーだと！？」

その時三匹のポケモンがやって来た。

「あなた達は救助隊チームFLB！」

「サンダー・・・ずっと眠っていたと聞いていたが・・・」

「もしかしてダーテングが出した強風で起きちゃったの？」

「いや、ダーテングの風はキツカケに過ぎん。そもそもあそこに風が吹かない事自体がおかしいのだ。・・・これも最近多い自然災害のせいであろう・・・眠りを妨げられサンダーは怒っている。ダーテングを助けてさねば！」

「奴の電撃は強力だぞフリーデイン？」

「解っているバンギラス、慎重にやらねば・・・」

「ねえフリーデイン、サンダーがいる場所って何処？」

「サンダーは目が覚めたら決まって雷鳴の山に行く。それがどうした？」

「雷鳴の山・・・解った。僕達も行く！ダーテングを助けに！」

「なんと！それは危険だ！サンダーは手強い、今のお前達の実力では無理だ！」

「そんな事ないさ！僕達だっていろいろ経験して強くなったんだから！」
「・・・ヒトカゲ、お前が今までどんな戦いを経験したのかは俺は知らない。だが、今回の相手は伝説のポケモンなんだ、並大抵の相手じゃない・・・ここは俺達チームFLBに任せておけ！」

「・・・僕達だって救助隊なんだ・・・だから、僕達はダーテングを助きたいんだ！」

ヒトカゲがお兄さんのリザードンに強い口調で言った。

「そうよヒトカゲのお兄さん！私達だってやれるんだから！」

「しかし・・・」

「・・・良い目をしている・・・良かろう。君達の勇気を認めよう。」

「フーディン！？」

「大丈夫だリザードン。彼らも立派な救助隊だ。弟が心配なのは解るが・・・」

「・・・解ったよ。」

「兄さん・・・」

「・・・危なくなったら逃げろよ。」

「うん。ありがとう。」

「そうと決まれば、まずは準備しなきゃね！相手はサンダーなんだからしっかりと作戦たてないとね！」

「うむ。準備が出来次第雷鳴の山に向かおう！目的はダーテングの救助！お互い頑張ろう！」

「うん！」

私達はしっかりと準備してから雷鳴の山に向かう事にした。

ダーテング・・・私達が行くまで無事でいて！

第八話ワタツコを救え！伝説のポケモン、サンダー登場！（後書き）

第八話完成です！

第九話ダーテングの救助！VSサンダー！（前書き）

ダーテングがサンダーに連れていかれちゃった！ダーテング！私達
が行くまで無事でいてよ！

第九話ダーテングの救助！VSサンダー！

「体力を回復してくれるオレンの実でしょう・・・雷鳴の山って明らかに電気タイプのポケモンがいそうだから麻痺対策でクラボの実を少し多めに持って行った方が良いわね。あとは・・・」

私はダーテングの救助に向かう為に準備をしていた。相手はあの伝説のポケモンであるサンダー・・・しっかり準備しなきゃね！

「アスカ、入るよ。」

ヒトカゲが家に入ってきた。

「ヒトカゲ！もう準備出来たの？」

「まあね。アスカは？」

「丁度今出来たところ。」「じゃあ早速行こうよ！ダーテングが心配だし！」ヒトカゲが出発しようとした。

「ちょっと待って！」

私はつるのムチを伸ばしてヒトカゲに絡ませて引き止めた。

「な、何アスカ？」

「まだ来てないのよ。」

「来てないって・・・誰の事？」

「お待たせ〜！」

その時私の家の玄関前に一匹のポケモンがやって来た。そのポケモンは・・・

「フシギダネ！」

「今回はフシギダネにも協力してもらう事にしたの！私達二人だけだとちょっと不安だったからね。」

「今回が初めての救助だけど、二人の足手まといにはならないように頑張るよ！」

「頼りにしてるわよ？・・・良し！じゃあ行きましょヒトカゲ！フシギダネ！」

私達はサンダーがいる雷鳴の山に向かった。

フリーディン達チームFLBは私達とは別ルートで雷鳴の山を登るみたい。

「葉っぱカッター！」

「火の粉！」

「つるのムチ！」

雷鳴の山の山頂を目指す途中で正気を失っているポケモン達に襲われた！私は葉っぱカッター、ヒトカゲは火の粉、フシギダネはつるのムチで襲いかかって来たポケモン達を撃退した。

「ふう……ここのポケモン達は他の所で出会ったポケモンに比べると少し強いわね。」

「おまけに電気タイプのポケモンが多いしね。下手に攻撃を受けると痺れちゃって動けなくなっちゃうよ（汗）」

「そうならない為にクラボの実を多めに用意したんだから！そこらへんは拔かり無いわよ！」

私達は正気を失って襲って来たポケモン達を撃退したあと、更に雷鳴の山を登り始めた。

「うわあ！？」

誰かの悲鳴が聞こえて来た！？

「今の悲鳴は！？」

「あっちからしたよ！」私達は悲鳴が聞こえた方に急いで向かった。
「あれは！？」

そこには一匹のグライガーがエレブーやデンリュウ、それにラクライの三匹に囲まれていた！

「こ、こっちに来るな！？あっち行け！？」

「……」

グライガーの言葉は三匹には聞こえていないみたい。正気を失っているみたいね。

「ヒトカゲ！フシギダネ！あのグライガーを助けるわよ！」

「解った！」

「OK！」

私達はグライガーの所に向かった。

「フシギダネ！まずは邪魔な連中を退けるわよ！」

「解ったよアスカリダー！」

「「つるのムチ！」」

私とフシギダネはつるのムチでエレブー達をなぎ払った！その間にヒトカゲがグライガーを助けたした。

「君！大丈夫かい？」

「怖かったよ（泣）」

グライガーは泣きながらヒトカゲに抱きついた。このグライガー・・見た目は強そうなのにヒトカゲ以上の怖がりね（汗）

「ヒトカゲ！こいつらは私とフシギダネに任せてあなたはその子を安全な所に！」

「解った！」

ヒトカゲはグライガーを連れて行った。

「さて・・エレブーにデンリュウにラクライ・・確か三匹共、特性は静電気だったわね。さっきのつるのムチで発動しなかったのはラッキーだったけど、フシギダネ！ここは葉っぱカッターの遠距離攻撃中心で戦うわよ！」

「了解リダー！」

私達は静電気で麻痺するの避ける為、葉っぱカッターの遠距離攻撃でエレブー達を攻撃した。そしたらエレブー達は10万ボルトや雷パンチで葉っぱカッターを撃ち落としてしまった！

「まだまだよ！」

私はもう一度葉っぱカッターを放った！だけど、またしても10万ボルトや雷パンチで撃ち落とされてしまった。

「やっぱりダメか！」

「アスカリダー！離れて！」

フシギダネの声が聞こえたから振り向くと、フシギダネの特徴的な背中にある大きな種が光輝いていた！

「ソーラービーム！」

フシギダネは草タイプの大技ソーラービームを放った！ソーラービームはエレブー達に直撃！凄まじい爆発が発生し、エレブー達は空高く吹き飛ばされた。

「ふう……大丈夫アスカリダー？」

「ビックリした〜！？あなたソーラービームが使えたのね！」

「まだ完全じゃないんだけどね。たまに不発する時もあるし……」
「でも凄いわよ！」

その時ヒトカゲとグライガーがやって来た。

「追い払ったみたいだね。」

「ええ！君、怪我は無い？」

「う、うん……助けてくれてありがとう。」

「無事で良かったよ。でも、何でこの雷鳴の山にいたの？」

「遊んでたんだ。この辺は滅多に他のポケモンが来ないから。でも……」

「さっきの連中に襲われたって訳ね。今日はもう帰った方が良いでしょう。今この山の山頂に凄いポケモンがいるから。ヒトカゲ！フシギダネ！急ぐわよ！」

私達はグライガーを助けた後すぐに山頂目指して進みだした。そしてついに私達は雷鳴の山・山頂にたどり着いた。

「やっと着いたね。まだ……兄さん達は来てないみたいだね？」

「そうみたいだけど……それよりダーテングは何処に？」

「あっ！アスカリダー！彼処にいるよ！」

フシギダネの視線の先には気絶しているダーテングがいた。

「ダーテング！」

私達はダーテングの所に向かおうとした。

「雷……！」

突然私達の目の前に雷が落ちて来た！

「出たわねサンダー！」空からサンダーが私達の前に舞い降りた。

「また貴様達か！何をしに来た？」

「私達は救助隊よ？もちろんダーテングを助けに来たのよ！」

「奴は我が眠りを妨げたのだぞ！何故そのような者を助けようとする！」

「ダーテングは故意にあなたの眠りを妨げた訳では無いわ！ただダーテングはワタツコを助けようと・・・」

「うるさい！如何なる理由であろうと我が眠りを妨げた者は許さん！」

ダメだわ・・・サンダーは怒りで冷静さを失ってる・・・

「それでも奴を助けようと言うのであれば・・・貴様らも容赦はせん！」サンダーの身体から電気が発生した。

「10万ボルト！」

「皆避けて！」

サンダーの10万ボルトを私達はギリギリで回避する事が出来た。

「やっぱり戦うしか無いみたいね！やるわよヒトカゲ！フシギダネ！」

「了解リーダー！」

「うん！」

私達はサンダーに向かって行った。

「我が怒りの雷を受けよ！！！」

サンダーが強力な雷を放った！

「ヒトカゲ！私に乗って！フシギダネ！私と同じ技を使って！」

「わ、解った！」

ヒトカゲは私に乗った。

「「つるのムチ！」」

私とフシギダネはつるのムチを使って高くジャンプして雷を回避した。

「逃がさん！」

サンダーがこっちに向かって飛んで来た！

「き、来たよ!？」

「落ち着きなさいヒトカゲ! フシギダネ! 葉っぱカッターよ!」
「解った!」

「「葉っぱカッター!」」私とフシギダネはサンダーに向かって葉っぱカッターを放った! 無数の葉っぱがサンダーに降り注ぐ!

「そんな物我が雷でなぎ払ってくれる!」

サンダーが雷で私達の葉っぱカッターを撃ち落としました!

「今だ! 頼むわよヒトカゲ!」

私とフシギダネはつるのムチを使ってヒトカゲを思いっきりサンダーに向けて投げた!

「メタルクロー!」

ヒトカゲの最大パワーのメタルクローが決まった!

「この程度の攻撃で我は倒れん!」

サンダーには確かにメタルクローが決まったんだけど・・・効果は今ひとつだからダメージは低いみたいね。

「まだ攻撃は残ってるのよ! フシギダネ! お願い!」

「任せてリーダー! セーっの!」

フシギダネはつるのムチで私をサンダーの所に向かって投げた!

「体当たり!」

普通の体当たりなら威力はあまりないけど、フシギダネが投げてくれたから威力は上がってる!

私の体当たりはサンダーに決まった!

「ぐっ!？」

「まだまだ! 葉っぱカッター!」

更に至近距離で葉っぱカッターを決めた! サンダーはバランスを崩して地面に落下していく。

「あ、あれは!？」

その時ようやくチームFLBが到着した。

「これでフィニッシュ! つるのムチ!」

私はつるのムチをサンダーに巻き付けて、落下スピードを利用して

地面に叩き付けた！

「決まったわね・・・」・・・と思ったんだけど、サンダーは立ち上がった！？

「嘘っ！？」

サンダーの身体からまた電気がバチバチと鳴り始めた！

「お前達下がれ！」

ヒトカゲのお兄さんのリザードンがサンダーの前に立ちはだかった。

「今度は俺達が相手だ！」

「・・・待て。戦うのはもう止めた。」

「ん？どういう事だ？」

「だいぶ頭が冷えたようだ・・・ダーテングが我が眠りを妨げた事は許そう。そなた、名前は何と言う？」

「私はアスカよ。」

「アスカか・・・そなたは中々やるな。だが、次に戦う時は今回のようにはいかんからな！」

そう言ってサンダーは空高く飛び上がって行った。

「行っちゃった・・・」

「・・・うう・・・」

ダーテングが目を覚ました！

「大丈夫かダーテング？」ヒトカゲのお兄さんのリザードンがダーテングに聞いた。

「な・・・なんとか・・・」

ダーテングはフラフラしながらもなんとか立ち上がった。

「良かった無事で！」

「しかし驚いたな。あのサンダーを追い払うなんて。」

「確かに。アスカ、君はチコリータにしてはやけに強いな？」

「そう・・・かしら？」

「・・・前に会った時に感じたのだが・・・お主もしかして・・・ポケモンでは無いな？」

えっ！？なんで・・・

「なんで解るの！？でもそうだよ。アスカはポケモンじゃない。アスカは人間なんだ。」

「何だって!？」

皆驚いてる。そりゃそうよね。むしろ驚かなかった方が変よね(汗)

「本当なのかアスカ？」

「本当よ。でも・・・何で私がポケモンになったのか解らないの・・・人間だった頃の記憶も無くなっちゃって・・・」 「あっそうだ！前にハスブレロから聞いたんだけど、フリーデインは物知りなんだよね？もしかしてアスカがポケモンになった理由とか知ってたりする？」

いやヒトカゲ(汗) さすがに知らないと思うわよ？

「・・・ワシもさすがにそれは解らん。」

ですよね。

「そっか・・・」

「だが・・・突き止める方法はある。」

「えっ！？本当!？」

「フリーデイン、その方法ってどんななの？」

「精霊の丘にいるネイティオと言うポケモンに聞くのだ。彼なら何か知っているやもしれん。」

ネイティオ・・・精霊ポケモンと呼ばれるポケモンね。確か過去と未来を見通せる事が出来るんだったわね。

「そのネイティオってポケモンに会えばアスカがポケモンになった理由が解るかもしれないんだね！そうと解ったら早速精霊の丘に行こうよアスカ!」

「ちよつと待ってヒトカゲ！まずはダーテングを無事に連れて帰るのが先よ!」

「あっそうだったね(汗) ごめん。ダーテング、歩ける？」

「あ、ああ・・・」

私達はダーテングを支えながら山を下山していった。

「・・・フリーデイン。お前の事だ。何も知らないって訳では無いんだろ？・・・本当は知ってるんじゃないのか？アスカがポケモンになった理由を。」

「一つ心当たりがある・・・だが、それは言わない方が良いだろう。彼女達の為にはな・・・」

第九話ダーテングの救助！VSサンダー！（後書き）

第九話完成です！

なるべく原作とは違う感じにしようとは頑張ってみてはいるのですが・

・難しいっす（^ー^；）

第十話精霊の丘のネイティオ（前書き）

精霊の丘にいるネイティオねえ・・・本当に私の事が何か解るのかしら？

第十話 精霊の丘のネイティオ

サンダーからダーテングを助け出してから翌日の朝。私はいつものように外に出て朝日を浴びた。

「うーん今日も良い天気！今日の予定は確かネイティオがいるって言われている精霊の丘に向かうんだったわね。．．．でも精霊の丘って何処にあるのかしら？」

「おはようアスカ！」

精霊の丘の場所について考えている間にヒトカゲがやって来た。

「．．．何か良い事でもあったのかしら？ニヤニヤしちゃって．．．
「おはようヒトカゲ。何か良い事でもあったの？ニヤニヤしちゃってさ。」

「昨日ダーテングを助けたあとにポケモン広場に寄ったんだ。そこで精霊の丘が何処にあるか聞いてまわっていたんだ。そして解ったんだよ精霊の丘の場所がさ！大いなる峡谷って場所の頂上が精霊の丘なんだって！」

サンダーとの戦闘の後にそんな事してたんだ．．．私何か疲れちゃってすぐに寝ちゃったのに．．．

「早速行こうよアスカ！精霊の丘にいるネイティオって言うポケモンにあってアスカの事を聞かなきゃ！」

ヒトカゲは張り切って出発しようとした。

「．．．何でヒトカゲがこんなに張り切ってるんだろ？これは私の問題であってヒトカゲの問題じゃないのに．．．

「あれ？どうしたのアスカ？」

「えっ？あついや何でもないわ。」

「隠してもダメだよ。僕に何か聞きたい事があるって顔してるよ？」

「．．．何で解ったのかしら？私って顔に出ちゃうタイプ？」

「そ、そう？」

「うん。聞きたい事があるんなら聞いてよ。」

「じゃあ聞くけど・・・ヒトカゲは何でそんなに張り切ってるの？」
「何でって・・・当たり前でしょ？」

「でも、自分の事じゃないのよ？私の問題なのよ？」

「解ってるよ。だから張り切ってるんだよ。だってアスカは・・・だから。」

ん？何故そこで小言になっちゃうのよ？

「良く聞こえなかったんだけど・・・なんて言ったの？」

「だから・・・アスカはその・・・僕にとって大切な人だから（照）」

ふん・・・ってえっ！？これって・・・もしかして告白！？ええ
うちよっと待ってよ！？まだ私達出会ってそんなに日も経ってない
し！確かにヒトカゲの事は好きだけど・・・いやっ彼氏とかに言う
好きとかそんなんじゃない？無くて・・・って私何考えてるのよ！？

「・・・あの・・・アスカ？顔が真っ赤だけど大丈夫？熱でもあるの？」

「バカっ！！」

私は頭の葉っぱでヒトカゲを思いっきりビンタした。ビンタされた
ヒトカゲの頬が赤く腫れた。

「何で僕がビンタされるの（泣）」

「自分で考えてみなさい！もう！」

何であのタイミングで熱でもあるの？って聞くのよ！そこらへんKY
なんだから！

「ほら！さっさと大いなる峡谷に行くわよ！」

「・・・はい。」

私達は大いなる峡谷を目指して出発した。

それで大いなる峡谷に到着したのは良いんだけど・・・案の定いた
のよね・・・正気を無くしたポケモン達が（汗）

「葉っぱカッター！」

「火の粉！」

サンダーとの戦いで私達はちょっと強くなれたみたい。やってくる

ポケモン達が弱く感じるのよね。でも油断は出来ないわ。峡谷って言うだけあって道は崖に挟まれていて狭いから挟み撃ちにあったら大変だからね。

「・・・ねえアスカ？」

「何？」

「囲まれちゃってるんだけど・・・」

そう言ってヒトカゲは崖の上の方を見ていた。

私も上を見てみるとそこにはアリアドスが六匹・・・これって不味い展開？

「どうしよう？」

「貴様ら！ここが俺達の縄張りだと知っていてやって来たのか？」
縄張り？てかこのアリアドス達正気を失ってないわね・・・もしかしたら話し合いで解決出来るかもしれない。

「私達は精霊の丘にいるネイティオに会って聞きたい事があるの！その聞きたい事が聞けたらすぐに帰るから！」

「誰が貴様らを帰すものか・・・久しぶりに来た獲物をそう簡単に逃してなるものか！」

獲物って・・・このアリアドス達随分お腹空かせているみたいね。てかポケモン食べるとか随分グロテスクじゃない？

「ぼ、僕なんか食べてもお腹壊すだけだよ！？」

ヒトカゲ（汗）はあ・・・しょうがないわね。確かこの前見つけた物が・・・あっ！あったあった♪

「あなた達お腹空いてるんでしょ？これあげるから今回は見逃してよ。」私は持っていた緑グミと桃色グミを合計六個アリアドス達に見せた。そしたらアリアドス達の目が変わった。

「そ、それは俺達の好物の！く、くれるのか？」

「あげるわよ。私達食べられたくないもの。」

「よ、良し！そのグミをくれたらお前達を見逃そう！」

「約束よ？じゃあ受け取って！」

私はアリアドス達に緑グミと桃色グミをあげた。アリアドス達は凄
い勢いでグミを食べている。

見事な食べっぷりね（汗）さてと・・・

「行くわよヒトカゲ。」

「あつ待ってアスカ！」私達は再び進み始めた。

「ねえアスカ。何でアリアドス達の好物が解ったの？」

「アリアドスは虫タイプと毒タイプの両方を持ってるでしょ？だから、虫タイプが好きな緑グミと毒タイプが好きな桃色グミを出した
だけよ。まあこの位の知識はポケモントレーナーなら常識だけどね。」

「・・・えっ？アスカ、今なんて言ったの？」

「だから、アリアドスのタイプが・・・」

「もっと先だよ！アスカ、今自分の事ポケモントレーナーって言う
てたよ？」

「えっ？」

ポケモン・・・トレーナー・・・なんだろう・・・凄く聞き慣れた感
じがする・・・ポケモントレーナー・・・ポケモントレーナー・・・
あゝダメだ！もう少しで何か思い出しそうなのに思い出せない！

「アスカ？大丈夫？」

「えっ？あっうん大丈夫・・・何か思い出せそうだったんだけど・・・
なかなか思い出せないのよねーこれが・・・」

「その思い出せそうな事もネイティオに聞けば解るかもしれないね
！早く行こう！」

私達は再び大いなる峡谷を進み始めた。しばらく進んでやっとな精霊
の丘にたどり着いた。

「ここが精霊の丘か・・・周りは岩ばっかりね・・・」

「でもアスカ。夕陽が綺麗だよ。」

ヒトカゲが見てる方を私も見てみると確かにそこには綺麗な夕陽があった。もうこんな時間になってたのね・・・

「あっ！ねえアスカ。彼処にいるのがネイティオかな？」

・・・あの緑の身体、あの立派な翼・・・そして何より凄い不思議オーラを出した感じ・・・間違いなく精霊ポケモンのネイティオだわ。

「間違い無いわね・・・」

「じゃあ早くアスカの事を聞こうよ！すいませうん！」

ヒトカゲがネイティオに向かって呼び掛けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」・・・あ、あれ？あんだだけ大きな声で呼んだのに反応無し？

「あのすみません！あなたネイティオですよ？ちょっと聞きたい事があるんですけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」今度はネイティオの真横で声をかけたのにまた反応無し・・・まさか目を開けたまま寝てるとかは無いわよね？

「ふ・・・・・・・・聞きたい事があるんですけどおおっ！！！」

み、耳がキーンてなった（汗）ヒトカゲこんなに大きな声出せたのね・・・・・・・・「・・・・・・・・・・・・・・・・」ええ（汗）これでも反応無しとか
どんだけ（汗）

「ダメだ、全然反応しないよ（汗）どうしようアスカ？」

「・・・・・・・・こうなったらあれしかないわね。ヒトカゲ、あなたはネイティオの左側に立って。私は右側に行くから。」

「えっ？わ、解った。」ヒトカゲは私に言われた通りにネイティオの左側に行った。私もネイティオの右側に。

「何をするのアスカ？」

「こうするの。」

私はつるのムチを使ってネイティオをこちょこちょとくすぐった。

「く、くすぐるの？」

「ほらヒトカゲもやりなさいよ！」

「う、うん。」

私達はネイティオをくすぐった。もうこれでもかかっていう位に。

「こちょこちょ・・・」

「・・・」かなりくすぐったんだけど・・・全然反応しない（汗）さすがに疲れてきたわ（汗）

「はぁ・・・はぁ・・・まさかこのくすぐり攻撃でもダメだなんて（汗）」「・・・ぐふっ」

ん？今何か聞こえたような？

「ぐふっ・・・ぐふっ・・・」

・・・まさか・・・ネイティオ？

「ぐふふふ・・・」

い、今頃笑い出した（汗）どんだけ鈍いのよ（汗）

「クワアーーー！！」

いきなりネイティオが叫んだ！？

「な、何！？」

「太陽が・・・沈んでいく・・・」

はい？何を言って・・・っていきなりこっちに振り向いた！？

「いかにも。私はネイティオ。私の正体を見抜くとは・・・お前達ただ者ではないな・・・」

正体って（汗）見たまんまネイティオだったんですけど（汗）

「・・・そのお前。」

「私？」

「お前はただのポケモンではないな・・・お前は・・・人間だな？」
えっ！？見抜かれた！？

「な、何で解るの！？アスカが人間だって！？」

「私は一日中太陽を見つめる事で全てを見る事が出来るのだ・・・過去も未来もな・・・」

「ねえネイティオ！教えて欲しいんだ！アスカは気がついたらポケモンになってたんだって。そして人間だった頃の記憶も無いんだ・・・」

・ネイティオだったら何か解るでしょ？」

「・・・最近よく起きている自然災害・・・それは世界のバランスが崩れた為に起こっている。・・・そしてアスカがポケモンになっ
てしまったのもそれと大きく関わっている。」

私がポケモンになった事と世界のバランスが崩れた事が大きく関わ
っている・・・ってええ！？

「それはどういう事！？」

「・・・・・・・・・・」また黙っちゃった・・・

「黙って無いで教えてよ！」

「ちよつと落ち着きなさいよヒトカゲ。・・・ネイティオ。私がポ
ケモンになった事と世界のバランスが崩れた事が関わっているって
どういう事なの？」

「・・・今はそれに答える事は出来ない。その答えは自分で見つけ
るのだ。・・・だがこれだけは言っておく。このまま世界のバラン
スが元に戻らなければ・・・この世界はとんでもない事になる。」

「と、とんでもない事？」その時私は背後に気配を感じた。

「誰！？」

私はそう叫びながら振り向いた。だけど、そこには誰もいなかった。

「どうしたのアスカ？」

「今・・・誰かいたような気がしたんだけど・・・気のせいみたい
ね。ごめんね急に叫んだりして。もうすぐ日が暮れちゃうからそろ
そろ帰ろうヒトカゲ。」

「えっでも・・・」

「答えはちゃんと自分で見つけるわよ。ほら、帰ろうヒトカゲ？」

「・・・解ったよ。」

結局何も自分の事については解らなかった私達は自分達の家に帰る
事にした。

（ケケッ♪こいつは良い事を聞いたぜ♪しかし、まさかアスカも人

間だったとはな。これを利用しない手はないな♪面白くなってきたぜ♪

その時この会話をあいつに聞かれていた事に私達は気付かなかった。

第十話精霊の丘のネイティオ（後書き）

第十話完成です。

第十一話キュウコン伝説（前書き）

ネイティオに会えたのは良かったけど・・・結局私が何者なのかは
つきりしなかったわねゝ

第十一話 キュウコン伝説

「うーん・・・今日も良い天気！・・・なのは良いんだけど・・・昨日のネイティオが言ってた事・・・世界のバランスが崩れた事と私がポケモンになったのは関係があるって事らしいけど・・・おまけにそのせいで自然災害が頻発していて、このままにしておくとう世が崩壊するとも言ってたわね・・・話のスケールが大きすぎていまいちピンとこないわね・・・それに世界のバランスって言われても、そもそも世界のバランスって何よ？」

私は朝早く起きて早速昨日のネイティオの話を考えていた。

「おはようアスカ！」

私が考え事している時、いつものようにヒトカゲがやって来た。

「あっおはようヒトカゲ・・・」

「あれ？何か今日は元氣無いね？・・・もしかして昨日のネイティオの話の事を考えていたの？」

「うん。ねえヒトカゲ・・・ネイティオは世界のバランスを直さないと世界は崩壊するって言ってたわよね？・・・世界のバランスって何だと思う？」

私は疑問に思っていた事をヒトカゲに聞いてみた。・・・ヒトカゲに聞いても解らない事は解っていたけど聞かずにはいられなかった。「世界のバランスかあ・・・僕も解らないなあ・・・」

・・・やっぱりそうだね。ヒトカゲだって解らないよね。

「でもこれだけは解るよ。」

「えっ？」

「僕達は僕達に出来る事をやるだけだよ。出来る事を一つ一つね。」ヒトカゲ・・・

「さあアスカ！今日も張り切って救助活動をしようよ！」

「・・・そうよね。私達に出来る事をやれば良いんだよね！ようし！今日も頑張るわよ！」

私達は救助の依頼が無いかペリッパ―連絡所に向かう事にした。

通り道のポケモン広場。そこでハスブレロやブルー、それにマダツボミが何か話していた。何を話してるのかしら？

「ねえ！何かあったの？」

「ん？ああアスカ達か！いやさ、キュウコン伝説ってあるだろ？昔話のさ。」

「キュウコン伝説？何よそれ？」

「何だ知らないのか？キュウコンの尻尾を触った奴が・・・タタリを掛けられるって言う昔話なんだ。」

ハスブレロが教えてくれた。へえ・・・そんな昔話があるのねえ・・・

「ずっと伝説だとばかり思われたんだけど・・・最近になって実は本当にあったんじゃないかって噂になってるんだよ。」今度はブルーが教えてくれた。

「まああくまで噂ですから・・・話半分で信じた方が良いでしょう。ちなみに私は噂何か信じませんけど。」

言いきったわねマダツボミ・・・

「キュウコン伝説を詳しく聞きたいならよ、ナマズンってポケモンが良く知ってるから訪ねてみると良いぜ！」

ナマズン・・・ひげうおポケモンって呼ばれているポケモンね。

「そのナマズンは何処にいるの？」

「ポケモン広場の北の方を見てみな。彼処に池が見えるだろ？」ハスブレロに言われて北の方を見てみた。確かに池があるわね。

「彼処にいるのね？」

「ああ！」

「解った！ありがとうハスブレロ！」
私とヒトカゲは依頼を受ける前にナマズンにキュウコン伝説の事を聞く事にした。

ポケモン広場から北の方にある池に私達は到着した。綺麗な水ねえ・

「アスカ、彼処にいるのがそのナマズンかな？」ヒトカゲが指差す先には一匹のポケモンが・・・

「ええ。間違いないわ。すみませうん！」
私はナマズンに声をかけた。

「うん？お客とは久しぶりじゃのう。何か用かな？」
「あなたならキュウコン伝説の事を詳しく知っているって聞いて来たんだけど・・・」

「キュウコン伝説？確かにワシは詳しいが・・・お前さん達はキュウコン伝説の事を聞きたいのかい？」

「ええ！」
「ほっほっほ！良からう！それでは聞かせてやるかの！キュウコン伝説を。」

ナマズンは私達にキュウコン伝説を聞かせてくれた。

「むかし昔、キュウコンと言うポケモンがおった・・・キュウコンの尻尾には神通力が込められており、その尻尾に触った者には千年のタタリが掛かると言われておった。にも関わらず、ふざけて尻尾を掴んでしまった愚か者がいたのじゃ。しかもその者は人間じゃった。」

えっ！？人間が！？

「案の定尻尾を掴んだその人間は千年のタタリを掛けられた。じゃ

が・・・その時サーナイトというポケモンがその人間をかばい、なんと自らの身を犠牲にしてタタリを受けたのじゃ。」

サーナイト・・・抱擁ポケモンって呼ばれポケモンね。とても優しい心を持ったポケモンだったわね・・・

「何でそのサーナイトは人間をかばったの？」

ヒトカゲがナマズンに質問した。まあヒトカゲの疑問も解らない事も無いからね。

「サーナイトにとってその人間はかげがえのないパートナーだったからじゃよ。その人間はポケモントレーナーと呼ばれる者でな。ポケモントレーナーと一緒にいるポケモンには強い絆があるんじゃ。」
ポケモントレーナー・・・

「・・・へえ。でも、人間には良い人間もいれば悪い人間もいるんでしょ？」

「その通りじゃ。その時、サーナイトを見て可哀想に思ったキュウコンは人間にこう告げた。サーナイトを助けたいか？とな・・・じゃが、その人間はあろう事かサーナイトを見捨てて逃げてしまったのじゃ・・・」

「・・・酷いね・・・」

「そんな人間にキュウコンは失望した。そしてこう予言したのじゃ。いずれあの人間はポケモンに生まれ変わるっとな。」・・・えっ！
？人間がポケモンに！？

「そしてその人間がポケモンに転生したその時、世界のバランスは崩壊するであろう・・・とな。これがキュウコン伝説の話じゃ。どうじゃ？面白かったかな？」

・・・私達は沈黙をしたままだった。だって・・・人間がポケモンになって・・・そしてそのせいで世界のバランスが崩壊するって・・・もしかしたらそれは私の事かも知れないんだもの・・・

「ほほう。面白くて声も出ないか？ほっほっほ♪そんな深刻な顔せんでもよいぞ？確かに最近本当の話かもと噂されとるが、只のおとぎ話にすぎぬよ。また話が聞きたければここに来ておくれ。ワシは

いつもここにおるからの！ほっほっほ♪」

私達はナマズンにキュウコン伝説を聞いた後、ポケモン広場に戻って行った。・・・こんな気持ちで救助活動何て出来ないわ・・・

「・・・ヒトカゲ、今日はもう帰らない？」

「えっ？どうして？」

「ごめん・・・こんな気持ちじゃ、救助に集中出来ないから・・・」
「・・・解ったよ。」

私は自分の家に帰る事にした。家までヒトカゲと一緒にいてきてくれた。

「ごめんねヒトカゲ・・・私、今日はもう寝るね・・・」

私は家に入ろうとした。

「待ってアスカ！」

突然ヒトカゲが私を呼び停めた。

「アスカ！さっきのナマズンの話の事・・・もしかしてアスカの事を言ってるんじゃないかって思ってるんじゃないよね？」

「・・・」

「アスカは絶対そんな酷い事をするような人じゃないよ！それに、まだアスカがその人間だって言う証拠は何も無いんだよ！」

・・・そうは言うけど・・・でも・・・どう考えても私しか・・・

「そうは言うけどヒトカゲ・・・どう考えても私しか・・・いないじゃない・・・」

私は思わず涙を流してしまった。その時、ヒトカゲが私の事を突然抱きしめた！

「・・・ヒトカゲ？」

「大丈夫。絶対アスカはそんな酷い人間じゃない。だって・・・アスカは僕にとって大切な存在だから・・・とっても大切な・・・」

「・・・ヒトカゲ・・・」私はヒトカゲの胸の中で泣いた。時間がたつのを忘れて・・・

第十一話キュウコン伝説（後書き）

第十一話完成です。

第十二話逃亡。真実を求めて・・・（前書き）

・・・ヒトカゲに抱かれてる時・・・
凄く暖かった・・・

第十二話逃亡。真実を求めて・・・

私は夢を見ていた。

いつも見る殺風景な所にいつも見る誰かがいた。シルエットだけだから何かまでは解らないけど・・・あれ？何か私に語りかけてる！でも・・・上手く聞き取れないわ・・・前よりは聞きやすいんだけど・・・今回はこっちから聞いてみますか。

「ねえ・・・あなたは・・・一体誰なの？」

「・・・私は・・・私はサーナイト。」

「・・・えっ！？サ、サーナイト！？

「良かった。やっと・・・やっと会えた・・・」

「良かったって・・・前から知ってたって事？私を？」

「私はあなたの・・・」その時サーナイトの姿がボヤけてきた！

「あっ待って！？もう少し聞きたい事が・・・」

私は夢から目が覚めた。

「・・・何か・・・変な夢を見てたような・・・あっそうだサーナイト！サーナイトが私の夢の中に出てきたんだ！・・・ちよっと待ってよ・・・昨日のナマズンの話じゃ・・・やっぱり・・・私が・・・」

その時、ヒトカゲがいつものようにやって来た。

「おはようアスカ。・・・あれ？顔色悪いよアスカ？具合でも悪いの？」

「・・・ヒトカゲ・・・」私がヒトカゲに夢でサーナイトが出てき

た話を話そうとした時、ポケモン広場の方から何やら騒ぎ声が聞こえて来た。

「何だろ？行ってみようアスカ！」

ヒトカゲはポケモン広場に向かってしまった。

「あつ待ってヒトカゲ！」私はヒトカゲのあとを追いかけた。

ヒトカゲを追ってポケモン広場に着いた時、私は広場の雰囲気がいつもと違う事に気づいた。

お店にポケモン達が居ない・・・何かあったの？

「アスカこっち！広場の中心にポケモン達が集まってるよ！」

ヒトカゲが指差す先には確かにポケモン達が集まっていた。

「一体何があったの？」ヒトカゲが近くにいたマダツボミに聞いた。

「もう私ビックリしました！本当だったんですよ！」

「何のこと？」

「キュウコン伝説ですよ！私は噂なんか全然信じてなかったからもうビックリで！」

「あつヒトカゲさんにアスカさん！」

あれは・・・キャタピーちゃんね。

「キャタピーちゃんも来てたんだね？」

「はい。」

「シーツ！静かにしてくれ！今彼処にいる奴が話してんだから！」いきなりブルーに怒られた。

「ん？誰が話してるの？」ヒトカゲがキャタピーちゃんに聞いた。

「そ、それが・・・」

キャタピーちゃんが見つめる視線の先を見るとそこには・・・

「ゲ、ゲンガー！？」

イジワルズのゲンガーがいた。

「・・・って訳で俺は精霊の丘に行ったんだ。そしたらそこでスゲ

「もの見ちゃったんだ。ケケッ！」

精霊の丘！あの時に感じた視線はゲンガーのものだったのね！

「スゲーものって何だ？」ハスブレロがゲンガーに質問した。

「あるポケモンがネイティオに相談してたんだ。そのポケモン・・・姿形はポケモンなんだが・・・なんと！元々は人間なんだってさ！」

ゲンガーの言うことを聞いて周りのポケモン達が驚きの声をあげた。

「しかもネイティオはその人間にこう言ったんだ。ポケモンになったのと世界のバランスが崩れたのは大きく関係してる・・・ってな。」

「それって！？キュウコン伝説の通りじゃないかよ！？」

「ケケッ！驚くのはまだ早いぜハスブレロ！最近災害が良く起きるだろ？ネイティオによるとあれは世界のバランスが崩れた為に起こってるんだってさ。しかも、崩れたバランスを早く戻さないと・・・世界はとんでもない事になるって言ってたぜ！ケケッ！」

ゲンガーがそう言うのと、ポケモン達がパニックを起こした。

「まあまあ諸君。そんな慌てなくても何とかする方法はあると思うぞ。ケケッ！」

「どんな方法だよ？」

ブルーが質問した。

「簡単な事さ。その人間がポケモンになったせいで世界のバランスが崩れたのなら・・・ソイツが消えれば問題解決だろ？」

「そう言われれば・・・確かにそうかも・・・」ゲンガーの言うことに皆納得した。

「ケケッ！しかもその人間はサーナイトを見捨てた酷い奴なんだぜ？倒されても文句無いと思うけどな・・・なあ、アスカ？」

「・・・」

「えっ・・・えええ！？」皆驚いてる・・・

「おい！本当なのか！？」

「ちょ、ちよっと待ってよ皆！？アスカがそんな酷い奴の筈は・・・」

「ヒトカゲに聞いてるんじゃない！アスカに聞いてんだ！アスカ！お前は本当に伝説に出てくる人間なのか！？」

「・・・そうじゃないって言いたい。だけど・・・私の夢の中にサーナイトが出てきた・・・それにサーナイトは私の事を知っていた・・・」

「・・・」

「アスカ・・・」

「ケケケケケッ！返す言葉が無いようだなアスカ！そういう事だ諸君。アスカを倒して平和になろうぜ！ケケケッ♪」
皆が私に迫って来た。

「ちよつと皆！？ゲンガーの言うことを信じるの！？皆だって知ってるでしょ！？アスカはとっても優しいんだよ！そんなアスカがサーナイトを見捨てた酷い人間な訳が・・・」

「・・・世界の平和の為だ・・・許せアスカ！」ヒトカゲの言葉は皆に届いていない。ハスブレロが私に乱れひっかきで攻撃して来た！私は間一髪乱れひっかきを避けた！

「逃げようアスカ！早く！」

ヒトカゲに引っ張られて私はその場から逃げた。（ケケッ♪思っていた以上に上手くいったぜ♪これで邪魔なアスカはおしまいだ！ケケケケケッ♪）

ポケモン広場から私の家の前まで逃げて来たヒトカゲと私。

「ハア・・・ハア・・・何とか逃げきれたみたいだね・・・まさか皆ゲンガーの言うことを信じるなんて・・・それよりアスカ。何で言い返さなかったの！？アスカはキュウコン伝説に出てくる人間じゃないって！？」

「・・・ねえヒトカゲ・・・救助隊・・・辞めよう・・・」

「えっ！？急にどうしたの！？救助隊辞めようなんて・・・アスカらしく無いよ！何かあったの？」

私はヒトカゲにサーナイトが夢に出てきた事を話した。

「夢の中にサーナイトが・・・」

「うん・・・しかもサーナイトは私の事を知ってるみたいなの・・・やっぱり私が・・・私が原因で世界のバランスが崩れたのよ・・・だからヒトカゲ、私の近くにいとあなたまで倒されるかもしれないの・・・だから・・・」

「ふざけないでよ！！」ヒトカゲがいきなり私に怒鳴った！

「ヒトカゲ・・・」

「アスカはまだ人間だった頃の時の事を全部思い出した訳じゃないんでしょ！？だったらまだ真実かどうかはまだ解らないじゃないか！何が真実なのか調べないで・・・勝手に自分が原因だって決めつけないでよ・・・僕は・・・アスカを信じてるんだよ・・・」

「話はそこまでだヒトカゲ。」

私達に誰かが喋りかけてきた。声がした方を見てみるとそこにはチームFLBがいた。

「兄さん・・・」

「先程の広場での騒動の後・・・皆で話あった。世界を救うにはどうしたら良いか・・・をな。そしてその結果・・・アスカ、お前を倒す事が決まった。」

フリーデンが言った。

「そんな！？」

「ワシもまさかとは思ったが・・・そうであって欲しく無いと願ったが・・・残念だ。ワシ達は・・・全力でお前を倒す！」フリーデン達が戦う体制に入った！

「アスカは絶対倒させない！アスカは僕が守る！！」
ヒトカゲが私の前に立った。

「・・・」

急にフリーディン達が一步後ろに下がった。

「一晚・・・時間をやる。」

「えっ？」

「その間に荷物をまとめてここから逃げるのだ。明日になればいろいろな救助隊がお前を倒そうと襲ってくるだろう。いや、アスカだけではない・・・アスカについていく全ての者は敵とみなされ・・・容赦なく攻撃してくるだろう。それはワシ達も同じだ。当然お前達を倒しに行く。しかし、それでも何とか逃げきるのだ。逃げて逃げて・・・生き延びるのだ。真実を見つけるまで・・・な。」

フリーディン・・・

「アスカ・・・俺もお前が悪い人間じゃないと思っている。だが・・・救助隊である以上アスカを倒さなきゃならない。そうならない為にも・・・絶対真実を見つけてくれ・・・」

ヒトカゲのお兄さん・・・

「次に会う時は容赦しない。ではな。」

フリーディン達チームFLBは行ってしまった。

「・・・アスカ。フリーディンや兄さん達も僕と同じでアスカの事を信じてるんだよ？それなのに・・・アスカが自分の事を信じられなくてどうするのさ！」

「・・・アスカさん。」私とヒトカゲが声が聞こえた方を見るとそこにはキャタピーちゃんがいた。

「キャタピーちゃん・・・」

「アスカさん・・・僕約束しましたよね？アスカさんの救助基地を作るって・・・僕も大きくなったら救助隊やるって。」

アスカさん・・・くじけちゃダメです！アスカさんは僕にとって憧れなんですから！だから僕もアスカさんを信じてます！」キャタピーちゃん・・・こんなに・・・私の事を信じてるポケモンがいっぱい・・・なのに・・・私は勝手に自分がそうなんだって決めつけて・・・自分の事を信じられなくなってた・・・

「・・・だってさaska。どうするの？」

「・・・解ったわよ。必ず真実を見つけてやろうじゃないの！」

「・・・やっといつものaskaに戻ったね。やっぱりaskaはそう
でなくちゃ！そうと決まれば早速出発の準備をしなきゃ！まだ他の
救助隊がやって来るまで時間があるから明日の朝一番に出発しよう
！」

「解ったわ。」

翌日の早朝。

「・・・まだ来ないわねー朝一番って言ったのはヒトカゲなのに・
・」私はヒトカゲが来るのを家の前で待っていた。

しばらくすると、ようやくヒトカゲがやって来た。・・・何か荷物
いっぱい持って来たわね（汗）

「ハア・・・ハア・・・お、おはようaska！」

「何よその大量の荷物は？」

「旅先で何が起こるか解らないから思いつく限りの道具を持って来
たんだ・・・」

かなり重たそうなんですけど（汗）

「あんたねえ、旅って言っても逃亡の旅なのよ？そんなに重い荷物
持って行ったらすぐに捕まるわよ！こういう時は必要最低限の物だ
けで良いのよ。体力を回復してくれるオレンの実とかね。あとは旅
先で入手すれば良いし。だ・か・ら。その荷物は置いていきなさい。」

「ええ！？せっかく用意したのに・・・」

「良いから置いていきなさい。」

「・・・はい。」

ヒトカゲは私が言った必要最低限の物だけを小さい袋に入れた。あとの余計な物はここに放置・・・は勿体無いから私の家の中に置いてきた。

「・・・これで準備オッケーと・・・それじゃ、行きましょうかヒトカゲ！」

「うん！」

「アスカさん！ヒトカゲさん！」

私達は出発しようとした。その時、誰かが私達を呼び止めた。あれは・・・キャタピーちゃんじゃない！それにトランセル君やワタツコ達！

「良かった！間に合ったです！」

「私達、アスカさんを見送ろうと思って。」

「ぼ、僕も！」

ん？声はすれども姿が見えず・・・このパターン、前にもあったよな・・・なんて思ってたら地面からモコツとディグダが現れた！

「おはようございます！ディグダです！僕も見送りたいです！」

「皆・・・」

その時、空から一匹のペリッパーがやって来た。そしてペリッパーはポストの中に何か入れるとそのまま飛んで行った。

「何だろ？アスカ、見てみたら？」

「解った。」

私はポストの中を見た。手紙がはいってる。

私は手紙を読んだ。

『アバヨ！しばらくサヨナラだ！でもよ、また手紙を運べるその日が来るまで・・・俺はいつまでも待ってるぜ！・・・さすらいの郵便屋さん、ペリッパーより。』

「・・・これは益々真実を見つけないきゃね。」

「だね。そろそろ行こうアスカ。他のポケモン達が起きちゃうから。」

「そうね・・・じゃあキャタピーちゃん、それに皆、必ず真実を突き止めて帰ってくるからね！」私達は真実を突き止める為に旅に出た。私達の逃亡生活が始まった。

第十二話逃亡。真実を求めて・・・（後書き）

第十二話完成です。

第十三話群青の洞窟を抜けろ！（前書き）

真実を突き止める為に旅に出た私とヒトカゲ。
・・・旅っていうか逃げただけどね（汗）

第十三話群青の洞窟を抜ける！

私とヒトカゲが逃亡生活を始めて数日が経過した。今はポケモン広場から遠く離れた群青の洞窟って呼ばれる場所の前で休憩中。とにかく最初は他の救助隊から逃げる事だけを考えてきたんだけど・・・もちろんそれだけじゃダメなのは解ってるのよ。解ってるんだけど・・・具体的にどうすれば良いか全く考えてなかったのよ（汗）

「はぁ〜疲れたねえアスカ？」

私の隣でかなりバテ気味のヒトカゲが私に聞いてきた。

「ちよっとヒトカゲ。あんたも少しは考えてよね？」

「何を？」

「何を？ じゃないわよ！ 私が本当にキュウコン伝説に出てくる人間なのかどうか・・・それを調べる為にはどうするのか考えてって言うてるの！」

「キュウコンに聞けば良いんじゃないの？」

さらりと答えたヒトカゲ。・・・確かにそうなんだけど・・・

「そのキュウコンが何処にいるのかあなた知ってるの？」

「それは・・・知らない（汗）」

やっぱりね（汗）

なんて会話してた時、遠くの方でポケモン達の声が聞こえてきた！

「嘘！？ もうここまで追って来たの！？」

「まずい！？ 何処か隠れられる場所は無いかな？」 私とヒトカゲは慌てて隠れられる場所を探した。でもこういう時に限って見つからないのよ〜！

「二人共こっち！」

突然誰かに話しかけられた。

「あ、君は！」

「早くこっちに来て！ 見つかったちゃうよ！」

私とヒトカゲはそのポケモンが掘った穴の中に隠れた。

・・・しばらくすると私とヒトカゲを追ってきた救助隊が近くまで来た。何やら会話をしているみたいんだけど・・・上手く聞き取れないわね・・・

「・・・ねえアスカ。奴らもう行った？」

ヒトカゲが小声で私に聞いてきた。

「まだよ。・・・あつ待つて！」

救助隊が群青の洞窟の中に入って行くわ・・・
どうやら上手くやり過ごせたみたい。

「行ったわ。」

私とヒトカゲは穴から出た。

「ふう・・・助かったね？」

「そうね。ありがとうねグライガー！」

私達を助けてくれたのは以前、サンダーがいた雷鳴の山で襲われて
いるのを助けたグライガーだった。

「どういたしまして♪」

「でもどうして私達を助けてくれたの？」

「キュウコン伝説の事は聞いてます。でも、アスカさんは俺を助けてくれた命の恩人だ。そんな人が悪い人間の筈が無い！だから助けたんだ。」

グライガー・・・

「あっそうだグライガー！君は知ってるかな？キュウコンがいる場所。」ヒトカゲがグライガーに聞いた。

さすがにグライガーがキュウコンの居場所を知ってる訳が・・・

「知ってるよ。」

ええー！？知ってたー！？

「キュウコンは氷雪の霊峰って所に住んでるって前に聞いた事があるんだ。」

「氷雪の霊峰・・・それって何処にあるの？」

「ここからだ北東の方角だよ。」

北東・・・って事は群青の洞窟は避けて通れないって事ね・・・

「氷雪の霊峰に行くにはさつき救助隊が入って行ったこの群青の洞窟を抜けないとダメって事だよね？」

ヒトカゲが私に聞いた。

「そうね・・・上手く見つからずにすめば良いけど・・・」

「わざわざ洞窟の中を通る事は無いよ？俺が穴を掘るで群青の洞窟の出口まで連れていってやるから。」

「えっ！？良いのグライガー？」

「任せとけて！」

私とヒトカゲはグライガーに穴を掘ってもらって地中から群青の洞窟の出口に向かう事にした。

「はい到着・・・ってあれ？」

私とヒトカゲはグライガーと一緒に地上に出た。・・・のは良いけど、明らかにここはまだ群青の洞窟の中よね？

「ちよっとグライガー？」

「アハハ・・・悪い。ちよっと地上に出るのが早かったみたい（笑）」

「笑って誤魔化してるわね（汗）」

「・・・笑ってる場合じゃないみたいだよ二人共。」

ヒトカゲに言われた。

ヒトカゲが見てる視線の先には先にこの洞窟に入ってた救助隊がいた。

「・・・やばいわね（汗）」

「アスカだな！お前を倒して世界を平和にするんだ！行くぞ皆！」
救助隊が私達に向かって来た！

こうなったら戦うしかないわね！相手はマッスグマが一匹にジグサグマが三匹！数では不利だけどそんな事言ってる場合じゃないしね！

「やるわよヒトカゲ！」

「うん！」

私とヒトカゲは戦う体制に入った。

「戦う必要は無いよ。」グライガーがそう言ったその時！突然マッスグマ達が目の前からいなくなった！

「えっ！？何処に消えたの！？」

「消えた訳じゃないよ。良く見てみてよ。」

グライガーに言われ、良く見てみた。マッスグマ達が穴の中に落ちていたのが見えた。おまけに目を回してる。

これって・・・落とし穴？

「ニシシシ♪俺が昔作った落とし穴に引っ掛かったな♪」

凄い満面な笑みを浮かべながらグライガーが言った。

「昔掘ったって（汗）ていうかなんで落とし穴なんか掘ったのよ？」

「いやぁ暇だったから作ったんだ（笑）」

暇だったからって落とし穴作るかな普通（汗）

このグライガー・・・かなりイタズラが大好きみたいね（汗）

「まあなんにしてもグライガーの落とし穴のおかげで助かったわ。

マッスグマ達が気絶してる間にこの洞窟を抜けましょ！」私達は先に進んだ。

しばらくしてようやく群青の洞窟を抜ける事が出来た。

「やっと洞窟から抜ける事が出来たね。」

「ええ。グライガー、ここまでありがとうね。」私がグライガーにそう言うとか疑問に思ったのか首を傾げた。

「えっ？何そのここでお別れみたいな言い方？」

「私達の旅は危険な旅。あなたを巻き込む訳にはいかないの。」

私の言葉を聞いてグライガーは少し落ち込んだ。・・・気持ちは嬉しいけど、やっぱり巻き込む訳にはいかないから・・・

「・・・解りました。アスカさん、必ず無事に帰って来て下さいね！」

「ええ！約束するわ！」私とヒトカゲはグライガーと別れて先に進んだ。

第十三話群青の洞窟を抜けろ！（後書き）

第十三話完成です。

第十四話炎の山を抜ける！VSファイヤー！（前書き）

群青の洞窟を抜けた私達を待ち受けていたのは大量の溶岩が流れ出る炎の山だった・・・にしても、あのグライガー本当にイタズラ好きねえ。私達を追ってくる救助隊の足止めをするって言って群青の洞窟出口付近に大量に落とし穴を作るとか（汗）あの子捕まったりしないかしら？

第十四話 炎の山を抜ける！VSファイヤー！

「大きな山ねえ！おまけに軽く噴火してるし（汗）」

「ここは炎の山って呼ばれる場所だよアスカ。見ての通りここは噴火が多い所なんだ。そのせいでここに近づくポケモンはほとんどいないんだ。」

「なるほど・・・」

私達が話してる時、遠くの方からポケモン達の声が聞こえてきた！

「あれは・・・ダーテング達じゃない！？ここまで追ってきたの！？」

「まずいね！アスカ！早く行こう！炎の山の中まで草タイプのダーテング達はさすがに追って来ない筈だよ！」

私はヒトカゲと一緒に炎の山に向かった。

山を登り始めてからしばらく経った。だいぶ登ってきたんだけど山頂がなかなか見えない（汗）

それに・・・

「暑い（汗）火山だから暑いのは予想してたけど・・・暑すぎるでしょ！？」

「そうかなあ？僕は平気だけど。」

「そりゃヒトカゲが炎タイプだからでしょ！私は草タイプなのよ！私達がそんな会話をしていた時、急に周りから誰かに見られている視線を感じた。」

「ヒトカゲ・・・」

「解ってるよアスカ・・・囲まれたみたいだね。」次の瞬間岩の陰

からポケモン達飛び出して来た！

「見つけたぞアスカ！」救助隊ね！あれ？でもダーテングがいないみたいね。・・・もしかして葉っぱが燃えるのが嫌で別の救助隊に任せたのかしら？

「アスカ！来るよ！」

「解ってるわよ！」

相手はニョロモが二匹にニョロゾが二匹。水タイプが中心の救助隊って訳ね。相性的には私が断然有利だけど、ヒトカゲはそうもいかないわね。

「水鉄砲！」

「葉っぱカッター！」

ニョロモ二匹がヒトカゲに放った水鉄砲を私の葉っぱカッターで防ぐ事が出来た！

「ありがとうアスカ！」

「油断しないでヒトカゲ！次の来るわよ！」

ニョロゾ二匹が私達に向かってバブル光線を放ってきた！

「火の粉！」

「葉っぱカッター！」

私の葉っぱカッターとヒトカゲの火の粉を放ってバブル光線を防いだ。

「ヒトカゲ！」

「解ってるよ！煙幕！」ヒトカゲは煙幕を使った。黒い煙がニョロモとニョロゾ達を包み込んだ！

「今のうちに逃走！」

私達は全速力で逃げた！私達の目的は真実を突き止める事であって救助隊を倒す事じゃないからね。なるべく戦闘は避けないと。

「ハア・・・ハア・・・なんとか逃げきれたねアスカ。」

「え、ええ・・・」

全速力で走ったからちよつと疲れちゃった・・・

「・・・立ち去れ。」

ん？今何か声が聞こえたような？

「ヒトカゲ、今何か言った？」

「えっ？僕は何も言っていないよ？」

気のせいだったのかなあ？でも、確かに聞こえたような・・・

「立ち去れ。」

やっぱり気のせいじゃない！

「誰！？」

私がそう叫ぶと空から一匹のポケモンがやって来た。

「この炎の山から立ち去れ。」

凄いプレッシャーがこのポケモンから感じられる。・・・そりゃそ

うよね・・・だって目の前にいるポケモンは伝説の鳥ポケモンの一

匹、ファイヤーなんだから！

「サンダーだけじゃなくてファイヤーにも会っちゃうなんて・・・

運が良いのやら悪いのやら（汗）」

「もう一度言う。この炎の山から立ち去れ。」

「もちろんそのつもりよファイヤー。行きましょヒトカゲ。」

「あつ待ってよアスカ！」私達が先に進もうとした時、何故かフア

イヤーが私達の前に立ちはだかった。

「な、何よ？」

「そなたが・・・アスカなのか・・・」

何故かファイヤーは私の事を知っていた！

って事はまさか・・・

「近頃噂でアスカと言う名のポケモンが・・・いや、元は人間か。

そいつのせいで世界の平和が乱れていると聞いた・・・そうか・・・

そなたがそのアスカか・・・」

ファイヤーが戦闘体制に入った!? やっぱりこういう展開になるのね(汗)

「貴様を倒し世界を元の平和な世界に戻す!」

「ま、待ってよファイヤー!? アスカは確かに人間だけど、本当に世界の平和を乱す人間なのかはまだ解らないんだ!」

「問答無用! 火炎放射!」 ヒトカゲの言う事を全く聞いてくれないファイヤーが私に向かって火炎放射を放ってきた!

「つるのムチ!」

私はつるのムチを使ってジャンプし、火炎放射を回避した。

「逃がさん! 翼で打つ!」 ジャンプした私をファイヤーが翼で打つ攻撃を仕掛けて来た!

ダメ! 空中じゃあ避けられない!

「きゃあゝ!?!」

私は翼で打つ攻撃を受けてしまって地面に叩きつけられた!

「アスカ!?!」

ヒトカゲが私の所に駆け寄って来た。

「アスカ! 大丈夫?」

「な、なんとか・・・さすが伝説のポケモンね・・・強いわ・・・」

「火炎放射!」

ファイヤーが容赦なく私達に火炎放射を放ってきた!

「アスカは僕が守るんだ! 火の粉!」

ヒトカゲが火の粉で応戦したけど、火の粉じゃ火炎放射に勝てる訳が!

「くっ!?!」

ヒトカゲの火の粉がどんどんファイヤーの火炎放射に押されていく!

「ダメよヒトカゲ! 火の粉じゃ火炎放射に勝てない! 逃げて!」

「今ここで逃げたら・・・火炎放射がアスカに当たっちゃう・・・」

僕は・・・負けない!!! うおおおお!!!」

その時、ヒトカゲの放っていた火の粉がどんどん変化していった！これは・・・火炎放射！？ヒトカゲが火炎放射を使えるようになったの！？

「ほう。この状況で新たな技を使えるようになったか・・・だが、私の火炎放射を超える事は出来ぬ！！」

ファイヤーが更に火炎放射の火力を上げた！

またヒトカゲの攻撃が押されていく！

このままじゃあ・・・

その時、突然何かの爆発音みたいな音が私達の近くで聞こえた！炎の山が噴火を起こしたんだ！

「こ、こんな時に噴火なんて！？あっあれは！？」

私が見上げたら、大きな岩がファイヤーに向かって降ってきていた！

「くっ！」

ファイヤーは回避しようとしたけど、とてもじゃないけど間に合わない！

「ダメか・・・」

「ソーラービーム！！」私はその岩に向かってソーラービームを放った！ソーラービームは岩に直撃して粉々に粉砕した！

「よ、良かった・・・間に合った・・・」

「アスカ、一体いつソーラービームを使えるようになったの？」

「フシギダネに教わったのよ。でも、実際に技が発動したのは今のが初めて・・・いちかばちかやってみただけど・・・成功して良かったわ。」

「・・・」

その時ファイヤーがゆっくり私達に近づいて来た。

「そなた・・・何故私を助けた？放っておけば私は岩の下敷きになっていたのに。」

「目の前でピンチになってるポケモンがいるのに放っておける筈が無いでしょ？助けるのが普通だし、それが救助隊の仕事だもの。あ

「今は救助隊から追われる身だから救助隊じゃないか(汗)」

「・・・一つ聞きたい。そなた達は何故この先に進もうとする？」

私はファイヤーに真実を突き止める為にキュウコンがいる氷雪の霊峰を目指している事を説明した。

「・・・」

ファイヤーが炎の山を抜ける道から退いて私達に道を開けた。

「行くが良い・・・」

「えっ？」

「そなたが本当に世界の平和を乱す元凶ならば・・・私を助けたりはしない筈だ。私は・・・そなたを信じてみようと思う。」

ファイヤー・・・

「ありがとうファイヤー。」

私達はファイヤーに見送られて炎の山を抜けた。氷雪の霊峰は炎の山を抜けた先の更に北の方にある。私達は氷雪の霊峰を目指して北に進んだ。

第十四話炎の山を拔けろ！VSファイヤー！（後書き）

第十四話完成です。

第十五話 樹氷の森。VSフリーザー！ (前書き)

なんとか炎の山を抜ける事が出来て良かったけど・・・氷雪の霊峰はまだ遠いわね (汗)

第十五話 樹氷の森。VSフリーザー！

私とヒトカゲは炎の山を越えて更に北の地を目指して進んでいるんだけど・・・

「・・・さ、寒〜！？」

そう！ここはめちゃくちゃ寒いのに！吐く息は白いし周りは雪だらけ！草タイプのチコリータである私にはかなり辛い。

「ねえアスカ〜！見て見て〜！ほら、アスカに似せて作った雪だるま♪」そう言っただけでヒトカゲが私に良く似た雪だるまを見せた。

「こ、こんな、と、時に雪だるま、つ、作ってる場合！？」

寒くて上手く喋れないわ（汗）

「あっごめんごめん。僕雪見るの久しぶりだからつい興奮しちゃって♪」

「うう・・・さ、寒い・・・」

あっ・・・なんだか眠くなってきたわ・・・

「ってアスカ！？ダメだよこんな所で寝ちゃ！？」

「・・・わ、解って・・・るわよ・・・」

ダメ・・・まぶたが・・・重くなってきたわ・・・あれ？何？急に暖かくなってきた？

「これなら寒くないでしょ？」

気がついたらヒトカゲが私を抱きしめていた。

「・・・暖かい・・・」

「僕は炎タイプだからね。・・・ごめんねアスカ。アスカは草タイプだから寒さが苦手な事は解っていたのに・・・一人で雪見て興奮しちゃって・・・」

「もう良いわよそんな事・・・」

その時、私は誰かがこっちを見ているような視線を感じた。

「誰か・・・いる。」

「えっ？」

私とヒトカゲは辺りを見回す。すると、一匹の白いポケモンを見つけた。じっとこっちを見ている。

「あのポケモンは確か・・・」

次の瞬間その白いポケモンは何処かへ走りさってしまった。

「なんだったんだろ？」

「・・・思い出した！あのポケモンは災いポケモンのアブソルだわ！」

「アブソル？」

「災いが起きる時に現れるって呼ばれるポケモンなの。」

「・・・って事はこれから何か災いが起きるって事!？」

「解らないわ。でもアブソルには危険を感知する力があるのは確かよ。用心しといった方が良いわね。」

アブソルに遭遇した後、私達は氷雪の霊峰目指して更に北へ進んだ。そしてその道の途中、樹氷がたくさんある森にやってきた。

「うわぁ！凄いなアスカ！木が凍ってるよ！」

「見てるこっちが凍りそうよ（汗）」

本当に凍りそうな位ここは寒かった。

「じっとしてたら凍えちゃうわ（汗）はやくこの森を抜けましょヒトカゲ！」

「う、うん。」

私達はこの樹氷だらけの森の中へ入っていった。

森の中に入ってからだいぶ時間が経った。

今までだったら一匹や二匹、ポケモン達が襲ってきてたけど、この森に入ってからは一匹もポケモンに遭遇しない。

やっぱりこの環境が厳しいからかしら？

襲われないのはありがたいけど・・・それはそれでちょっと不気味ね（汗）

「アスカ。寒くない？もう少し尻尾の炎を強めにしようか？」

不意にヒトカゲが私に話しかけてきた。

「ちょっと寒いけど、ヒトカゲがそばにいるからなんとか大丈夫。

それに、あまり炎の強さを上げるとあなたが疲れるでしょ？」

「僕なら平気だよ。」

・・・そうは言ってるけど、やっぱり無理してるわね。さっきから私を暖めようと尻尾の炎を強めに出してるせいで少し疲れてるみたい。

「・・・去れ。」

その時、誰かが私達に語りかけた。

「今のアスカ？」

「そんな訳無いでしょ。・・・誰かが近くにいるわね。一体誰！姿を見せなさい！」

私が思いつきそう叫ぶと空から一匹のポケモンがやって来た。

「・・・この森の環境を乱す者よ。ここから直ちに立ち去れ。」

この物凄いプレッシャー・・・そしてこのポケモンの周りの空気中の水分が凍ってダイヤモンドダストが発生する程の冷氣・・・間違はなくこのポケモンは伝説の鳥ポケモンのフリーザー！

「この森の環境を乱すってどういう事よ？」

「・・・この森の冷氣が温かくなってきている・・・今まで溶けた事のなかった氷が溶けだしているのだ・・・」

温かくって・・・充分寒いんですけど（汗）

「今までに起きた事のなかった事が起きている・・・しかもお前達がこの森に入ったのと同時にな。つまり・・・これはお前達の仕業という事だ！」フリーザーが戦闘体勢に入った！

「ちょ、ちょっと待ってよフリーザー！？僕達のせいじゃないよ！」

「問答無用！くらえ冷凍ビーム！！！」

ヒトカゲの言葉を見殺ししてフリーザーが私達に冷凍ビームを放った！
「つるのムチ！」

私はヒトカゲに一本のつるのムチを巻き付けたあともう一本のつるのムチで近くにある木に巻き付けた。そして木の方に向かってジャンプしてヒトカゲと一緒に冷凍ビームを回避する事に成功した。冷凍ビームが当たった地面の所には大きな氷柱が出来上がっていた。

「あんなの受けたら一瞬で凍り漬けにされちゃうわね（汗）」

「どうしようアスカ。どうやったらフリーザーは誤解を解ってくれる？」

「今考えてるわよ！」

「冷凍ビーム！」

って考える時間もくれないのね（汗）フリーザーがまた冷凍ビームを放ってきた！

「避けてヒトカゲ！」

「わわ！？」

私とヒトカゲはそれぞれ別方向に向かってジャンプ。なんとか冷凍ビームを回避出来た。

「逃がさん！」

「もうしつこいって・・・きゃっ！？」

フリーザーが私に冷凍ビームを放ってきたから避けようとしたんだけど、地面が凍りついていて私は足を滑らせてしまった！

「しまった！？」

私は冷凍ビームを受けてしまった！冷凍ビームを受けた所から氷が現れてどんどん私の身体を覆っていく・・・私の身体を完全に氷が

覆うのに時間はかからなかった。

・・・寒い・・・身体が・・・全然動かせない・・・

「アスカ!? アスカ!?」

・・・ヒトカゲが・・・私を覆った氷を叩きながら私を呼んでいる・・・
「お前もそいつと同じく凍り漬けにしてやる!」フリーザーが
ヒトカゲに冷凍ビームを放とうとしている。でも、ヒトカゲは私の
事しか見てないからフリーザーの攻撃に気づいていない!

・・・ヒトカゲ・・・早く・・・逃げて・・・

「冷凍ビーム!」

フリーザーの冷凍ビームがヒトカゲに放たれた! 冷凍ビームがヒト
カゲに迫ってくる!

「かまいたち!!」

その時、何処からかかまいたちが放たれた! 空気の刃は冷凍ビーム
を切り裂いた! そのおかげでヒトカゲに冷凍ビームが当たる事はな
かった。

「かまいたちだと!?!」

「止めるんだフリーザー。お前は誤解している。」私達とフリーザ
ーの間に森に入る前に出会ったアブソルがやって来た。「アブソル
・・・私が誤解しているだろ?」

「そうだ。この者達はこの森の環境変化には関係ない。この森の環
境変化の原因は別にある。」

「・・・本当なのか?」

「だから最初に言ったじゃないか! 僕達は違うって!」
ヒトカゲは怒りながら言った。

「・・・すまない。」

「謝るなら僕だけじゃなくアスカにも謝ってよね!・・・アスカ、
今氷から出してあげるからね! 火炎放射!」

ヒトカゲが私を覆っている氷に向かって火炎放射を放った。氷は溶
かされて私は解放された。

「アスカ!」

ヒトカゲが冷えきった私の身体を優しく抱きしめた。

「アスカ、大丈夫？」

「・・・だ・・・だ・・・」

大丈夫って言いたいけど寒くて思うように喋れない。

「待ってて。すぐに暖かくなるから・・・」

ヒトカゲは尻尾の炎の火力を上げた。

・・・暖かい・・・ヒトカゲの尻尾の炎だけじゃなくて・・・ヒトカゲの肌の温もりも・・・

「・・・本当にすまなかった・・・」

フリーザーが私達の近くまでやって来て頭を深く下げた。

「・・・わ、解って・・・く、くれれば・・・そ、それ、で・・・い、良い・・・わよ・・・」

まだ上手く喋れない。

「・・・そのヒトカゲ。俺について来い。ここではそのチコリータの体力の回復をさせるのは無理だ。近くに洞窟があるからそこで休ませろ。」アブソルがヒトカゲに言った。

「解った・・・」

ヒトカゲは私を抱き上げてアブソルについて行った。

アブソルに連れてこられた洞窟で私はヒトカゲに暖めてもらっていた。

「アスカ、まだ寒い？」

「・・・ちよつとね・・・でも、もう大丈夫よ。さあ、早く先に進まなきゃ・・・」

私は立ち上がりとした。けど、思うように足に力が入らなくてこけてしまった。

「フリーザーの冷凍ビームを受けたんだ。体力が完全に回復するまで無理はするな。」

アブソルに言われた。

「そうも言ってられないのよ……こんな所で休んでたら……救助隊達がやって来てしまおうわ……」

「……何か訳ありのようだが無理するのは良くない。それに、お前達が樹氷の森に来る途中で通った道は今猛吹雪でとてもじゃないが通る事なんて出来る状況じゃない。あの猛吹雪がおさまるまでは何日かはかかる筈だ。だから誰かがやって来るって事はまず無い。」

「本当？」

ヒトカゲが聞いた。

「本当だ。だから、ちゃんと体力が回復するまでは安静にしとくべきだ。」

「だってさアスカ。少し休んでおこう？」

そう言いながらヒトカゲが私をまた優しく抱きしめた。

「さあ。少し眠った方が良いよ。今まで歩き通しで疲れてるでしょ？」

「……それはヒトカゲも同じでしょうに……
なんだか眠くなってきちゃった……」

私はそのままヒトカゲに抱かれたまま眠りについた。

「……うーん……」私は目を覚ました。どれ位眠ってたのかしら？

「……ムニヤムニヤ……」

ヒトカゲ……ずっと私を暖めてくれていたのね……ウフッ。ヒトカゲの寝顔、可愛い。起こすといけないわね。

私はヒトカゲを起こさないようにゆつくりと起き上がった。そして洞窟の外へ。

「目が覚めたか？」

外にはアブソルがいた。

「ええ。もう完全に復活したわよ！・・・でもやっぱり寒いわ（汗）」

「ハハハ・・・まあ草タイプのお前には寒すぎるだろうな。ところで、お前達は何処へ向かおうとしているんだ？」

私はアブソルに目的地が氷雪の霊峰である事、そしてキュウコンに会う事が目的である事を説明した。

「・・・氷雪の霊峰のキュウコンか・・・だが、あそこに向かうにはここ以上に厳しい場所を通る事になるぞ？」

「それでも行かないといけないの。真実を知る為にね。」

「・・・そうか。なら、氷雪の霊峰へ行く為の道案内が必要だな？俺が同行しよう。」

「えっ！？良いの？」

「道案内無しで氷雪の霊峰に行くのは無理だからな。俺なら道を知っている。それに・・・氷雪の霊峰に行けば最近起きている災害の原因が何か解るかもしれない・・・そう思えてならないんだ。」

「・・・じゃあ、お願いしても良いかな？」

「もちろんだ。」

「ありがとうアブソル！そうと決まったら早速出発しましょ！私ヒトカゲを起こしてくる！」

アブソルを待たせ、私はまだ眠っているヒトカゲを起こしに行った。

「アブソルが道案内してくれるんだね！」

「そうだ。なるべく安全な道で行く。二人共、離れるなよ？」

「解ってるわよ。」

アブソルを加えて私達は氷雪の霊峰を目指してまた進み始めた。

第十五話樹氷の森。VSフリーザー！（後書き）

第十五話完成です。

アスカ…ちよつと作者さん。最近この小説の更新遅れがちじゃない？
作者…申し訳ないアスカ（――；ちよつとバクフーン達の冒険の
方が手間取ってしまった（^―^；）

アスカ…あんまりバクフーン先輩の方ばかり見てないで、もっと
私を見てよ！ぐれちゃうわよ！作者…頑張りますからぐれないでく
れアスカ（汗）アスカ…冗談よ作者さん。この小説を読んでくれた
読者の皆さん。これからも私、アスカとバクフーン先輩の小説の応
援よろしくね！あつ、作者さん。また更新遅れたらまたやって来ち
やうからそのつもりで。

作者…マジですか（汗）

第十六話氷雪の霊峰！VSチームFLB！（前書き）

あゝ凍り漬けにされた時は本当に死ぬかと思ったわ（汗）

第十六話氷雪の霊峰！VSチームFLB！

「ちゃんとして来てか？」

「な、なんとか！」

「安全な道を通るって言ってたのに何処が安全なのよアブソル！」

「それはこの猛吹雪が無ければの話だ！」

今現在私達はアブソルと一緒に氷雪の霊峰に向かってるんだけど・
・凄いい猛吹雪に遭遇しちゃってもう大変！目の前真っ白！おまけに
寒い！

「さすがにこれ以上この吹雪の中を進むのは危険だな・・確か近くに洞窟があった筈だからそこに避難する！二人共、ちゃんとして来いよ！」アブソルの誘導で私達は近くにあるらしい洞窟に向かう事にした。

「ふう・・・ここでしばらく吹雪が止むのを待とう。」

「うわぁ身体中雪だらけだ！」

「う・寒い！？ヒトカゲ、ちょっと失礼！」

私はヒトカゲにくっついた。・・・あゝ暖かいわぁ。

「もうアスカったら・・・しょうがないなぁ。」ヒトカゲが優しく私を抱きしめた。

「おうおう。お二人共ラブラブな事で（笑）」

アブソルがからかうような感じで私達に言った。

「ラ、ラブラブって！？そ、そんなじゃないわよ！？」

「そうかぁ？俺から見れば良いカップルだな。素直に認めるよ（笑）顔が赤いぜ？」

「もう！？あんまりからかわないでよ・・・」

アブソルがあまりにからかうので私は一発ビンタをくらわせようと
して立ち上がったんだけど・・・急にめまいがした。

何・・・このめまいは・・・？

「アスカ？どうしたの？」ヒトカゲが心配してる。大丈夫だって言
わなきゃ・・・

『・・・ついにここまで来たのですね・・・』

急に誰かが私に語りかけてきた。

ヒトカゲの声じゃない？一体誰？

なんて事を私が考えていたら私の目の前が歪み始めた。そしてその
歪みの中からポケモンのシルエットらしき姿が見えてきた。

このシルエット・・・前に何処かで見た事があるような・・・何処
で見たんだっけ？・・・あっそうだ！私が見てた夢で出てきたんだ
！って事は・・・あなたはサーナイト！！

『良かった・・・やっとお会い出来ましたね・・・』

「あなたが・・・なんでここに・・・」

「ねえアスカ本当に大丈夫？さっきから独り言を言ってるけど・・・」

えっ！？ヒトカゲにはサーナイトが見えてないの！？『私の姿は他
の方々には見えません。あなたにだけ見えるんです。・・・もう少
し先に進んだ所に、あなたが目指す氷雪の霊峰があります。その
頂上に、キュウコンがいます。キュウコンはあなた方が来るの待っ
ています。途中危険な道がありますが・・・どうか・・・気をつけ
て・・・』

サーナイトの姿が消えていく！

「あっちゃっと！？」

私の呼びかけもむなしく、サーナイトは消えてしまった。

「ねえアスカ！アスカってば！」

ヒトカゲが凄い心配そうな顔して私を呼んでいる。

「って顔近っ!？」

「あっいつものアスカだ!もう心配したよ!一体どうしたのさ?」
私は今起きた事をヒトカゲとアブソルに説明した。

「・・・サーナイトが・・・そんな事があったんだ。だからずっと
ポケットとしてたんだね。」

「しかし・・・アスカ以外に姿が見えないサーナイトなんて聞いた
事がないな・・・」

「信じられないかもしれないけど本当なのよ!」「しかしなあ・・・」

「やっぱ信じてないアブソル。」

「アスカは嘘をついてないよアブソル。信じてあげて。」

ヒトカゲ・・・

「・・・解ったよ。信じよう。」

「ありがとうアブソル。」その時、外が静かになっている事に気づ
いた。「・・・嘘だろ。あの猛吹雪が止んでいる!」

アブソルが言うように吹雪が止んでいた。

まるで私達を氷雪の霊峰に行かせる為に止んだみたい・・・

「あっ!ねえ、もしかしてあれが氷雪の霊峰かな?」

ヒトカゲが指差す先には大きな山脈が見えた。

「そうだ。あれが氷雪の霊峰だ。」

「あれが・・・あそこにキュウコンがいるのね・・・」

「行こうアスカ!行ってキュウコンに会って真実を聞こう!」

「ええ!」

私達は氷雪の霊峰を目指して再び進み始めた。

氷雪の霊峰入り口付近。

「近くで見ると大きいねえ！」

「この辺では一番大きな山脈だからな。」

「・・・」

ここにキュウコンが・・・長い旅だったけどようやく着いたのね・・・

「アスカ？」

キュウコンに聞けば真実が解る・・・でも・・・もしその真実が私が悪い人間だったって事だったらどうしよう・・・

「ねえアスカ！」

「えっ？」

「もしかして今、真実が自分が悪い人間だったらなんて考えてた？
うっバレてる（汗）」

「不安なのは解るけど、大丈夫だよ。アスカは絶対悪い人間なんかじゃない。」

「なんでそんなのはっきり言えるのよ？」

「なんでってそりゃあ・・・あれ？なんでだろ？」えゝ（汗）まさかそんな答えが帰ってくるなんて予想外だわゝ（汗）

「自分でも良く解らないけど、とにかくアスカは絶対悪い人間なんかじゃない！僕はそう信じてる！」

「ヒトカゲ・・・ありがとう。」

「心の準備は良いか？そろそろ行くぞ。」

「うん！行きましょ！」私達は氷雪の霊峰の頂上を目指して進み始めた。

氷雪の霊峰に入って数時間。頂上はまだ見えてこない（汗）そのか

わり・・・災害で凶暴化したポケモンはいっぱいいるけどね（汗）
「アスカ！そっちに行ったよ！」

「解ってるわよヒトカゲ！葉っぱカッター！更につるのムチ！」
さすがに雪山なだけあってやって来るポケモン達は皆氷タイプばかり。

私が放つ技は全て効果が今ひとつだからやっつけるのに苦労させられる（汗）ヒトカゲは炎の山で覚えた火炎放射を使って簡単に撃退させる。ちよつとوراやましい・・・アブソルは中々レベルが高くてやって来るポケモン達を簡単に追い払っていた。

「こいつで最後だな！かまいたち！」

アブソルが放ったかまいたちが炸裂！凶暴化したポケモン達は一目散に逃げて行った。

「ふう・・・二人共怪我はないか？」

「大丈夫よ。」

「僕も平気だよ。」

怪我はないけど、さすがに疲れてきたわね（汗）

「まだ頂上は見えないのかしら？」

「もう少しの筈だ。さあ、頑張って進もう。ここにいとまたさっきの連中が来るぞ？」

「解ってるわよ。」

それから更に二時間後。

「つ、着いた（汗）」

やっと私達は氷雪の霊峰の頂上にたどり着いた。「キュウコンは何処にいるのかな？」

私達は辺りを見回す。

その時、何処からか足音が聞こえてきた。

「もしかしてキュウコン！」

「・・・いや、足音は複数ある・・・二つは重量級のポケモン、一つは軽量級だな。」

足音聞いただけでそんな事が解るなんて・・・アブソルって結構凄いポケモン？なんて思ってたら足音の主が私達の前に現れた。

「・・・そんな・・・に、兄さん・・・」

やって来たのはリザードンにバンギラスにフーディン・・・救助隊チームFLBだった。

「・・・その様子だとまだ真実は見つけてないみたいだなヒトカゲ・・・」

「リザードン、解っているとは思うが・・・」

「解ってるさフーディン・・・俺達は救助隊だ。世界を平和にする方法がアスカを倒す事しか無いというなら・・・俺は全力でアスカを倒す！」

ヒトカゲのお兄さんから凄い殺気を感じた。

本気なんだ・・・

「アスカよ・・・許せ。ワシ達は・・・全力でお前を倒す！覚悟しろ！」フーディン達が向かって来た！ここまで来て・・・キュウコンがもうすぐ傍にいるのにやられてたまるもんですか！

「葉っぱカッター！」

「シャドーボール！」

私は葉っぱカッターをフーディンに放ったんだけど、フーディンのシャドーボールに撃ち落とされた！

「火炎放射！」

フーディンに気を取られている隙にリザードンが火炎放射を私に放ってきた！

「させない！火炎放射！！」

ヒトカゲも火炎放射を放ってリザードンの火炎放射にぶつけた！二

つの技の威力は互角！

「バンギラス！」

「任せろ！破壊光線！」今度はバンギラスが破壊光線を放ってきた！

「下がってろアスカ！破壊光線！！」

アブソルが私の前に立って破壊光線を放った！

バンギラスの破壊光線とアブソルの破壊光線がぶつかり合って大きな爆発が起きた！

「もらったぁ！！」

私が振り返るとフリーディンが私に攻撃しようとしていた！

「くっテレポートを使って・・・」

「アスカアアア！！」

ヒトカゲが私の所に走って来ようとしてるけど間に合わない！

「待てっ！！」

その時誰かがそう叫んだのが聞こえた。そして空から一匹のポケモンが私とフリーディンの間に着陸した。

・・・この綺麗な毛並・・・特徴的な九本の尻尾・・・間違いない！このポケモンは・・・

「キュ、キュウコン！？」フリーディンがそう叫んだ。そう、フリーディンが言う通り目の前にいるのは紛れもなくキュウコンだ！

「戦いを止めるのだフリーディン。この者は・・・私の客だ。」

「教えてくれキュウコン！お主のキュウコン伝説に出てくる人間が本当にアスカなのかを！その答えによっては・・・ワシはそいつを倒さねばならん！」

「・・・タタリの話が伝説としてどう伝えられたか・・・私の知るところではない。ただし、私が昔ある人間にタタリをかけようとしたのは事実だ。そして、その人間を守ろうとパートナーのサーナイトが犠牲になった・・・人間は卑怯な事にサーナイトを見捨てて逃げたが・・・私がもう一度かけたタタリでその人間はポケモンに転生した。そしてその人間は・・・今も生きている。」

「・・・その人間って誰なの？」

私は思い切ってキュウコンに聞いた。

「・・・アスカ。安心しろ。お前ではない。」

「・・・い、今・・・なんて・・・言ったの？」ヒトカゲが震えた声で聞いた。

「アスカは伝説に出てくる人間ではない・・・と言ったんだ。」

「・・・ハ、ハハハ・・・な、なんですか？安心しちゃったせいか身体に力が入らないよ・・・」ヒトカゲ・・・自分の事みたいに私の事をそこまで心配してくれてたんだ・・・

「ちよつと落ち着かなきゃ・・・深呼吸しよ・・・」

ヒトカゲは深呼吸を始めた。

「・・・ふう・・・良かったああ！！」

ヒトカゲが泣きながら私に飛び付いた！

「本当に良かった！やっぱアスカは僕が信じた通りの人だったよ！そうだよ！アスカがそんなヒドイ人間の筈がないもん！」

「それともう一つ、確かに私は世界のバランスが崩れると予言したが・・・人間がポケモンになった事と世界のバランスが崩れた事は全く関係していない。自然災害が起きている原因・・・それはまた別の所にある。」

キュウコンがフリーデイン達に言った。

「フリーデイン！兄さん！アスカは違ったじゃないか！」

ヒトカゲが怒りながらフリーデイン達に言った。

「い、いや・・・それは・・・すまない（汗）」

「本当にすまなかったな・・・ヒトカゲ、アスカ・・・」

フリーデイン達は凄く反省してるみたい。

「・・・良かった・・・私じゃなくて・・・」

私も安心しちゃって身体から力が抜けちゃった・・・

「・・・あれ？ちよつと待って。確かにアスカが伝説に出てくる人間とは違うって解ったのは良いんだけど・・・じゃあアスカはなんでポケモンになっちゃったんだろ？」ヒトカゲが言った。

そうだ・・・私はどうしてポケモンに・・・

その時、地面が大きく揺れた！

「やだ！？地震！？」

地震は大嫌いなものよ！？

「これは地殻変動だ。自然災害が本格的になってきたのだ。そしてこの地殻変動で・・・今まで地中深くで眠っていた大地の化身、グラードンが復活する！」

グラードンですって！？

「何なのそのグラードンって？」

「神話で語り継がれる伝説のポケモンよ。実際に見た事はないけど・・・」

「グラードンが暴れだしたら大変な事になる。早く止めなければ！」

「ワシ達が行こう。」

「なら僕達も！」

「いや、お前達は地上に残ってくれ。グラードンは今までのポケモンとはレベルが違う。ここはワシ達に任せろ。」

「お前達は今までの旅で疲れてるだろ？ここは俺達に任せてお前達は家で休んでな。安心しろ、ゴールドランクはダメじゃないからさ。」

そう言ってフーディン達はグラードンを止める為に地中へ向かって出発した。私の疑いが晴れたのは嬉しいけど・・・これから何か大変な事が起こる・・・私はそんな気がしてならなかった。

第十六話氷雪の霊峰！VSチームFLB！（後書き）

第十六話完成です。

ヒトカゲ…こんにちわ作者さん。

作者…おや？ヒトカゲじゃないか。どうしたんだい？

ヒトカゲ…ちよつとアスカに頼まれて来ました。ねえ作者さん。ポケモン不思議のダンジョンって救助隊の他に探検隊もありますよね？探検隊の小説も書くんですか？

作者…うん良い質問だね。その答えは・・・今は秘密にしておくよ♪ヒトカゲ…えゝ！

作者…嘘だよ（笑）救助隊が完成したら探検隊も書くつもりだよ。

ヒトカゲ…本当ですか？作者…うん。もしかすると探検隊にもアスカやヒトカゲを登場させるかもよ？

ヒトカゲ…本当に！それを聞いたらアスカ喜ぶよ！

作者…だからヒトカゲ、探検隊にも出られるように救助隊しっかり頑張ってくれよ！

ヒトカゲ…はい！

第十七話 久しぶりのポケモン広場！（前書き）

本当に良かったー！私が伝説に出てくる人間じゃなくて・・・でも・・・じゃあ私は何でポケモンになったのかしら？
うーん・・・全く思い出せないわ（汗）

第十七話 久しぶりのポケモン広場！

フリーデン達がグラードンを止める為に地中に向かって行ったあと、私とヒトカゲは自分の家に帰る事にした。

あっアブソルなんだけど、私達の救助隊に入ってくれるみたい。

ポケモン広場に着いたらプクリンの所に行ってアブソルが住める場所を買わないとね。

「あっ！アスカ！見えてきたよ！」

ヒトカゲが指差す先を見てみる。ポケモン広場が見えた！

「何か久しぶりだわぁ！」

「あそこがポケモン広場か・・・ん？何やら広場にポケモン達が集まってるみたいだぞ？」

アブソルが言う通り、ポケモン広場の中心にポケモン達が集まっていた。そしてそのポケモン達の中には・・・

「・・・ゲンガー・・・ちょっと二人共離れてくれる？」

「えっ？」

「良いから速く！」

「う、うん解った(汗)」ヒトカゲとアブソルを退けた私は近くにあった木につるのムチを巻き付けた。そして少しずつ後ろに下がる。

「アスカ？何するの？」

「ゲンガーに一発キツイのをぶちこむのよ！」

そう言って私は勢いをつけて思いっきりジャンプ！ゲンガーに向かって一直線！

「ん？」

ゲンガーが私に気づいた。けどもう遅いわよ！

私は頭の葉っぱを思いっきりゲンガーに叩きつけた！ゲンガーは吹き飛んだ！

「ゲ、ゲンガー！？」

仲間のチャーレムとアーボがゲンガーの所に駆け寄った。大丈夫か

どうか聞いてるけど、ゲンガーは気絶している。

「はぁ〜すっきりした♪」

「あ、あんたはアスカ!?」チャーレムは私が戻って来た事に驚いている。チャーレムだけじゃなく他のポケモン達も。まあ当然ね。

「アスカさん! 帰って来たんですね!」

そう言いながらやって来たのはキャタピーちゃん!

「ただいまキャタピーちゃん♪」

「真実が解ったんですか?」

「ええもちろんよ。全部ゲンガーのデタラメだったわ。」

私がそう言うのと皆驚いた顔をした。

「ほ、本当なのかそれは!?!」

ハスブレロが私に聞いた。

「本当だよ。僕達は氷雪の霊峰に行ってキュウコンに会って聞いてきたんだから!」

遅れてやって来たヒトカゲが皆にそう言った。

ヒトカゲの言葉を聞いた皆は一斉にゲンガー達を睨んだ。

「な、何よアンタ達? 私達を疑ってるの?」

「ア、アスカが言った事が本当の事なのかどうか解らないんだぜ?

アスカ、その話が本当だっという証拠があんのか?」

「しょ、証拠?」

皆が私達を見てる。

まずいわ(汗) 証拠なんて持ってないわよ(汗)

その時、空からペリッパーがやって来た。

「号外〜! 号外だよ〜! アスカは無実だった〜! ゲンガーは大嘘つき者だよ〜!」

そう言いながらペリッパーが新聞をばらまいた。

「えっと〜なになに・・・」

地面に落ちた新聞を拾い中身を読み始めたハスブレロ。

「ポケモンニュース、アスカは無実だった! キュウコンに出会ったアスカはフリーデインの立ち会いのもと、自分が伝説に出てきた人間

では無い事を証明した。これによりゲンガーの言っていた事は真つ赤な嘘である事が判明した・・・」

ハスブレロが読み終るとチャーレムとアーボの顔が真っ青になった。

「貴様らー!!」

ハスブレロが怒鳴った!

「に、逃げるわよアーボ!?」

「そいつはナイスアイディアだ!それ!!」

チャーレムとアーボは気絶したゲンガーを抱えて猛スピードで逃走した。「待てお前ら!良くも騙しやがって(怒)」

ハスブレロ達はゲンガー達を追いかけた。

「逃げ足の速さは一級品ね(汗)でもどうしてペリッパーが氷雪の霊峰であった事を知ってるのかしら?」

「さあ?僕もいつも思う事何だけど、誰もペリッパーがどうやって情報を手に入れているのか知らないんだよ。」

「まあなんにしても助かったわ。・・・もうくたくた(汗)今日は家に帰ってゆっくり休みたいわ。」

「そうだね。今日はもう休もう。明日から、また救助活動再開だね!頑張ろうねアスカ!」

「うん!」

今までの旅の疲れを癒す為に私達は家に帰ってゆっくり休む事にした。

明日からはまた救助隊としての活動ね。頑張らなきゃ!

第十七話 久しぶりのポケモン広場！（後書き）

第十七話 完成です。

第十八話救助活動再開！（前書き）

ヒトカゲって凄く頼もしい時があるんだけど・・・普段だと子供っぽいよね。このギャップは何？

第十八話救助活動再開！

私達の疑いが晴れた後、私達は前みたいに救助活動を再開した。

そして、私達が救助に成功する度に私達のチームに入りたいたって言うポケモンがいっぱい来たの！もちろん皆仲間にしてあげたわ。そして気がついたら仲間の数が20を超えちゃった！

おかげで皆で協力する事で複数の救助依頼をこなせるようになったわ。

「今日も救助成功して良かったねアスカ！」

救助が成功した帰り道でヒトカゲが私に言った。「そうね！・・・そういえば地底に行ったフリーデン達、大丈夫かしら？」グラードンを鎮める為に地底に向かってから結構経っていた。

「大丈夫だよ。だって僕の兄さんもいるんだもん！無事に帰ってくるさ！」まあ確かにヒトカゲのお兄さんは結構強いし、それにフリーデンはかなりの頭脳派。しっかりとした作戦を考えているだろうし・・・バンギラスは・・・あの怪力だしね。

「ヒトカゲの言う通りね・・・ふあ・・・今日は疲れちゃったわ。」

ちょうど私の家に着いた。

「じゃあアスカお休み！また明日ね！」

「うん！」

ヒトカゲと別れて、私は家の中に入ってすぐに草のベッドにダイブ。

「はあーやっぱり草のベッドは最高だわ・・・すく・・・すく・・・

・」私はすぐに熟睡した。

私は夢をみていた。

うわあまた殺風景な夢だわあ（汗）でも、何か久しぶりに見た感じ。

「・・・アスカさん。」誰かが私に語りかけてきた。この声は・・・

「サーナイト？」

私が名前を呼ぶと目の前にサーナイトが姿を現した。

「はい。」

「・・・こうしてちゃんと会話をするのって初めてね？聞きたい事がいっぱいあるの。まず一つ、あなたは何故私の夢の中に出てくるの？」

「精霊の使いとして、あなたを見守る事・・・それが今の私の役目だからです。」

「精霊の使い？」

「はい。私はあるトレーナーの代わりにキュウコンのタタリを受け、このような実体の無い存在になってしまいました。」「そのトレーナーってキュウコン伝説に出てくる人間の事ね。あなたを見捨てるなんてヒドイ人間ね。」

「はい、ヒドイ人です。意地悪したり騙したり、しょうがない人です本当に。ですが、私はあの人の事を怨んでません。」

「怨んでない？なんで？あなたを見捨てるヒドイ奴なのに・・・」

「それは・・・本当どうしてでしょう？私自身良く解らないんです・

・ヒドイ人なんですが、何故か憎めないんですよね・・・ちよつと変わった人ですが、良いところもあるんですよ？それに、私あの時必死だったから・・・」

「あの時って・・・キュウコンのタタリの時？」

「はい。キュウコンのタタリから私、あの人を全力で守りました。トレーナーの身に危険が迫れば、その人を命がけでお守りする・・・それが私達サーナイトなんです。無事お守り出来た・・・それだけで私は嬉しいのです。」

「・・・そういえばサーナイトは心優しいポケモンだったわね・・・でも、自分の命を犠牲にするなんて・・・凄いわね・・・」

「あと、私今のような存在になってもそんな嫌ではないですよ？
私は今の役割に誇りを持って生きていますし。」

「役割？」

「はい。万物には全て、役割があります。私には私の役目があるように・・・あなたにはあなたの役目があるのです・・・あなたは・・・ある役目を負ってこの世界にやってきました。そしてあなたはその為に、ポケモンになったのです。」

「えっ？それってどういう・・・」

私がサーナイトに聞こうとしたその時、いきなり地震が起きた！？

「嫌だ！？地震！？なんで夢の中で地震が起きるのよー！？」

その時、私がサーナイトの姿を見たらどんどん姿が消えていった！

「あっちょつと待って！」

「うーん・・・」

私は眼を覚ました。

「・・・何か・・・夢を見てたような・・・あっそうだ！サーナイトが夢の中に出で来たんだっけ。・・・そういえばサーナイトは私がある役目を負ってこの世界に来たって言ってたわね・・・でも、その役目って何なのかしら？・・・何も解らないわ（汗）・・・外に出て日光浴でもしよっかな？」

私は外に出た。

「あっおはようアスカ！」外に出るとヒトカゲがいた。毎度毎度良いタイミングでいるわねえ。

「おはようヒトカゲ。あら？後ろにいるのはお客さん？」

ヒトカゲの後ろにポケモンが二匹いた。

「うん。こっちはソーナノでこっちがソーナンス。僕達にお願いがあるんだって。」

「なるほど。それで、お願いって何なの？」

私はソーナノに聞いた。

「騒ぎの森って言う所にマンキーが三匹いるんだけど・・・そいつらをこらしめてほしいの。」

「ソーナンスウ！」

「マンキーねえ・・・こらしめてほしいって事はそいつらが何かあなた達にしたの？」

「僕達は静かに過ごしたいのに、マンキー達がうるさくて困っているの。」

「ソーナンスウ！」

「なるほど。大体解ったわ。私達に任せて。」

「お願いしますの！」

「ソーナンスウ！」

「・・・ソーナンス、いちいちそれ言わなくて良いから（汗）」

「ソッ!？」

私とヒトカゲはソーナノ達の依頼を受けて、騒ぎの森にやってきた。名前が騒ぎの森なのに森の中は意外に静かだった。

「ソーナノ達が言っていた程騒がしくないね？」ヒトカゲが私に言った。確かにそうみたい・・・ん？

「・・・ウツキー！」

「・・・ムツキー！」

それでもなかったわね（汗）森の奥の方でバカ騒ぎしてるのがいる

わ。

「あれね(汗)」

「あれだね(汗)」

私達は騒いでいるポケモン達がいる所へ向かった。すると、豚猿ポケモンのマンキーが三匹いてなんだか知らないけどバカみたいに騒いでいる。

こんだけバカ騒ぎすればソーナノ達も迷惑よね(汗)

「ちょっとあんた達！」私がマンキー達に呼びかけるとマンキー達は私の事を睨みつけてきた。

「あん？なんだテメエーは？」

「私はアスカ。こっちはヒトカゲ。あんた達、騒ぐのは止めなさい。あんた達が騒いでるせいで迷惑してるポケモン達がいるのよ。」

「ウツセエーな！俺達は何をしようが自由だろうが！だいたい何でオメエみたいな野郎にそんな事言われなきゃなんねえんだよ！ムカついてきたぜ！ぶん殴っちまおぜ兄弟！」

「おう！やってやんぜ兄貴！」

「ウツキー！」

・・・あゝ・・・こいつらかなりうざいわ(汗)

マンキー達が私達に攻撃してきたんだけど・・・このマンキー達めちゃくちゃ弱かった(汗)

私がつるのムチで一発殴っただけど気絶しちゃうし、ヒトカゲの火の粉を浴びただけで逃げ出すし(汗)このマンキー達、口先だけだったみたいね。

「・・・お、覚えてろよ！」

あつマンキー達が全速力で逃げた。てか覚えてろよって・・・ザコ敵が去り際に言う典型的なパターンじゃないの（汗）

「さて、充分こらしめたからソーナノ達の所に帰りましょうか？」

「そうだね。」

私達は戻る事にした。

私達がマンキー達をしつかりとこらしめた事を報告するとソーナノ達は凄く喜んだ。

「ありがとうございます！助かりましたなの！」

「ソーナンスウ！」

「これはお礼なの！受け取ってほしいの！」

そう言つてソーナノがヒトカゲに何かを渡した。・・・これって・・・

・毬栗？

「これって・・・このトゲトゲを取ったら中から栗の実が出てくるつていうあれだよね？」

「そうなの。実は僕達・・・お金持っていないの。だから、これ位しか渡せないの。・・・やっぱり不満なの？」

「・・・い、いやそんな事はないよ（汗）栗美味しいし・・・ありがとうねソーナノ。」

ヒトカゲ・・・笑顔がひきつってるわよ（汗）

絶対お金が少し欲しかったって顔だわ（汗）

「おうおうおうおう！やいやいテメエーら！」

その時何処からか怒鳴り声が聞こえてきた。

声がする方に振り向くとマンキー達がいた。

「・・・まさかと思うけど、私達にやられたのが悔しかったからリ

ベンジしに來たのかしら？」

「当たり前めえよ！さっきのようにはいかねえからな！やるぜ兄弟！」

「ウツキー！」

「ムツキー！」

・・・本当にうざいわ（汗）こうなったら私のつるのムチを使った必殺地獄突きを・・・

私は攻撃しようと構えた。だけど、マンキー達が目の前まで來た時に突然動きを止めた。

「うおっ！？そ、それは栗じゃねえか！？」

「マジだ！？栗だ！？」

「栗だ栗！」

な、何よこいつら？

「兄弟、ちょっと・・・」リーダーらしきマンキーが他のマンキー達を集めて何かヒソヒソ話始めた。

「な、何してるのかな？」

「どうやら・・・相談してるみたいなの。」

「ソーダンス。」

「ってソーナンス、それはダジャレ（汗）」

しばらくしたらマンキー達がこっちに向かってきた。

「・・・その栗・・・くれ。」

へっ？

「俺達は栗の実が好物なんだよ！だからくれ！」くれて・・・

てかそれが人に頼む時に言う言葉かそれは（汗）

何かこのままあげるのは嫌だなあ。ってな訳で。「嫌。」

一言言った私。

「ムツキー（怒）」

マンキー達が私達に向かって攻撃しようと飛びかかってきた。

だけど、マンキー達はやっぱり弱かった（汗）私のつるのムチで一

発KO。

「・・・お願いします！その栗を俺達に下さい！この通り！」

マンキー達が土下座して私達に頼み込んできた。栗が欲しいだけでそこまでするの（汗）何かこれであげなかったら私達が悪者になっちゃうわね（汗）「仕方ないわねえ・・・」

「あっそうだ♪ねえマンキー達、君達力仕事は得意かい？」

ヒトカゲがいきなりマンキー達に聞いた。何か思いついたのかしら？

「力仕事？力はあるが・・・仕事は嫌いだ。」

「僕達、ここに救助隊の基地を作ろうと思ってるんだ。建物を作る為に重い木材を運ばないといけないでしょ？その木材を君達に運んでもらって一緒に基地を作ってほしいんだ！手伝ってくれたらこの栗をあげるから。どうかな？」

なるほどそういう事ね。「・・・どうする兄弟？」またマンキー達が集まって相談を始めた。

・・・それからしばらくして。

「良いぜ！その仕事やってやる。ただし、栗の実は絶対くれよ！」

協力してくれるみたい。でも、栗の為に仕事やって（汗）・・・まっ良いか！

「僕もその仕事手伝わせて下さい！」

誰かが大きな声で私達に叫んだ。声がする方を見るとそこにはキャタピーちゃんがあった。全速力でこっちに走ってくる。

「あっキャタピーちゃん！」

「僕も手伝います！組み立てる時に僕が糸を吐くで接着するです！」

「あのを僕達も手伝うのです！お礼が栗だけじゃ凄く悪い気がするの！」

「ソーナンスウ！」

「皆・・・ありがとう！よし、今日から救助隊の基地を皆で頑張って作るよ！頑張ろうねアスカ！」

「うん！」

私達は救助隊の基地を皆で協力して作る事になった。一体どんな救助隊基地になるのかしら？完成するのが楽しみだわ♪

第十八話救助活動再開！（後書き）

第十八話完成です。

アスカ…作者さん。

作者…アスカ！今日はどうしたんだい？

アスカ…最近また新しい小説を書き始めたみたいね？まだ私達の小説も終わってないのに新しいのを作って大丈夫なの？

作者…前にバクフーンにも同じ事言われたよ（汗）大丈夫！なんとかなるさ！

アスカ…あなたの大丈夫ってイマイチ信用出来ないのよねえ。

作者…ええ（汗）ヒドいなそれは（汗）

アスカ…まっでも頑張ってるね。応援してあげるから。

作者…うん！ありがとうアスカ！

第十九話 救助隊基地完成！（前書き）

あのブタザルポケモンのマンキートリオ。

栗の実がある時は大人しく言う事聞いてくれるんだけど、栗の実が無いと言う事聞かないし暴れるし・・・とにかく面倒な奴らなのよねえ（汗）

第十九話 救助隊基地完成!

私達が救助隊基地を作り始めて一週間。途中マンキー達に仕事をやってほしかったら栗の実をもつと寄越せとかワガママを言われたりもしたけれど、ついに完成したの!

私達の救助隊基地が!

「・・・凄く良い♪本当に凄く良く出来てるよこの救助隊基地♪特にアスカに似てるところが特に♪」

ヒトカゲが凄い感激してる。まあヒトカゲの気持ちは解らない訳じゃないけどね。本当に良く出来てるわよこの救助隊基地は。でも、ちよつと恥ずかしいかな(照)

救助隊基地のモデルが私っていうのが・・・

本当にヒトカゲが言うようにチコリータの私に凄く良く似てるのよね。」「皆で頑張った甲斐があったですよ!」

「ソォーナンスウ!」

「皆!協力してくれて本当にありがとう!」

「・・・あのさ。」

突然マンキーが私達に声をかけた。また何かワガママ言うつもりかしら?

「救助隊基地が出来たって事はよく・・・もう栗の実貰えないのか?」

栗の実?あゝ救助隊基地を作るのを手伝ってもらうかわりに栗の実をあげてたわね。

「当たり前じゃないか。もう仕事手伝わなくて良くなったんだからね。マンキー、今まで手伝ってくれてありがとう!」

ヒトカゲがお礼を言った。

「・・・」

な、何かしら?無言のままマンキー達がお互いを見つめあってる(

汗)

「ムツキー！」

突然マンキー達が救助隊基地の方へ走って行った。急にどうしたのかしら？

「やっちまえ兄弟！」

「了解だ兄貴！」

「やっちやうぜ！」

つていきなりマンキー達が空手チョップで基地を攻撃しだした！？

「ちよっ！？止めなさいよアナタ達！？」

私が言ってもマンキー達は止める気配がない！

慌てて私達はマンキー達を止める為に押さえ付けようと飛びかかった。

「止めなさいって言ってんでしょこのブタザル！！」

「ムキー！離せー！！！」

なんとかマンキー達を取り押さえる事が出来た私達はマンキー達に救助隊基地を攻撃した理由を聞いた。そしたら、救助隊基地を壊してもう一回建て直すのを手伝えば栗の実を貰えると思った。だから壊そうとした・・・らしい(汗)

その呆れた理由を聞いて怒った私はマンキー達に思いつきつるのムチでボディブローを決めた。でも正直それでは足りないと思ったので更にバックドロップも決めようとしたんだけど、あえなくヒトカゲ達に止められてしまった。

その後ヒトカゲがまだ残っていた栗の実をマンキー達に渡した。

ヒトカゲが、これをあげるから大人しく帰ってくれないかな？って言ったらマンキー達はあっさりそれを承諾した。

「・・・栗の実の為だったら何でもしちゃうってどんな神経してんのよあいつら（汗）」

「まあまあ。救助隊基地が無事だったから良かったじゃないアスカ。」

「それもそうね。」

「おい！」

何処からか私達を呼ぶ声が聞こえてきた。

声が聞こえた方に振り向くとそこにはハスブレロがいた。走ってこっちに向かって来ている。

「ハスブレロじゃない？どうしたの？そんなに慌てて？」

「ダーテングが救助隊をしているポケモン達を集めてるんだ。かなり遠くの方からやって来た救助隊なんかもいてさ！」

「ダーテングが？何かあったのかな？」

「解らん。とにかくお前達も広場に来てくれ！」「解ったわ！」

私達はハスブレロと共にポケモン広場に向かった。

ポケモン広場に着いてみたら大勢のポケモン達が集まっていた。

「大分集まったな。皆聞いてくれ！」

ダーテングがポケモン達に呼びかけた。皆ダーテングに注目した。私達もダーテングに注目した。「・・・俺はその・・・こうやって皆の前で話すガラじゃないんだが・・・いやそんな事言ってる場合じゃない！大変なんだ！フーディン達が地底に行ったつきり帰って来ないんだ！」

ダーテングがそう言うと言周りのポケモン達が驚きの声を出した。

もちろん私達も驚いている。あのフリーディン達がまだ帰って来てないなんて・・・

「・・・兄さん達が・・・」

ヒトカゲが一番驚いたようだ。それもそうよね・・・ヒトカゲの自慢のお兄さんが帰って来てないんだから・・・

「地底で何かあったに違いない。だから、今日皆をここに集めたのは地底で何かあったのかを調べる為に特別なチームを編成しようと思ったからだ。誰かいないか？地底に行く勇氣ある者は！」

ポケモン達が相談を始めた。いろいろな声が飛び交う。自分は実力が足りないから絶対無理！お前が行けよ！とか地底ってマグマがあるんだろ？俺熱いの苦手だから無理！とか・・・って結局皆行く氣無いじゃない（汗）まあフリーディン達が帰って来なくなった地底だから、皆怖いのは解るけど・・・

「・・・アスカ、僕達が行こう！」

ヒトカゲが私に地底に行こうと言ってきた。

ヒトカゲの表情はかなり真剣だ。・・・お兄さんが心配なのね。

「止めておけお前達。」ハスブレロが私達の地底行きを止めるように言ってきた。

「どうしてさハスブレロ？」

「確かにお前達は前に比べればかなり強くなった、だがまだフリーディン達みたいに強い奴らはいるんだよ。」

フリーディン達みたいに強い奴ら？一体誰？

「ワシが行こう。」

ダーテングの前に出てきたのはカメックスだった。

「彼は？」

私はハスブレロに聞いた。

「アイツはチームハイドロズの暴れん坊、カメックスさ。背中のレストラン砲は分厚い鉄板も貫くらしい。」

ハスブレロが説明してくれていた間に二匹のポケモンが地底に行くと言っていた。

「おっ！チームカラミツキのリーダーオクタンだな！一度相手に絡みついたら倒れるまで離さないらしい。それともう一人がチームゴロゴロのゴローニャ。身体を硬い岩が覆っていて大きな爆発を受けなくてもビクともしないらしい。」

「ふん．．．」

「おっ！カメックス！オクタン！それにゴローニャ！あなた達なら申し分ない。彼ら三人で地底に行ってもらおう！皆もそれで良いな？」
ダーテングが皆に聞くと皆は首を縦に振って頷いた。

「よし、オクタン！ゴローニャ！行くぞ！」

カメックス達は地底に向かって出発した。

「なっ？結構強そうだろ？地底の事は彼らに任せておけば大丈夫さ。」

「．．．ハスブレロはそう言うけど、でもなんでだろ？彼らだけ行かせるのはいけない気がする．．．それに．．．」

「．．．兄さん．．．」ヒトカゲがお兄さんを助けたいって思っている。やっぱり．．．彼らだけに任せる訳にはいかないわ！

「ヒトカゲ、家に帰って用意しなさい。明日の朝、地底に行くわよ。」

「アスカ．．．」

「助けたいんでしょ？あんたのお兄さんを。」

「．．．ありがとうアスカ。」

「しっかり準備しなさいよ。地底で何が起きるか解らないんだから。」

「うん！」

私とヒトカゲは明日に備えて準備する為に家に戻った。

地底．．．グラードン．．．今まで以上に厳しい戦いが待ってそう．．．私はそう思った。

第十九話 救助隊基地完成！（後書き）

第十九話完成です。

第二十話 地底での対決！VSグラードン！（前書き）

フリーデイン達・・・無事だと良いけど・・・

第二十話 地底での対決！VSグラードン！

家に戻った私は明日の為にいろいろと準備をした。体力を回復してくれるオボンの実に麻痺を治してくれるクラボの実。

それに火傷を治してくれるチーゴの実。

そしてあなぬけの玉。

この道具には不思議な力があって、これを使うとポケモン広場までレポート出来るの。

誰が作ったのかは知らないけど・・・

「・・・これでよし！」やっと準備が出来た。

準備が出来た頃にはもう外は真っ暗になっていた。さすがに眠いわ

(汗)

「ふぁゝ・・・寝よ。」私は草のベッドにダイブ。すぐに熟睡した。

「ここは・・・」

私は夢を見ていた。

サーナイトと唯一会話が出来る夢の世界。

「・・・サーナイト？」私はサーナイトの名前を呼んだ。そしたら私の前にサーナイトが現れた。「明日は地底に行くみたいですね？グラードンを鎮める為に。」

「ええ。でも正直な所、私ちょっと不安なの。」

神話に出てくるような伝説のポケモンを本当に鎮める事が出来るのか・・・ヒトカゲのお兄さん達を助ける事が出来るのかって・・・

「アスカさんならきつと大丈夫ですよ。」

今までだってどんな辛い事があっても乗り切って来たじゃないです

か。

私も応援してますから頑張ってください。」

サーナイトは優しい笑顔でそう言ってくれた。

「ありがとうサーナイト。少し勇気が出たわ。

ねえサーナイト、あなたは知ってる？

地底がどういう所で、グラードンがどんなポケモンなのかを・・・」

「いえ・・・私にも解りません・・・」

「そうか・・・サーナイトなら何か知ってるかなあって思ったんだけどなあ・・・」

「すみません・・・でも、一つだけ解る事があります。」

ちよつとサーナイトが真剣な顔になった。

「アスカさんの役割が・・・少しずつ終わりに近づいています。」

「私の役割の・・・終わりに？」

「アスカさんはある役割を持ってこの世界に来てポケモンとなった・・・その役割も・・・到頭終わりに近づいているんです。」

「教えてサーナイト！」

私はなんでポケモンになったの？役割って何？」

「それは時が来れば・・・グラードンの件が終わればお話出来ると
思います・・・」

あつサーナイトの姿がどんどん消えて・・・

「・・・うーん・・・」私は目を覚ました。

外からの太陽の光が私の家の中を照らしている。

「・・・私の役割が終わりに・・・私の役割ってなんなのよ？」

・サーナイトはグラードンの件が終われば話してくれるらしいけど・・・

あゝもう考えるのは止め！今はグラードンやヒトカゲのお兄さん達の事だけを考えよう！」

私は昨日用意した道具が入ったバックを持って家の外に出た。

「あっおはようアスカ！」外に出るともうすでにヒトカゲが待っていた。「おはようヒトカゲ、準備は出来てる？」

「もちろん！早速地底に行こうよ！」

ヒトカゲが地底に向かって出発しようとした。

「ちょっと待ったヒトカゲ！」

私はつるのムチをヒトカゲに巻き付けて出発するのを止めた。

「な、何アスカ？」

「地底に行く前にやらなきゃいけない事があるの。一緒に来て。」

そう。地底に行く前にまずあそこに行かなきゃ！私はその場所目指して歩き始めた。

「あっ待ってよアスカ！？何処に行くの？」

「はい到着！皆！ちゃんと全員いるわよね？」

私達が来たのは私達チームアスカの仲間達が住んでいる家がある所。

「いますよアスカリーダー！」

「今日はどんな依頼が来てるんだアスカ？」

「どんな依頼でもばっちり成功させるぞ！ビビビ！」

フシギダネにアブソルにコイル。それに他にも新しく仲間になったポケモン達、ちゃんと全員いるようね！

「皆良く聞いて！私とヒトカゲは今日地底に行くの。フリーディン達を助けにね！」

私がそう言うと皆驚きの声をあげた。

「本気かアスカ？」

「もちろんよアブソル。ただ、地底にはどんな危険が待っているのかは解らない。私とヒトカゲはしばらく帰って来れないかもしれないの。」

だから私達が地底に行っている間、地上の方を皆に任せたいの。任せても大丈夫よね？」私がそう言うのと皆頷いて任せてくれて言ってくれた。頼もしいわね！

「あと、私とヒトカゲ以外にもう一人連れて行きたいんだけど・・・」

「俺が行こう。」

真っ先にアブソルが志願してくれた。

「確かにアブソルなら実力的にも問題無いわ。でも、あなたには地上に残ってもらいたい。」

私がいらない間あなたに代理でリーダーをしてもらいたいんだけど・・・」

「お、俺がか？」

「あなたなら出来るわ。實力もあるし皆からの信頼もあるしね。だからお願い。」

アブソルはしばらく考え込んだ。

「・・・解った。任せてくれ。」

「ありがとうアブソル。頼んだわよ。」

「アスカリーダー！僕と一緒にいきます！」

今度はフシギダネが志願してくれた。

「ありがとうフシギダネ。でもね、あなたは私と同じ草タイプ。

苦手なタイプのポケモンが現れたらすぐにやられてしまうわ。

あなたも地上に残ってくれない？」

「・・・解りました。」フシギダネはがっかりしてしまった。

ごめんねフシギダネ。

でも困ったわ。

仲間の中には水タイプのポケモンはいるんだけど、皆少し地底の事を怖がってしまっている。

無理に連れて行く訳には・・・

「俺と一緒に行くぜ！」志願してくれたのはグライガーだった。

地面タイプに飛行タイプも合わせ持っているグライガーなら・・・

「グライガー、一緒に来てくれる？」

「もちろんさ！俺の得意戦法でアスカさん達をアシストしてやるよ！」

「頼もしいじゃない！」

頼りにしてるわよグライガー！よし、それじゃあヒトカゲ、グライガー、行くわよ！」

私とヒトカゲとグライガーは地底に向かって出発した。

地底への入口までかなりの距離があって出発してからもう3日も経ってしまった。

だけど、私達はようやく地底への入口がある所までやって来た。入口付近には溶岩が流れている。

「ここが地底への入口・・・この中に兄さん達が・・・」

ヒトカゲはいつも以上に真剣な表情になった。

「そうね・・・あと、先に来てる筈のカメックス達。彼らも無事なら良いけど・・・さあ二人共、覚悟は良い？」

「良くなかったらここに来てないよアスカ。」

「右に同じく！」

二人共覚悟は出来てるようね。

「行くわよ！」

私達は地底へと足を踏み入れた。

地底に入って数時間。

地下に潜れば潜る程どんどん暑くなってくる。

溶岩が近くで流れてるせいね。草タイプの私にはかなり辛いわ（汗）でも、こんな事で弱気になっちゃダメよ私！

「アスカ！あれ！」

ヒトカゲが私を呼んで前の方を指差した。

そこにはこの地底で暮らしているポケモン達がいた。ゆっくりこっちに向かって来ている。

「サイドンにサンドパン・・・更にクチートにアーボック・・・さつき戦った奴らよりも強そうね・・・」

ここまで来る時に何匹か戦ったんだけど、今向かって来ているポケモン達はレベルが違うわね。

「私がサイドンとサンドパンの動きを止めておくからヒトカゲはクチート、グライガーはアーボックをお願い。」

「解ったアスカ。」

「了解！」

私達は向かって来ているポケモン達に向かって走り出した！

「行くわよ！つるのムチ！」

私はサイドンとサンドパンにつるのムチを巻き付けて動きを封じた。だけど、この二匹結構パワーがある！

そう長く動きを止めておく事が出来ないわ！

急いで二人共！

「火炎放射！」

ヒトカゲは火炎放射をクチートに放った！

だけどあのクチート、想像以上に素早い！
ヒトカゲの火炎放射を回避してしまった！

「だったらこれでどう？ 炎の渦！！」

クチートはヒトカゲが作り出した炎の渦の中に閉じ込められた！

「それなら身動き取れないでしょ！ 火炎放射！」 ヒトカゲの火炎放射がクチートに直撃した！

鋼タイプのクチートにはヒトカゲの炎タイプの技、火炎放射は効果抜群！ クチートは倒れた。

「さすがヒトカゲ・・・」

「アスカ危ない！？」

「えっ！？」

油断したわ。

動きを封じたから何も出来ないと思ってたけど、サンドパンとサイドンが破壊光線を放ってきていたの！

「まずい！？」

私は急いでサイドンとサンドパンに巻き付けていたつるのムチを解いて、破壊光線を回避した。

「大丈夫アスカ？」

ヒトカゲが私の近くまで来て心配そうな表情をしながら私に言った。

「私は大丈夫よ。それよりも今が攻撃のチャンス！」

破壊光線は強力な技だけどリスクもある。

一度使えばその反動でしばらく動けなくなるんだから！

「地面タイプのあんた達にはこれよ！ ソーラービーム！！」

私はサイドン達にソーラービームをぶつけてやった。

草タイプの技は地面タイプには良く効く。

それにソーラービームは草タイプの大技。

さすがに耐える事は出来なかったみたいね。

サイドン達は目を回して倒れてる。

「よし！ あっそうだグライガーは？」

「アスカ、あれ。」

ヒトカゲが指差した先には目を回しているアーボックがいた。

何故かアーボックは身体が地面の中に埋まっていて軽い生き埋め状態になってる(汗)

「ニシシ♪俺のトラップに見事ハマってくれたぜ♪」

グライガーは満面な笑みを浮かべている。

そういえばグライガーの得意戦法ってこういう落とし穴なんかトラップを仕掛ける事だったわね(汗)

「これで全員倒したわね・・・さあ、先に進みましょう！」

私達は更に先に進んだ。

それから更に数時間。

かなり深い所まで潜ってきたけど、まだグラードンの姿は見えない。それに・・・めちゃくちゃ暑い！

さっきいた場所よりも更に温度が上がってるわね(汗)

「アスカ、大丈夫？暑くない？」

ヒトカゲが私を心配して話しかけてくれた。

「暑くない・・・って言えば嘘になるわね(汗)

でも、そんな弱音を言ってる場合じゃないでしょ？ヒトカゲのお兄さんやフリーディン達、それにカメックス達も助けないといけないんだから。」

「あっ！お二人さん！あれ見てみるよ！」

グライガーは何かを見つけたみたい。

何かを指差している。

私とヒトカゲはそっちの方を見てみた。

そこには倒れているカメックス達が！

「カメックス!？」

私達は急いでカメックス達の所に駆け寄った。

「カメックス! しっかりして!」

「・・・うう・・・お、お前達・・・何故・・・ここに?」

ひどい怪我ね・・・

身体中傷だらけじゃないの・・・

「あなた達だけで地底に行くのは危険だっと思ったから来たの。

それに、私達もフリーデイン達の事を助けたいから・・・それより、あなた達のその怪我・・・一体何があったの?」

「・・・ワシ達はなんとかフリーデイン達と合流する事が出来た・・・フリーデイン達は今の今までグラードンと戦い続けていたんだ・・・ワシ達もフリーデイン達に加勢したんだが・・・それがこのザマだ・・・」

グラードンにやられたのね・・・ここにはグラードンもフリーデイン達もいないみたいだけど・・・

「グラードンとフリーデイン達は今何処に?」

「・・・この先だ・・・頼む、ワシ達の代わりに・・・フリーデイン達を・・・」

「解ってるわ。私達に任せて。行くわよヒトカゲ、グライガー!」

私はカメックス達に余分に持っていたあなぬけの玉を渡してからヒトカゲとグライガーと共に先へ進んだ。

・・・それからしばらくすると、奥の方から何か爆発するような音が聞こえてきた。

「アスカ!」

「ええ! この先にフリーデイン達がいるみたいね! 急ぐわよ!」

私達は音がする方へ向かって走った。

そして私達が爆発音が聞こえた場所に着いた時目にした光景は・・・

「いい加減大人しくなれってんだ! 火炎放射!」

「破壊光線!」

「サイケ光線!」

フーデイン達チームFLBだ！何か巨大な生き物と戦っている。
あれが・・・グラードン・・・まるで怪獣じゃないの！

「グオオオオ！！！」

グラードンが大きく吠えながら右手を大きく振り回した！

たったそれだけでフーデイン達の攻撃を全て払い除けてしまった！

「くそっ！？俺達の攻撃は全く効かないってのかよ！？」

「リザードン気をつけろ！！」

バンギラスが叫んだ時、ヒトカゲのお兄さんにグラードンの爪牙が襲いかかった！

「しまっ・・・」

ヒトカゲのお兄さんはグラードンの爪牙の餌食になってしまった！

ヒトカゲのお兄さんは地面に叩きつけられた。

「兄さん！？」

ヒトカゲはお兄さんの所に駆け寄って行った。

「兄さん、兄さん！？」

ヒトカゲはお兄さんの事を必死に呼びかける。

だけど、ヒトカゲのお兄さんは気を失ったままだ。グラードンの一撃がそれほど強力だったのね・・・

「ぐああああ！？」

突然悲鳴が！

私が振り向くとそこにはグラードンに踏みつけられているバンギラスが！

「バンギラスから離れろ！サイコネシス！」

フーデインはサイコネシスでグラードンを吹き飛ばそうとした。

だけど、グラードンは大き過ぎてフーデインの力でも中々吹き飛ばせない。

「ソーラービーム！！」私はソーラービームを放った。確かグラードンは地面タイプ、この技は効果がある筈！

「ギャアオオオ！！」本当に怪獣みたいに叫ぶグラードン。

私のソーラービームは効いてるみたいだけど、まだ踏ん張ってる！

「このっ！いい加減に吹っ飛びなさいよ！！」

「火炎放射！！」

ヒトカゲが火炎放射で加勢してくれた！

そのおかげでグラードンを吹き飛ばす事が出来てバンギラスから離す事に成功！

「バンギラス！」

フリーデインがバンギラスの所に駆け寄った。

フリーデインは呼びかけるが、バンギラスは気絶している。

いくらバンギラスでも、あんな大きいポケモンに踏みつけられたら無事じゃすまないわよね・・・

「グルルル・・・」

唸り声が聞こえた。

グラードンがさっきの攻撃に怒っているみたい。

「フリーデイン来るわよ！私が時間を稼ぐからその間にバンギラスとヒトカゲのお兄さんを安全な所まで・・・」

「兄さんの仇だぁ！！」あっ！？ヒトカゲが一人でグラードンに向かって行ってしまった！？

「待ってヒトカゲ！あなた一人だけじゃ無理よ！！」

私が叫ぶけど、ヒトカゲにはまるで聞こえてないみたい。

「ああもう！フリーデイン！とにかく二人を早く安全な場所までお願い！行くわよグライガー！」

「了解だぜ！」

私とグライガーは急いでヒトカゲを追った。

「火炎放射！！」

ヒトカゲの火炎放射がグラードンに直撃した。

どういう訳かヒトカゲの火炎放射がさっき使った時よりも威力が上がっている。

お兄さんを傷つけられた事への怒りがヒトカゲのパワーを上げているのかしら？

「グオオオオ!!」

グラードンはヒトカゲの火炎放射を弾き飛ばしてその鋭い爪をヒトカゲに向けて振り落とした!

「つるのムチ!」

私はつるのムチをヒトカゲに巻き付けてこっちに引き寄せた。

グラードンの鋭い爪は地面に直撃した。

「危なかったわ・・・」 「あ、ありがとうアスカ・・・助か・・・」
バチン!

私はヒトカゲを頭の葉っぱでビンタした。

「バカ!! 一人で戦って勝てる相手じゃないくらいすぐ解るでしょ!?

無茶にも程があるわよ!」

「ご、ごめん・・・」

「もうこんな無茶はしないで! ヒトカゲがいなくなったら私・・・私そんなの嫌だよ・・・」

「アスカ・・・」

「あゝお二人さん? 邪魔して悪いが今は話てる場合じゃないと思うんだが?」

グライガーがグラードンを指差しながら言った。グラードンはこっちに向かって来ている。

「グルルル・・・」

「ヒトカゲ。」

「解ってるよアスカ。もう一人で勝手な事はしないよ。何か作戦はあるの?」

「ええ。まず私とヒトカゲでグラードンを攻撃して攪乱」かくらん
「するの。その隙にグライガーが穴を掘るで落とし穴のトラップを作る。」

そしてその落とし穴にグラードンが落ちて動けなくなった所を一斉に攻撃するの。

いくらグラードンでも一斉攻撃を受けたら無事ではすまない筈よ。」

「俺、結構責任重大だな（汗）」

「頼むわよグライガー！私とヒトカゲがなんとか時間を稼ぐから。」

「グオオオオオ！！」

グラードンがもう近くまで来ている！

「やるわよヒトカゲ！私は右から、ヒトカゲは左から攻撃よ！」

「解った！」

私はグラードンの右側へ、ヒトカゲはグラードンの左側へ走った。

「やるしかないか！穴を掘る！」

グライガーは穴を掘るで地面へ。

「ほらこっちよグラードン！葉っぱカッター！」私は葉っぱカッターを放った！無数の鋭い葉っぱがグラードンに全部直撃した！

「グガアアアア！！」

あっ怒った（汗）

グラードンが私に向かって口から土の塊を放った！これはマッドショットね！

「つるのムチ！」

私はつるのムチを使って空高くジャンプしてマッドショットを回避した。

「火炎放射！」

グラードンの背中にヒトカゲが火炎放射を直撃させた！

「ほらほら！僕はこっちだよグラードン！」

「ガアアアア！！」

グラードンが鋭い爪をヒトカゲに振り落とした！だけど、今のヒトカゲはさっきとは違う。

グラードンの攻撃をヒトカゲは見切って避けた。

「つるのムチ！」

ヒトカゲに気をとられてるグラードンに私はつるのムチを巻き付けた。

「ギガドレイン！」

私はギガドレインを発動した。ギガドレインは相手の体力を奪って自分の体力を回復する技なの。巻き付けてあるつるのムチからグラードンの体力を奪い取ってやるわ！

「ガアアアア！！」

「きゃあ！？」

無理矢理つるのムチを振り解かれた！

そして鋭い爪を私に振り落とした！

「アスカ！僕につるのムチを！」

「う、うん！つるのムチ！」

私はつるのムチを反対側にいるヒトカゲの手に巻き付けた。

「それ！」

ヒトカゲはつるのムチを引っ張って私を引き寄せてくれた。

おかげでグラードンの攻撃を避ける事が出来た。「助かったわヒトカゲ！ありがとう！」

「さっき助けてもらったからね！」

「ガルルル・・・」

グラードンの口から炎が溢れ出してる？

あれは火炎放射？

いえ、火炎放射よりも高温の炎だわ・・・

何にしてもあれを受けたらまずいわ。

「サイケ光線！」

いきなり何処からかサイケ光線が放たれてグラードンの顔に直撃した！

突然の攻撃で集中力を乱したグラードンは技を出せずに終わった。

「フリーデン！」

「遅くなってすまん！」

だがお前達のおかげでリザードン達を安全な場所まで運ぶ事が出来た。

ここからはワシも協力するぞ。」

強力な助っ人ね！

「グオオオオ！？」

突然グラードンの足下が陥没した！

グラードンの足が地面に埋まり身動きが出来なくなった。

「待たせたな皆！トラップ成功だぜ♪」

やってくれたわねグライガー！良し！

「皆！今よ！」

「OK！火炎放射！」

「シザークロス！」

「サイケ光線！」

「ソーラービーム！」

私達は一斉にグラードンを攻撃した！

全ての技がグラードンに直撃して大きな爆発が発生した。

「グオオオオオ・・・」

グラードンは倒れた！

「やった・・・」

グラードンを倒す事が出来て安心しちゃったみたい・・・身体から力が抜けちゃったわ・・・

「やったねアスカ。」

「うん。」

「アスカ・・・お前達のおかげでグラードンを鎮める事が出来た。礼を言うぞ。」

「良いのよ。それより、バンギラスやヒトカゲのお兄さんは？」

「・・・俺らならここだ・・・」

バンギラスとヒトカゲのお兄さんがゆっくりとこっちに来た。

「兄さん！！」

ヒトカゲはお兄さんに抱きついた。

「イテテテ・・・お、おいヒトカゲ、あまり強く抱きつかないでくれ・・・」

「あっごめん兄さん・・・でも、無事で良かったよ・・・」

ヒトカゲの目から少し涙が出ていた。

お兄さんの事凄く心配してたもんね・・・

「・・・心配かけてすまなかったなヒトカゲ・・・」

「・・・誰か俺の事を心配してくれた奴はいないのか？」

バンギラスがちょっと悲しそうに言った。

「うーん・・・正直あまり心配してなかったわねえ。」

「そりゃねえよ（泣）」

皆から笑い声が聞こえてきた。

「冗談よ冗談（笑）さあ皆、地上に帰りましょう！皆心配して待ってるわよ！」

私達は地上へ、皆が待ってるポケモン広場へ帰る事にした。

第二十話 地底での対決！VSグラードン！（後書き）

第二十話完成です。

第二十一話　私の役目。（前書き）

ヒトカゲのお兄さんやフーディン達を助ける事が出来て本当に良かったわ・・・

第二十一話　私の役目。

グラードンを倒して鎮める事が出来た私達はあなぬけの玉を使ってポケモン広場にテレポートして帰って来た。

さすがに疲れたわぁ（汗）今日は帰って早く寝たい・・・

「おゝ帰って来たぞ！」な、何？ダーテングやその他大勢のポケモンが向かって来た。

その中には先にあなぬけの玉を使って戻って来ていたカメックスやオクタン、それにゴローニャもいた。

「やったなあお前達！」

グラードンを鎮める事が出来たんだって！？」

「凄いですアスカさん！僕もう感激です！」

えっ？えっ？

皆なんで知ってるの？

「どうして皆地底の出来事を知ってるの？」

私の代わりにヒトカゲが皆に聞いてくれた。

「ペリッパーさんが号外で教えてくれたんです！」キャタピーちゃんも答えてくれた。

ペリッパーがねえ・・・一体どうやって情報を掴んだのかしら？

「本当にスゲーよお前ら！」

「同じ救助隊として尊敬するよ！」

他の救助隊の皆に誉められた。

な、何か・・・そういう事言われると照れちゃうわね（照）

「・・・皆がお前達の事を認めたみたいだな。

アスカ、ヒトカゲ。

お前達はもう一流の救助隊だ。」

フリーデインが笑顔で言った。

「僕達が一流の救助隊・・・そ、そうかなあ？」ヒトカゲは頭に手を当てながら言った。

「お前やアスカのおかげで俺達は助かった。それにグラードンを鎮める事も出来たんだ。胸を張れヒトカゲ。」

ヒトカゲのお兄さんは優しい表情でヒトカゲに言った。

「兄さん・・・」

『・・・』

ん？何、今の？

「今何か聞こえなかったか？」

バンギラスが辺りをキョロキョロとしながら言った。
私だけじゃなくバンギラスにも聞こえたんだ。

『・・・』

あつまただ！

何なんだろう？

「僕も聞こえました！」 えっキャタピーちゃんも？

「誰かの声・・・なのかな？」

もしかして皆にも聞こえてるの？

「この声・・・何処かで聞いた事あるような・・・何処だったかなあ？」 ヒトカゲが考え始めた。「・・・あっそうだよ！この声は精霊の丘にいるネイティオだ！」

ネイティオ？

・・・あゝ！言われてみれば確かにそうだわ！

「テレパシーでワシ達に語りかけているようだな。」

『・・・ポケモン達につぐ！ポケモン達につぐ！大変だ！空から・・・星が・・・巨大な星が接近してきている！』

へえ！空から星がねえ・・・ってええ！？

『今までたくさん自然災害が起き、世界のバランスが崩れたのもこの星が少しずつ近づいて来てたせいだったんだ！』

・・・このままだと・・・大地に衝突し・・・大変な事になる！
なんとかしなければ・・・』

星って事は隕石って事よね・・・それがこの星に衝突なんてしたら・・・めっちゃくちやまずいじゃないの！？

「ネイティオ、教えてくれ。星の衝突を防ぐ方法はあるのか？」
フリーデインがネイティオに質問した。

『・・・一つだけ方法はある。レックウザだ。』レックウザですって！？

「レックウザ？アスカ、誰だか解る？」

「遙か天空に住んでるって言われる伝説のポケモンよ。グラードンよりも強くて、強力な破壊光線を使うって聞いた事があるわ。」

『その通りだ。レックウザに頼み、天空から星を破壊するんだ。』

「でもネイティオ、レックウザに頼むのは良いけどどうやって天空まで行くのよ？」

『私とフリーデイン。』

二人の力を合わせればなんとかなるだろう。だが、天空は未開の場所。飛ばされたポケモンがどうなるのか・・・私にも解らない。』

「・・・僕達が行くよ！天空へ！良いよねアスカ？」

「そんなの当たり前でしょヒトカゲ？」

「・・・ワシもお前達しかいないと思っていた。だが、良いのか？何が起きるか解らない雲の上だぞ？」

フリーデインは心配そうな表情で私達に言った。

「危険は承知だよ。」

「世界の危機にジツとなんかしてられないわよ。」

『アスカ、ヒトカゲ。』

ネイティオだ。これから私とフリーデインはお前達を天空へ飛ばす方法を考える。

出発は明日だ。

それまで休んでいてくれ・・・危険な冒険だが、頼む。頑張ってくれ。』

「任せてよ。アスカ、頑張ろうね！僕達ならきつと出来るよ！」

「ええ！」

私とヒトカゲは明日に備えて休む為に家に帰る事にした。

「えーっと・・・体力を回復させるオボンの実に麻痺を治すクラボの実、あとは・・・」

私は家で天空へ行く為の準備をしていた。

「そういえばフリーディンから道具をもらったわね。えっと・・・俊足玉だったわね？」

俊足玉。フリーディンが言うにはこれを使うと自分と味方のスピードを上げてくれるらしいんだけど・・・本当かしら？

まあ無いよりはマシよね？私は俊足玉もバックの中に入れた。

「よし！準備OK！」

やっと準備が終わったわ。そろそろ明日に備えて寝ないと・・・

「・・・ケケケ・・・大活躍じゃねえか？」

アスカさんよう？」

この嫌味な喋り方は！？

私が振り向くとそこにはゲンガーがいた！

「ゲンガー！」

「ケケケ・・・驚いたぜ？まさかお前も昔人間だったなんてよ。」
お前も？

「まるであんたも前は人間だったみたいない方ね？」

「ケケッ！そりゃそうさ！だって俺は本当に人間だったんだからな！
まあキュウコンの尻尾を掴む前の話だな！」

「なんですって！？まさか、あんたがキュウコン伝説に出てきた人間だっての！？」

「おっと！喋り過ぎたな！悪いがお前を天空へ行かせる訳にはいかないんだよ！催眠術！」

ゲンガーは私に催眠術を掛けてきた。

私は強烈な睡魔に襲われた。

私はなんとか耐えようとしたけど、耐えきれずに眠ってしまった。

「ケケッ！こんな世界なんか消えちまえば良いのさ！俺をポケモンに変えた奴がいる・・・こんな世界はよ！」

「く、苦しい・・・」

私はとても暗い所にいた。多分、ここは夢の世界。ゲンガーが私に夢喰いを使って攻撃してるからこんなに苦しいんだと思う。

早くなんとかしなきゃ・・・でも、一体どうすれば・・・

私が打開策を考えてる時、突然暗かった世界が徐々に優しい光に満ちた明るい世界に変わっていった！

「あれ？ 苦しくない・・・」

いつの間にか私を襲っていた苦しみが消えていた。何が起きたのかしら？ 「・・・アスカさん。」この声は・・・

「サーナイト？」

私が名前を呼ぶと目の前にサーナイトが現れた。「もう大丈夫ですよ。誰だか知らないですけど、私がアスカさんを守りますから。」もしかして・・・サーナイトが私が受けてた夢喰い攻撃を代わりに受けてるの？

「大丈夫ですよ。そんな心配そうな顔をしなくても。夢喰いは眠っている相手にしか効きません。私は眠ってませんから。」笑顔でサーナイトが言ってくれた。

「それよりも、今日は大事な話があります。」

「・・・私がなんでポケモンになってこの世界に来たのかって事？」

「はい。アスカさん、あなたはこの世界を救う為にポケモンになってやって来たんです。」

「・・・へっ？」

世界を救う為にやって来た・・・私が？

「私達はこの世界が危機にひんしている事を知り、世界を救ってくれる救世主を捜し求めて来ました。ですが、何処に行っても見つからずなかば諦めかけた時、一人の人間に出会いました。」

それがアスカさん、あなただったんです。」

「ハ、ハハハ・・・ま、またそんな大袈裟なあ・・・私は救世主なんてだいたいそれじゃやないわよ？」

「はい。初めてお会いした時もそうおっしゃってました。私はそんな力を持ってないと。」

でも私達が求めたのは見せかけの力ではなく、真の勇気です。」

「真の勇気？そんなもの・・・持ってないわよ・・・」

「それもお会いした時そうおっしゃってました。ですので、あなたはその後こう言ったんです。」

私が救世主としてふさわしいかどうか、見極めてほしいと。

そしてもしふさわしいと解った時・・・その時になったら教えてほしいと・・・そしてアスカさんは無心で挑む為に人間の記憶を消し、仲間と共に戦う為に自らポケモンとなって、この世界にやって来たんです。」

私が・・・そんな事を言ったんだ・・・

「アスカさんの勇気は証明されました。」

アスカさんは間違いなくこの世界を救う事が出来る救世主です。そして・・・アスカさんの救世主としての役目も、もうすぐ終わろうとしています。」

「・・・星の衝突を防ぐ事ね。」

「はい。そしてそれが達成された時、アスカさんは人間の世界に戻れます。」

「・・・帰れるんだ・・・私・・・でも・・・それは・・・」

「・・・ええ。ヒトカゲさんと、お別れしないといけません。」

ヒトカゲと・・・別れる・・・

「ヒトカゲさんはアスカさんの事を・・・かけがえのない存在だと思っています。ですから、アスカさんがいなくなれば・・・ヒトカゲさんはとても悲しがるでしょう・・・

ですが、これだけは仕方ありません。

出合いがあれば別れもあります・・・

私にもかけがえのない人がいました。

とても大切な存在でしたが・・・何処かへ行ってしまった。いなくなるのはとても悲しいです。

でも・・・いつかまた会える・・・私は、そう信じているんです。」
サーナイト・・・

サーナイトと話してた時、一瞬だけ強い光が発生して夢の世界を包んだ。

「今のは？」

「・・・先程アスカさんを攻撃してた誰かみたいですネ。

私達の会話を聞いていたみたいです。

でも、何処かへ去って行ったみたいですネ。

・・・この世界に悲しい感情を残していきました。泣きながら走り去って行つたみたいです。」

・・・ゲンガーね。

サーナイトの気持ちを知ったから・・・

「・・・もうすぐ朝ですね・・・私はこれで。

アスカさん、どうか世界を救って下さい・・・。」

「・・・うーん・・・」私は目を覚ました。

まさかゲンガーの催眠術で眠らされたまま朝を迎えるなんて・・・

「・・・ヒトカゲと別れる・・・。」

星の衝突を防いで、世界を救ったら私は人間の世界に戻る・・・

だけど、ヒトカゲと別れる事になる・・・

そんなの嫌だよ・・・

私・・・ヒトカゲともっと一緒にいたいよ・・・でも、世界を救わ

ないと・・・ヒトカゲが・・・皆が・・・

「・・・私がやらなきゃ・・・やらないといけないんだ!」

私は覚悟を決めた!

ヒトカゲと別れるなんて本当は嫌だよ・・・だけど、ヒトカゲや皆が死んじゅうのはもつと嫌だ!「良し!」

私はバックを持って外へ出た。

もう外にはヒトカゲが待っていてくれた。

「おはようアスカ。」

「おはようヒトカゲ!ちゃんと準備出来てる?」

「もちろんだよ。アスカも準備は大丈夫みたいだね?」

「当たり前でしょ?さあ、急いでフリーディンとネイティオの所に行きましょう!」

「うん!」

私とヒトカゲはフリーディンとネイティオが待っている精霊の丘に向かった。

第二十一話 私の役目。(後書き)

第二十一話完成です。

第二十二話 天空へ。最後の冒険。VS レックウザ！

私とヒトカゲが出発してから数時間。

ようやく精霊の丘に到着した。

精霊の丘にはネイティオとフリーデンがいた。

「フリーデン！」

「待っていたぞ二人共。」

「クワアアアア！！」 な、何！？ ネイティオがいきなり雄叫びをあげた！？ 「な、何をしているのネイティオは？」

ヒトカゲがフリーデンに聞いた。

「もう少しで完成するのだ。テレポートの結晶が。」

テレポートの結晶？

「クワアアアア！！」 またネイティオが雄叫びをあげる。

すると、ネイティオの目の前に光が集まり始めた。その光は一つの結晶へと変わっていった。

「・・・完成だ。これがテレポートの結晶だ。」

アスカ、受け取れ。」

ネイティオが私にテレポートの結晶を手渡してくれた。

「そのテレポートの結晶が天空まで飛ばしてくれる。エスパーの力を集めて作ったのだ。」

私とフリーデンと・・・おや？」

急にネイティオが辺りをキョロキョロしだした。誰かを捜しているみたい。

「あと一人ゴーストタイプのポケモンが協力してくれたのだが・・・何処かへ行ってしまったようだな。」

ゴーストタイプのポケモン？ 一体誰が・・・まさかアイツ？

いや、まさかね・・・

「ところで・・・お前達に確認しておきたい事がある。」

「何フリーデン？」

「・・・今回は相当危険な冒険だ。それでも行ってくれるのか？」

「もちろんさ。レックウザに頼んで星を破壊してもらわないと、世界は大変な事になるんだよね？僕は世界が平和になってほしい。

僕はアスカや・・・皆と一緒に平和に暮らしたいんだ。」

ヒトカゲ・・・でも、星を破壊して世界が平和になれば・・・私は人間の世界に戻らないといけない・・・これが・・・私とヒトカゲの最後の冒険になる・・・そして一緒にいられるのも・・・

「アスカ？大丈夫？何かぼーっとしてるけど・・・」

隣にいたヒトカゲが私の顔を覗き込むように見ている。

「ご、ごめんヒトカゲ！私は大丈夫だから！」

「そう？なら良いけど・・・ねえアスカ。」

「な、何？」

「僕・・・アスカに伝えたい事があるんだ。」

ヒトカゲが真剣な表情でそう言った。

「伝えたい事？」

「うん。無事に地上に帰って来れたら・・・ちゃんと言うよ。」

何だろ・・・ヒトカゲが私に伝えたい事って・・・

「さあアスカ！気合い入れて行くよ！」

「うん！」

私とヒトカゲはレポートの結晶に触れた。

すると、結晶が輝き出して私達を光で包んだ。

「頼むぞ二人共・・・」

しばらくすると私達を包んでいた光が消えた。

そして辺りを確認するとフリーディンやネイティオがいなかった。

「あれ？フリーディンとネイティオは？」

ヒトカゲは辺りをキョロキョロとしている。

「どうやら私達はテレポートしたみたいね。

ヒトカゲ、下を見てみて。」

私はヒトカゲに下を見るよう言った。

さっきまで地面に立っていた私達が、今立っているのは・・・

「えっ！？ここ雲の上！？」そう。ヒトカゲが言う通り、私達は雲の上に立っている。

ちゃんと天空に來たみたい。

「あっアスカ、あれ！」ヒトカゲが何かを指差している。

その先を見ると、そこには白い大きな雲がまるで巨大な塔のよう

に存在していた。

名前を付けるなら天空の塔ってところかしら？

「凄い・・・もしかして、あの雲の上にレックウザが？」

「多分ね。慎重に行くわよヒトカゲ。」

「解ってるよアスカ。」私とヒトカゲは天空の塔を登り始めた。

天空の塔を登り始めて数時間。

まだ最上階に着かない。それに多分まだ半分も登ってないと思う。何故なら床がところどころ抜けていて思うように進めないから。落ちたら最後、地上までまっ逆さま。

それに床が雲で出来てるから何処が抜けているのが全く解らない。もう何回も私とヒトカゲは落ちそうになっている（汗）

でも、思うように進めないのは床が抜けているだけじゃない・・・

「ヒトカゲ！後ろから来たわよ！」

「解ってる！火炎放射！」私達の真後ろから突然ポケモンが現れた。ヒトカゲの火炎放射でそのポケモンを倒す事が出来た。

「またヌケニンか・・・」私達が中々進めないもう一つの理由。それはこのヌケニンを含めるゴーストタイプのポケモン達。

雲の中から突然現れて私達を襲ってくるの。

まだ普通のゴーストタイプなら私でも倒せるんだけど、このヌケニンだけはどうしようもない。

効果抜群の技しかダメージを与えられない不思議な守りと言われる特性のせいでね（汗）

虫タイプに効果がある炎技を使えるヒトカゲだけしかヌケニンを倒す事が出来ない。

本当に厄介な相手よ（汗）

それからさらに数時間が経過。

やっと半分を超えたところかしら？

まだ先は長そう(汗)

「アスカ！」

急にヒトカゲが叫んだ。何事かと思い、私はヒトカゲが見つめている先を見てみた。

「・・・団体さんのご登場みたいね。」

私達が見つめる先にはたくさんのポケモン達がいた。こっちに向かって来ている。

「ドラゴンタイプのフライゴン、ゴーストタイプのサマヨール、飛行タイプのプテラ、草タイプのトロピウス・・・それぞれ二匹ずつの合計八匹・・・」

「二対八・・・数では圧倒的不利だね・・・」

ヒトカゲの言う通りね・・・だけど、ここで引き下がる訳にはいかない！「ヒトカゲ、日本晴れをお願い。私のソーラービームであいつらを・・・」

「待ってアスカ。ここは僕に任せて。」

そう言ってヒトカゲはポケモン達に向かって行った。

「ちょっとヒトカゲ！？何をする気！？」

「まあ見ててよ！まずは日本晴れ！」

ヒトカゲは日本晴れを発動した。

陽射しが強くなってきた。

「行くよ、兄さんから教わったとおきの技。オーバーヒート！」

ヒトカゲは八匹のポケモン達に向かって凄まじい炎を放った！

オーバーヒートの炎はポケモン達を包み込み激しく燃え盛った！

「ふう・・・こんなもんかな？」

オーバーヒートを受けたポケモン達は目を回して倒れている。

日本晴れで炎技の威力を上げた事もあるけど、ヒトカゲのオーバーヒートがかなり強力だったみたいね。

「ヒトカゲ、あなたいつオーバーヒートを使えるようになったの？」

「昨日の夜だよ。兄さんに教えてもらったんだ。きっと役に立つか

らってね。」

ヒトカゲのお兄さんが・・・

「さあ、もう誰もいないみたいだから先に進もう！」

「ええ！」

私達は更に上を目指して進み始めた。

それから更に数十分。

かなり登って来た。

もう少しで天空の塔の最上階に到着出来そうね。

「このフロアを登ったら最上階かな？」

「多分そうね・・・今のうちに体力の回復をしないとの方が良いかもね。」

ヒトカゲ、これを。」

私はヒトカゲに体力の回復してくれるオボンの実を渡した。

ヒトカゲはオボンの実を食べた。

私も回復する為にオボンの実を食べる。

「これで良し・・・ふう・・・行くわよヒトカゲ！」

「OK！」

気合いを入れ直して私達は最上階に向かった。

「ここが・・・最上階・・・」
さすが天空の塔の最上階。床の雲以外には何も無い。青い空が広がっていた。

「誰だ！？我が領空を侵すのは！？」

突然誰かの声が聞こえてきた。
ただど声だけで姿は見えない。

「今の声・・・もしかしてレックウザ？」

「いかにも。ここは我が領域。早々に立ち去れ！」領域に勝手に入
ったからレックウザはかなり怒っているみたい(汗)

「そうはいかないよ！僕達はレックウザにお願いがあつて・・・」
「ならん！！」

怒鳴り声と共にレックウザが姿を現した！

「我は天空に生き、そなたらは地上に生きる者！それぞれ定められた場所があるのだ！

我は何億年もの間、一度も地上に降りた事が無い！それはまた逆もしかり！自然の掟を侵す者は容赦せぬ！覚悟しろ！」
レックウザは戦闘体勢に入った。

「くらえ！ドラゴンクロー！」

レックウザはその鋭い爪で私達を切り裂こうと攻撃してきた！
「ヒトカゲ！」

「解ってる！」

私はレックウザの右側へ、ヒトカゲは左側へ飛び、ドラゴンクロウを回避した。

「止めてレックウザ！私達が戦っている間にも星が・・・」

「噛み砕く！！」

私の声は聞こえていないのか、レックウザは私に噛みつかうとしてきた！

「アスカ！こっち！」

ヒトカゲが右手を上げて言った。

「つるのムチ！」

ヒトカゲの右手に私はつるのムチを巻き付けた。

「それっ！」

ヒトカゲはつるのムチをたぐり寄せて私を噛み砕く攻撃から助けてくれた。レックウザの噛み砕く攻撃は雲に直撃した。

「助かったわヒトカゲ！ありがとう！」

「どういたしまして！」

・・・あれ？レックウザは何処に？」

ヒトカゲに言われて後ろを振り向く。

ついさっきまでそこにいた筈のレックウザがいなくなっていた。

「何処を見ているお前達？」

背後から突然声が聞こえた！私達が振り向くとそこにはレックウザが！

「ドラゴンクロウ！！」不意打ちをされた私達はレックウザのドラゴンクロウをまともに受けてしまった。

吹き飛ばされる私達。

「くっ！？」

私はなんとか踏ん張って体勢を立て直す事が出来た。

「とっとっ！？」

ヒトカゲも踏ん張ってるけど落ちそうになっていた！

「つるのムチ！」

私はヒトカゲにつるのムチを巻き付けて引き寄せた。

「大丈夫ヒトカゲ？」

「うん大丈夫、助かったよアスカ！」

「我がドラゴンクローを受けて倒れぬとはな・・・少しは出来るようだな？」

またいつの間にか目の前にレックウザがいた！

こんな大きな身体をしているのに凄く動きが速い・・・何か技を使っているのかしら・・・

「お返しだ！火炎放射！」ヒトカゲがレックウザに向かって火炎放射を放った！

「我にそんな攻撃は当たらん！」

火炎放射が当たる寸前、レックウザが一瞬でその場から消えた！

いえ、消えたんじゃない・・・目にも止まらぬ速さで移動したんだ！

素早く動く技・・・

「もしかしてこれは神速？」

「良く解ったな？」

背後からレックウザが喋りかけてきた！

「確かに我が使っているのは神速だ。」

だが、いくら技が解ったからと言って対処出来なければ意味がない！
ドラゴンクロー！！」

またレックウザはドラゴンクローで私達を攻撃してきた！

「そう何度も同じ攻撃を受けないよ！火炎放射！」ドラゴンクローが直撃する前にヒトカゲがもう一度火炎放射を放った！

「神速！」

だけど、レックウザは神速を使って素早く動きヒトカゲの火炎放射を回避した。

「言ったであろう！我にそんな攻撃は当たらんと！」

確かに。あんなに素早く動く相手に攻撃を当てるのは簡単じゃない。

私達のスピードではまず無理・・・この道具に賭けるしかないわね。
フリーデンからもらったこの俊足玉を。

「お願い・・・私達に力を貸して・・・」

私は俊足玉を使った。

すると、玉は光輝きだして私とヒトカゲはその光に包まれた。

しばらくすると光は消えた。

・・・不思議な感じ。

身体が凄く軽い。

「アスカ、なんだか今ならレックウザのスピードに負けない気がするよ！」

「私もよ。さあヒトカゲ、反撃開始よ！」

「了解！火炎放射！」

ヒトカゲは火炎放射を放った！

火炎放射がレックウザに迫る！

「神速！」

レックウザは再び神速で火炎放射を回避した。

だけど！

「逃がさないわよ！つるのムチ！」

私はレックウザと同じスピードで移動しながらつるのムチをレックウザに巻き付けて動きを封じた！

「何！？」

「今よヒトカゲ！」

「高速メタルクロー！」俊足玉の効果で素早く動けるようになった
ヒトカゲは素早く動きながら連続でメタルクローをレックウザに直
撃させた！

「くっ！？調子に乗るなお前達！原始の力！！」

レックウザの周囲にエネルギーの塊が出現した。そのエネルギーが
私達に向かってきた！

だけど、今の私達は俊足玉の効果で素早く動く事が出来る。

簡単に避ける事が出来た。

「ならばこれでどうだ！」レックウザの口に物凄い高エネルギーが集まり始めた！

まさか・・・破壊光線！？「くらえ！破壊・・・」レックウザが私達に向かって破壊光線を放とうとした。だけどその時、突然床が大きく揺れだした！その揺れに驚きレックウザは破壊光線を放つのを中止した。

「地震！？いや、そんな訳がないか？だってここ遙か上空なんだから・・・」

「これは衝撃波だ！しかも凄まじい！」

衝撃波・・・そうか！

「レックウザ！上を見て！」

私はレックウザに上を見るよう言った。

「なんだあれは！？」

レックウザが見つめるその先にはとてつもなく大きな星があった。もうこんな近くまで来ていたなんて・・・

「とびきり大きな星だよ！あの星が落ちたらこの世界は大変な事になる！だから、僕達はレックウザにあの星を破壊してもらう為に頼みに来たんだ！」

「・・・そうだったのか・・・」

「お願いレックウザ！あの星を破壊して！」

「・・・その前に、一つ聞く。星が接近しすぎている。この距離で我が破壊光線を放てば・・・そなた達も無事ではすまないぞ？」

「覚悟は出来てるさ！」

「良くぞ言った。」

レックウザの口に高エネルギーが集まり始めた。「破壊光線！！」レックウザの破壊光線が星に放たれた！

破壊光線は星に直撃し、凄まじい爆発と共に星は破壊された！

だけど、星が近くにあった為にその爆発が私達に向かってきた！

「きゃああああ！？」

「うわあああ!？」

爆発は私達を飲み込んだ。それと同時に私は意識を失った・・・

第二十二話 天空へ。最後の冒険。VS レックウザ！ (後書き)

第二十二話 完成です。

エピソード

（・・・ここは？一体ここは何処？）

私は何処だか解らない不思議な場所にいた。

周りには何も無い・・・全くの無の世界だった。（なんでだろ・・・身体に力が入らない・・・）どれだけ身体に力を入れようとしても全く力が入らない・・・それに、声を出そうとしても全く声が出ない・・・

（なんで私はここに・・・ああそうか・・・星を破壊する為にレックウザが破壊光線を放って・・・星は破壊出来たけど、その時に発生した爆発に巻き込まれたんだっけ・・・私・・・死んじゃったのかな？）

「ケケケ・・・」

突然何処からか不気味な笑い声が聞こえてきた。（この声は・・・もしかしてアイツ？）

「ケケッ！アスカ、こんなんでくたばっちゃったのかよ？ざまあねえな！さて、こいつをどうしてやろうかなあ♪」

私の目の前にゲンガーが現れた。

「そうだ！このままアスカを闇の世界に引きずりこんでやる♪」

そう言ってゲンガーは私の前足を掴んで引きずり始めた。

抵抗したいけど、身体に力が入らないから抵抗出来ない・・・

（・・・闇の世界・・・ゲンガーは確かにそう言ってた・・・闇の世界って・・・やっぱりあの世なのかな？

私・・・どうなっちゃうんだろ・・・）

ゲンガーに引きずられて数分。突然ゲンガーはその場で止まった。
「・・・俺とした事が、道を間違えちゃったみたいだな・・・どっちがどっちだか解らねえ・・・」ゲンガーは辺りをキョロキョロとしながらそう言った。

「仕方ねえ。アスカはここに捨ててるか。
ケケッ！あばよ！」

ゲンガーは私を放置して何処かへ行ってしまった。

「・・・おい・・・しっかりしろ・・・」

誰かの声が聞こえる・・・誰？

「しっかりしろ！」

「・・・うう・・・」

私はゆっくりと目を開けた。

周りには心配そうな表情をしながらフリーディンやヒトカゲのお兄さん、それに他の皆が私を見ていた。

「ここは・・・」

私は周りを確認した。

ここはどうやら精霊の丘みたい・・・

「おー！意識が戻ったぞ！」

フリーディン達が喜びの声をあげた。

「うーん・・・」

「おっ！リザードン、お前の弟の意識が戻ったぞ！」

バンギラスがヒトカゲのお兄さんに言った。

お兄さんは慌ててヒトカゲに駆け寄った。

もちろん私も。

「ヒトカゲ！」

「・・・あれ？兄さん？」

「良かった・・・」

ヒトカゲのお兄さんは涙を流しながらヒトカゲに抱きついた。

「ったく・・・兄ちゃんを心配させるなよな・・・」

「・・・ごめん、兄さん・・・そうだ！アスカは？」

「ここにいるわよヒトカゲ。」

「良かった。アスカも無事だったんだね。」

「ええ。」

・・・もしかして、アイツが・・・ゲンガーが助けてくれたのかしら・・・

「あっそうだ！？星は？星はどうなったの？」

「安心しろ。星は破壊された。すぐにではないが、自然災害も無くなるだろう。」

ネイティオが答えてくれた。

「そうなの！じゃあ、世界は平和になるんだね！アスカ、僕達やつんだね！」

ヒトカゲは笑顔で言った。私も笑顔で頷いて答えた。

「今日は世界が平和になった記念にお祝いだな！」ヒトカゲのお兄さんが笑いながら言った。

「祝砲にハイドロポンプを撃ちたいぜ♪」

カメックスが両肩からハイドロキャノン砲を出した。

「ってちよっと待て！？こっちに向くな！あっち向けあっち！」

カメックスの前にいたハスブレロが慌てている。「いや、撃て撃て♪」

ダーテングがふざけて言った。

「私が動かないように押さえておきますわん♪」オクタンがハスブレロに絡みついて動きを封じた。

「おっやるじゃんかオクタン♪」

皆揃って悪乗りしている（汗）

「冗談きついぞ皆！？勘弁してくれ〜！？」

ハスブレロは必死になっている。

それを見て皆が冗談に決まってるだろと言って笑っている。

・・・皆の笑ってる顔を見るの、なんだか久しぶりね。

『・・・アスカさん。』（この声は・・・）

私は声が聞こえた方に振り向いた。

そこには半透明なサーナイトがいた。

「サーナイト・・・」

『アスカさん達のおかげで世界の平和が守られました。本当にありがとうございます。』

サーナイトは頭を下げてお辞儀した。

『・・・アスカさんの役割は終わりました。

もうすぐ元の世界へ戻らなければなりません。

別れの時が来ました。』（別れの時・・・到頭来ちゃったのね・・・）

その時、何か光が私の身体から発せられた。

身体を見ると、私の身体が少しずつ光の粒子に変わっていた。

『アスカさん・・・辛いでしょが、皆さんにお別れを・・・』

そう言ってサーナイトはその場から消えた。

「あれ？アスカさん？」キャタピーちゃんが私の身体の変化に気づいた。驚きの表情をしている。他の皆も私の方を見て驚いている。

「アスカ！？その身体・・・ど、どうしたの！？」

一番驚いているのはヒトカゲだった。

「・・・ヒトカゲ、そして皆・・・ごめんなさい。私・・・今日で

お別れなの・・・」

私がそう言うのと更に皆は驚いた。

「ちょっと待ってよ・・・お別れって・・・どういう事？」

「私のポケモンとしての役目が終わったの・・・人間の世界に戻らないといけないのよ・・・」

「・・・どうして・・・どうしてさ？訳解んないよ！別れるなんて・・・やっとな・・・世界が平和になったのに・・・」

ヒトカゲの目から涙が溢れてきた。

「・・・本当にごめんなさいヒトカゲ・・・私、ヒトカゲの事絶対忘れないから！」

そう私が言った瞬間、私の身体が光の粒子に変わるスピードが早くなってきた。

「待ってよ・・・アスカ・・・」

「私、ヒトカゲに会えて本当に良かった・・・」

「・・・アスカがいなくなったら・・・僕は・・・」

「・・・さよなら・・・」その言葉を最後に私の身体は完全に光の粒子になった。

光の粒子となった私は遙か上空に向かって行った。

「アスカアアア！！」

光の粒子になった私はどんどん空高く登っていく・・・地上が凄く遠い・・・もうすぐ私は人間の世界に戻る・・・

皆・・・ヒトカゲ・・・

「・・・うう・・・」何？これは・・・誰かの泣き声？

「・・・なんで・・・なんでアスカさんいなくなっちゃったんですか？

僕良く解らないです・・・」

この声はキャタピーちゃん・・・それに、他にも声が聞こえる・・・地上にいる皆の声だ。

「何故・・・アスカがいなくなるといけないんだ・・・」

この声はヒトカゲのお兄さん・・・

「俺はアスカに命を救われた・・・だが、まだお礼が言えてない・・・お礼が言えぬまま・・・いなくなるなんて・・・」これはダーテング・・・

「・・・今思えば、天空に向かう時のアスカの表情・・・あれはまるで何かの定めを待ってたかのようなだった・・・」

ネイティオ・・・

「・・・きつと・・・きつとアスカは、僕達を助ける為にポケモンになったんだ・・・そして、星を破壊した時が・・・別れの時だった知ってたんだ・・・なんで・・・なんでもっと早く言ってくれなかったんだ・・・別れるって知ってたなら・・・なんで教えてくれなかったんだ・・・」

ヒトカゲ・・・声が震えてる・・・きつと泣いてるんだ・・・

「言いたくても言えなかったんだろ・・・」

お前が悲しむのと同じ位・・・アスカもまた別れるのが辛かった筈だ。

解ってやれ、ヒトカゲ。」フリーデン・・・

「・・・やっぱり嫌だよ。皆と・・・ヒトカゲと別れたくないよ・・・
もつと・・・一緒にいたいよ・・・」

『・・・アスカさん。』この声はサーナイト？

『・・・やっぱり・・・戻るの嫌ですか？』

「・・・私は・・・もつと皆と・・・ヒトカゲと一緒にいたい。」

『・・・ヒトカゲさんも・・・そして他の皆さんも同じ考えです・・・」

アスカさん。私の力で、あなたをこのままポケモンの世界に留める
事が出来ます。』

本当！？

『ただし、そうなればアスカさん。あなたは一生人間に戻る事が出
来ません。ずっとポケモンのままです。それでも良いのですか？』

「・・・それでも良い・・・ヒトカゲと・・・一緒にいれるなら！」

『・・・解りました。』

アスカさん、あなたの望み、私が全力で叶えます！』

気がつくとは私は私の救助隊基地の前にいた。

そして、すぐ近くにはヒトカゲが、他の皆もいた。だけど、まだ皆

私に気づいていない。

まだ私の身体は光の粒子のままみたい。

『アスカさん。強く願って下さい。この世界にいたいと!』

サーナイトの声が聞こえた。サーナイトに言われた通り私は願った。この世界にいたい・・・ヒトカゲとずっと一緒にいたいって!

すると、光の粒子だった私にどんどん変化が起き始めた。

私に身体が、チコリータの身体が戻って来たの! ポケモンとしての私の身体が元に戻るのにあまり時間が掛らなかった。

「・・・アスカ・・・さん?」

キャタピーちゃんが一番最初に私に気づいた。

キャタピーちゃんの声を聞き、他の皆も私の方へ振り向く。

そしてヒトカゲも・・・「・・・アスカ・・・本当に・・・アスカなの?」

「・・・ただいま。ヒトカゲ・・・」

「アスカ・・・アスカアアア!」

ヒトカゲが泣きながら私に抱きついた。

私もつるのムチでヒトカゲを抱いた。

「良かった・・・アスカに・・・また会えた・・・」

「私も・・・またヒトカゲに会えて・・・嬉しい・・・」
しばらくの間私達は抱きあった。

私がヒトカゲの所に帰って来てから翌日の夜。

「アスカこっちだよ！」私はヒトカゲに連れられてある場所にやってきた。そこは私とヒトカゲが最初に出会った森の中だった。

「懐かしいわねここ・・・」

「アスカ、横になって空を見てごらん。

星が凄く綺麗だよ・・・」いつの間にかヒトカゲは草の上に横になっていた。

私はヒトカゲの隣に横になって空を見てみた。
そこには満天の星が光輝いていた。

「綺麗・・・」

「ここは一番星が綺麗に見える場所なんだ。
・・・ねえアスカ。」

「何？」

「昨日僕が言った事覚えてる？」

昨日言った事？

あゝもしかしてあれ？

「私に伝えたい事があるって言ってた事？」

「うん。昨日はいろいろあって言いそびれたけど、今ここで言うね・・・」
「そう言ってヒトカゲは起き上がった。」

「なんでかな？私・・・胸がドキドキする・・・」

「アスカ。僕は・・・アスカの事が好きだ！
大好きだ！」

その言葉を聞いて私は赤面した。

「本当に僕はアスカの事が好きなんだ！

だから・・・これから・・・ずっと一緒にいてくれないかな？」
これって・・・プロポーズ・・・よね？

私は少し間をあけてからヒトカゲに答えた。

「・・・良いわよ・・・私も・・・ヒトカゲの事・・・大好きだから・・・」

「アスカ・・・」

その後、私とヒトカゲは・・・その・・・口と口を近づけて・・・キス・・・しました。

時間を忘れる位長い間・・・

私、今凄く幸せ・・・

私の好きなヒトカゲと・・・いつまでもずっと一緒にいられるから。

エピローグ（後書き）

読者の皆さん。

今までアスカの救助隊をご愛読いただきありがとうございました！

アスカの救助隊は無事、完結する事が出来ました！

今度は探検隊の方も書いてみようと思っています。応援、よろしく
お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880e/>

ポケモン不思議のダンジョン・アスカの救助隊

2010年10月11日00時31分発行